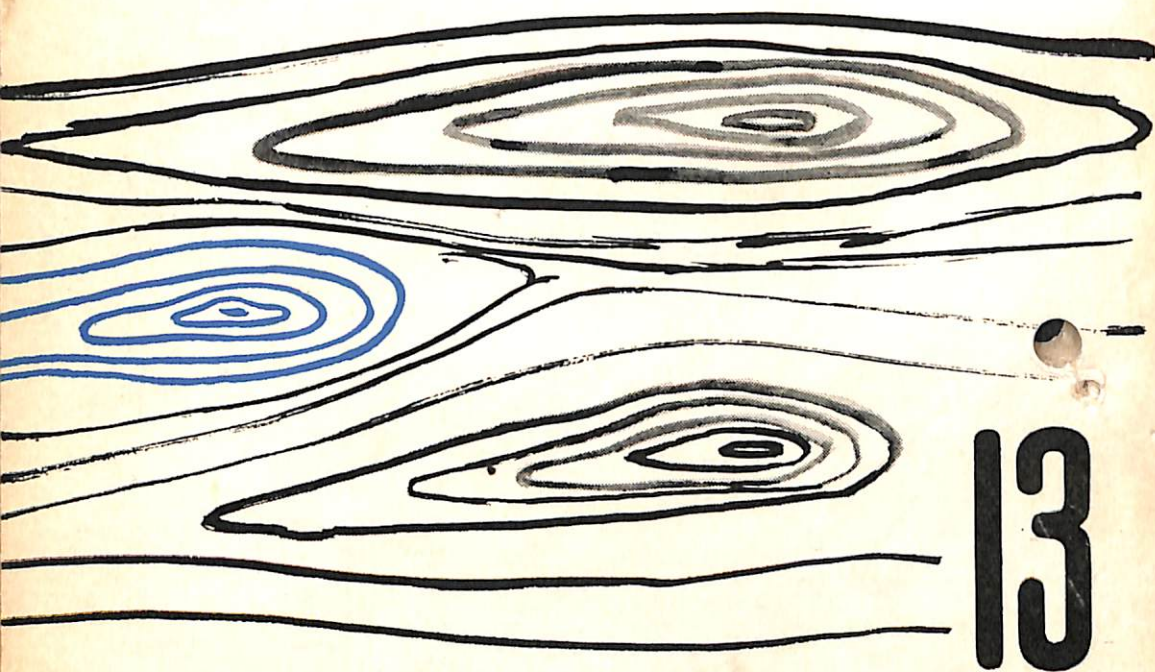


保存用
永久保存

	No. S - 66
東京都立松原高等学校図書	

La COEUR

都立松原高等学校図書館蔵書



東京都立松原高等学校

る。く-る



目次

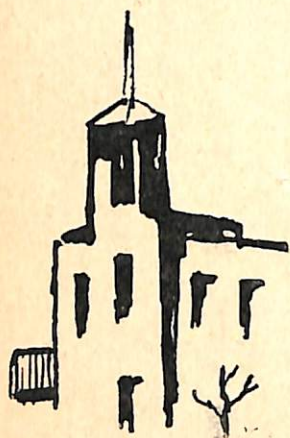
詩 卷頭言

憲子	校長井上連雄	4
光・灯・明	三年村上憲吾	6
彼と彼女	二年菅谷秀夫	8
富士山	二年山崎朱実	9
広島の涙	二年吉田昌雄	10
愛する君	〃	11
こわれた時計	二年福武享子	11
道標	一年岩島広美	12
晩夏の野で	二年平林政義	13
初秋	〃	14
流れ	〃	14
神よ	一年菅田富美江	15
『のうた』	二年木沢裕子	16
花の精	二年寺井清	17
おばあちゃまとあたしと雪	二年米川三千代	17
料理実習後	〃	18
貝殻の娘	二年大西恵子	19
J	二年滝井清	22
由木村(メモ)	二年田中正臣	26
鳥(ひもすどり)	二年河野照久	27

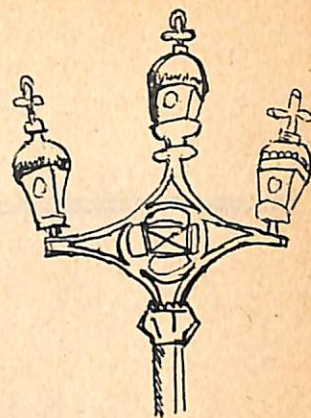
創作

随筆

研究ノート(憲法)	二年土屋明	34
『親と子』	一年志津雅美	38
孤獨	二年井上真喜子	48
光りと闇	二年辰巳知勝	68
昇日二郎について	二年大津佳明	78
悲しみ	二年宮崎裕之	97
愛	〃	98
独りぼっちの山道	三年行雲行人	98
読書雑記(日記より抜粋)	三年横山淳	101
サンボ	一年一瀬美江子	103
雑感	二年山崎朱実	105
冬の富士山麓を走る	二年大塚隆夫	107
編集後記		108



巻頭言



学校長 井上速雄

ル・クルールの巻頭の言葉を書くこと、この度で三回になる。もう言いつくしてしまい、新しいことも、なかなか湧いてきそうもない。しかし本校では唯一の生徒諸君の自由に発表できる機関誌であることを考えてみると、なんとかしてでもと思い直して書くことにした。いつも内容を知った上の巻頭の辞でなく、全然無関係で書くことを頼まれるのであるから、この度は趣向を多少変えて少し離れるかも知れぬが、むしろ基本的なものに触れて述べて見ようと思う。

ル・クルールの毎号を読んで

しっかりした自己を確立していなければ、随筆にしても、論文にしても、詩にしてもよいものが出来る訳はないと感じている。それにしても、この度発表された「期待される人間像」中間発表ではあるが、色々世上をにぎわせているが、無責任なる討論の多いのに驚かされる。

昭和三十二年の高等学校教育課程の改訂の時に、社会科学社会におけるの道德教育として、生徒に人世観、世界観をもたせることが大切だということで、これに関する教材を多く組込んだが、これに対しても、激しい反対意見が出た。

その大部分は空虚な感情的なものであった。その後も非行少年はふえる一方である時世を見ると一層この種の教育の必要さが考えられる。もっと直接的で、具体性をもたせる意味で三十六年より教育課程改訂の一環としてこの度の「期待される人間像」の発表となったと思う。

これについても前回にまさる強い反対論が出ている。批判するのも結構、反対するのもよい、その対策、それに代る可き解答が発表されなければ、反対のための反対論となる。

六十才以上の委員によって作成されたものだから、若い者には向かないとか、反動か、国家主義の復興とかいつもきまりきった文句しか言えないのではこの中間発表の内容の批判にはならない。

青少年は一日一日と生長しておる、教育も片時も休むまなく、行われなければならぬ。人世観も人間像もない教育では目標のない教育ともなる。戦争前の教育を連想して反対反対では、あつものにこりて、なますをふくたぐいと同一になる。もちろん、この度発表されたものが最終、最善のものとは言えない。これ以外の人間像があっても良い筈だ。反対非難によって、今迄かつて、大切なことがぼやかされてきた。それをくりかえすことになると思われる個人が大事な人間像をもたねばならぬことが忘れられてしまう。もっと大きな気持になり、各人がその内容を検討し、是非々主義で行くことが肝要であろう。その良いものは自分に取り入れ、その上修養、読書、宗教、経験等により内容を充実し、高めて行くことが必要である。良い人世観、人間観、世界観、人間像がなくて良い仕事も作品も出来る訳はない。

ル・クルールの内容が諸君の現在の水準を示している。しかも編集関係者が原稿を集めるのに苦労しているようでは甚だ心細い。このことはル・クルールの背後にはどんな生徒がいるかを語っていると思う。ル・クルールが年と共に良くなっているのは生徒自身をたかめて行かねばならぬ。

それには目標をしっかりもち、日々研鑽を怠りなく積むことができる。



憲子

藤村詩集「若菜集」にならって

憲子

三年村上憲吾

まだ憲子とのつきあいに
全くうとき頃なれば
女を意識するあまり
かたくてありしおろかなり。

大いなる日をむけられし
そのときめきは今の今も
体育祭の応援の
記念写真をとりかわす

ためらいつつも年賀状

□ 詩 □

その返事あり二日の夜
女文字連綿清く

くやまるる、この口一言
きずつきし二人の心
わが事をそのみ思う
夏休み、心おさまる。

武代

宮島はその朱その青
ヘアバンド髪は流るる
記念写真そのうしろより
広島は記念館望む

けだるきは夜行列車よ
救急箱求めて走る
その顔のその目きびしく
保健係武代の役目。

昼休みその図書館に
胸はずみ足はふるえる
えるついに来る、しかし返事
秋風は心にも、身にも。

和美

チボー家は、二人を近づけ、
その本は親しみを増す。
悪友のひやかす中に
語り合うジャックとジェンニ。

教室は二人残れる
わが心たしかに告げる
口閉ざし和美うつむく
その姿、終業の日に

純子

風ぬるく、ゆるゆる進む、
上野には、人の列あり。
見くらべるビーナスと純子
石貴しされどつめたく。

展覧会わが趣味なれど
ただ一人行くはさびしく
ただ一人共に行く者、
その一人純子これのみ。

船よいの朝は曇りて、

春代

大島は、山頂めざす。
霧ながれ、雨は追いかけて、
かけぬける純子とその友。
潮風はこころよけれど、
青空も心は晴れず、
友のいう純子見たりと、
探せども、やはり影なし。

校庭は音楽ながれ、
ダンスの輪、火に照りはえる
その顔は生き生きとして
組みし手に力おのずと。

全校のなみいる中に、
パートナーまたはなれゆく。
めぐり合うその時おそく、
文化祭、夜は終れる。

智子

二とせも三とせも会えず、
ただ送る一葉の葉書、
その姿変れる事か、

知りたくもそのすべはなく。

三とせたち、また葉書いだす、
今こそは、語りあわんと、
春風は、その髪をなで、
ほほえみは、今も絶えずか。

光・灯・明

二年 菅谷 秀夫

太陽は雲に隠されて
太陽は雲を赤く染め
太陽は人を赤くさせ
太陽は輝かずに
太陽は紅緋に燃えて
太陽は山の中に沈み。

水銀灯は青白く輝く
水銀灯は整然と並び
水銀灯は冷たく
水銀灯は藍空にギラギラと。

その側を自動車が

赤・緑・黄・青の点が遠のき
白い線は大きく弧を描き近づく
絶え間なく続く。

暗い空に紅を映して

太陽の残骸が

地上には街灯が橙色にボツンと
むこうには白い光灯が明るく。

その中をミルクのパールが静かに。

彼と彼女

カップルが公園に行く。
細い道を
ライトブルーの空からの冬日を浴びて
まっすぐに
どこまでも。

彼女のかみが躍る。

少しカールした先が彼の肩に幸を語りかける。

彼と彼女は霜だけの道に行く。

富士山

二年 山崎 朱実

夜は未だ明かず

列車の窓より見ゆる富士は

神々しく

かつ神秘的であった。

かすかに白らんできた、空

その空の紺碧さに

富士は、くっきりと浮き出て

絵画さながらの風景であった。

その昔、

人々は富士を見て

神とした。

そして

江戸時代の絵師は

富士にとりつかれたように

富士を描きつづけた。

が、しかし、

最後まで富士を書き尽くす事は

出来なかった。
最後まで富士の本体を知り尽くせなかった。

富士。

私はその裾野に立った時
夜はもうすっかり明けて
いつもの頂上に

一片の雲をおいた富士が
雄大さを誇り
そびえていた。

美しい女性の肌……

優雅さの中に

たくましさのある。富士。

ある時は、林の中の杉の影より
又、ある時は、草原の彼方より
目に入る。富士。

ふとふり返って 見ゆる時
はっとするほどの感動を覚える。
未だ 知り得なかった

富士を

その時見るのだ。

富士。

日本の象徴であり
いかなる時代の
万民より愛せられるもの。

私の心の故郷。

富士よ。



二年 吉田昌雄

広島の涙

みんな 涙を流しました。

熱い熱い 涙でした。

地面に伏して 泣きました。

あふれる涙をぬぐおうともせず

泣きました。

慰霊碑を見上げて泣きました。

でも 慰霊碑はもう答えてくれませんでした。

愛する君

我が愛する君よ。

君は偽善者だったのか。

逃避者だったのか。

苦しくとも、それに堪えていた君は

美しかった。

悲しくとも、泣かない君は美しかった。

しかし、今の君には美しさもない。

一つのものから送げる臆病な心で一杯の

君に 一かけらの美しさもあらうはずがない。

真実に目をつぶろうとしている君の、

何処に愛が生まれようか。

君は人間の愛を捨てた。

君の心にもう愛はない。

そして君は多くの人の幸せを捨て去った。

君の幸せも、ここにはない。

もし君が本当の愛を、

幸せを望むならば。

こわれた時計

いつだったか

二年 福武享子

一つの

ちいさい 希みが

乾いて 崩れていった

私の時計は こわれたのです。

誰もが

新しい時計を買いなさい と言うけど

にぎった箱を 一つずつひらいていった

最後の手の平ののっている

あの日を見てほしいのです。

細く つぶれたあの時計は

砂のようにこぼれて

残ったのは この一にぎりだけ。

あい。

あい。

語尾の寥しい声が

私の喉もとから出ていった

残ったのは この喉笛だけ。

誰もが

何でも知っているような顔をして

新しい時計を買いなさい と言うから

私は わざと

灰色の壁に叩きつけて

こなごなにしたのです。
花びらのように 光った
時計のかけらのうえに
私の もう
涸れた涙をふりかけたらと
又
虚しい希みを持ってしまふのです。
誰もが
新しい時計を買いなさい と言うけど
私は もう
要らないのです。

道 標

一年 岩 島 広 美

私は歩いていて。
梔子色い広い道を。
私は休むことを知らなかった。
その道が私の前方に広がっていたから。
安心して進んで行った。
銀色の太陽が歌い出しても、
真赤な星が踊り出しても、
ただ私は歩いていて。

—この知らない町はどこなの？
—そしてこの道はどこへ通するの？
答はなかった。
真青な町には人間はいなかった。
近くの山で
狼がおもしろおかしく吠えていった。
それでも私は聞きたかった。
私は聞きたかった。
むしように聞きたかった。
葡萄色のかれ道で
—左へ行くとどうなるの？
—右へ行くとどこへ出るの？
私は血眼になってあるものを捜した。
道標——。
それは しかしどこにもなかった。
晩だというのに家々には
灯さえついていなかった。
枯葉色の風が忍び泣きに泣いていた
そしてやっぱり私は聞きたかった。

ああ、私は聞きたい。
私は見たい。
この道の終りを私は確かめたい。

私は歩いていて。
十八時二十九分五十三秒。
萱草色の細い道を。
私は休みたかった。
その道はとぎれそうになっていたから。
私はちょっとしりごみした。
変にまあるい満月が 木立の間に
ヌッと顔を出して うすき悪く笑った。
しかし私はふり向きもせず歩いていた。

私は歩いていて。
どこへ行き着くのかも知れない
浅黄色の軽い道を。
私は聞きたかった。
—この道の終着駅はいつたいどこなの？
ひとつこひとりない荒れ果てた村に
金色の雲が忍び込んで来て
そっと涙を落した。
しかしやっぱり私は歩いていて。
私は聞きたかった。
一つの不安を心にいだいたから。
萌黄色の重い道を。
私は聞きながら進みたかった。

だが そこはあまりにも遠かった。
私は立ち止まることを知った。
道標を捜すために。
しかしこの世界にはなかった。
私は再び歩き出さなければならなかった。
真黒な空は舞う粉雪を呑みこんだ。
そして私をも呑みこもうとしていた。
しかしやっぱり私は黄色く厚い大雪を
かきわけかきわけ進んで行かなければならなかった。

晩夏の野で

二年 平 林 政 義

緑の野に 夏の終りの
淡い日は 暑かった
木梢には 小鳥が群れ
木影には 人々が 群れていた
雲間から溢れる 空の青の下で
身を横たえているほくを
そよ風が せみの音がおおっていた
へおまへは 何を求めて
へおまへは 何を待って
へおまへは 何ぜ一人で と

ほくは 答えるだろう
草がそよぐように
木の葉が ささめくように
細い雨足のように そして

白くおった カンパスを胸に
木の下に雨をよけ 一人
たたずんでいた あの少女は
どこへ行ってしまったのだろうか と。

初 秋

涼しい風 が心まで空しくする
明るい自分とは うらはらに
一人ぼっちの歌を
冷たい口びるが かなで始める

空は ますます高くなり
鳥の音も花の色も さえない世界で
ほくは いつまでも
一人つぶやき続ける。

日々くりかえす習わしは

もの煩しくなった
真に一人になれたなら
もう寂しさも 近づけまい と。

流 れ

知らなかったことを
やがて 知りつつ
年はくれ
新しい日の出が 訪れるだろう

今ではないことの すべてが
心に整えられたことさえ
ただ今となっては
愚かしさの かたみのみ

何も起らず
また すべてが変わった
このひととせ

明るさも 暗さも
長さも そして 短かさも
ただ ひとの心のみ

神 よ・・・

一年 菅田富美江

神よ
あなたは本当に正しいものを助け 邪悪な人を裁くのか
神よ……

神よ
あなたはなぜ人間をつくったのですか。
神よ……

神よ
あなたはどう思って人間をつくったのですか。
……神よ。

はじめから人間なんてつくらなければよかったのに……。
人間に「生」が与えられ その同時に「死」も与えられたのだ。
だから人間なんてつくらなければよかったのよ。
だから……人は死ぬ。万物の法則により……人は……死ぬ。

何億年前の星の光に比べたら人間の命なんて……。
その短い人生の間に その一個の人間は一体何をすればよいの

だろう……。
私に与えられた仕事は一体何だろう。

一個一個の人間……
同じ人間は決してこの世の中に存在しない。
どんなことがあっても一個の人間は一個の人間だ。
寂しい……寂しい一個の人間にすぎないのだ。
ああ、神よなぜあなたはそんな冷酷なことをしたのだろう。

だが その時私はみた。
ただ一すじの光を
それは それは 愛の光だった。
それがあるゆえに我々は結びついていいるのだ。
神よ

あなたはこの光もおつくりになったのね。
神よ あなたは偉大です。

何もない個体の上に 神よ あなたは愛をささげた。
それゆえに それゆえに 我々は生きていいるのだ。
ただ一本のその光のために
それがあるからこそ生きているのだ。
たとえ 目の前に「死」があっても我々は力強く前進する。
なぜなら そこに「愛」があるから。

この世の中をつくっているのは「愛の力」だ。
我々が「生」を保ちつづけるのは「愛」があるからだ。

神よ やつぱりあなたは偉大だった。
神よ やつぱり私は 神にはなれない。
ただのただの 人間であるだけだ。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

二年 木沢裕子

ほとぼしる様な気配であった
厚い
薄い
黄色い日が
木の間を通して落ちて来た

うぐいすは鳴いて居た
ホウホウキヨキヨ

水面に映る告知は澄んでいる
アメンボウがスイと横切って行った

赤と白の軟かい調和
それは本当に和やかなものだった

花の精

二年 寺井清

1 おまえは明るい花の精
今日も飛んでる

踊ってる

明るい春の草原で

2 おまえは楽しい花の精
綺麗な色に

綺麗な匂い

今日も楽しさふりまいて

3 おまえは優しい花の精
地面に倒れた虫達を

飛べなくなった虫達を
涙で祈っていましたね

4

ほとぼしる様な気配であった

連経は坊さんの数珠の様で
桃は赤ン坂の様であった
外は暑かった

——円覚寺にて——

苺のうた

つややかに光るその紅色は
楽しい 甘酸っぱい初恋の味です

瑞々しいその様子は
緑色のカサに被われて
きちんと修まって
独特な清潔な感じを与えます

そうっと握って
掌に乗せると

つぶれて了いそうで
またすぐ離して了いました

つややかに光る紅色には
嬉しさが溢れています

おまえはほんとに花の精
こんなに寒い冬の日も
おまえの瞳に写てる
楽しい明るい春の日が

おばあちやまとあたしと雪

二年 米川三千代

おばあちやまと二人の夜に
雪が降る。

さらさらの灰を
こんもり被って

ちろちろと
舌を出す

三片の炭に

おばあちやまと二人して
手をあぶって
ぬくまる。

おばあちやまと二人の屋根に
雪が降る。

とつぶりと黒い
遠く 潤んだ天を

くるくる舞って
ばあちやまの柿の木に
柔いからだを
横たえて
息を殺した
眼をつむるのを
ばあちやまと二人して
温いお部屋で
見ていた。

ばあちやまと二人の庭に
雪が降る。

料理実習後

一合の米を見て美しい友は言う
これっぽっち足りないわ
一合の米を手にとって賢い友は言う。
だけど一合で一日が助かる人もいるのよ。
一合の米をいじりながら
勉強家の自分は思う。
ほんとだわ。

一合の米をながめながら 太った友は考えこむ。
一合の米をといでそしてたくと
二倍になってかまから出て来る。
それにカレー汁をかけて四人で分ける。

四分の一合の米とカレー汁を見て美しい友は言う
あたしのどが痛い
四分の一合の米とカレー汁を食べて 賢い友は言う。
とてもおいしいわ

四分の一合の米とカレー汁を口に入れながら
勉強家の自分は思う。
やっぱり自分たちで作っただけあるわ。

四分の一合の米とカレー汁をながめながら太った友は汗を流す。

みんながみんな一つのテーブルで
四分の一合の米とカレー汁を食べる。

みんながみんな一つのなべから出した
同じものを食べながら
表情はそれぞれがう。

ああ何とこのテーブルは
多種多様の世画なのだろう。



貝殻の娘

□ 創作 □

二年大西恵子

そこは……そうです、エデンの園のようなところだったのでしょ
う。私は行ったことがないのでわかりませんが、でも、エデンの園
には行ったことがなくても、そこには——海の仲間はリーベの園と
よんでいました——行ったことがあるのです。

それは、去年の夏のことでした。あんまり暑いので私はこの東京
から逃げ出し、海の中にもぐりました。不思議なことに、私はちっ
とも苦しまずに、海の底に達することができたのです。するとその
時、一匹の真赤なかわいい魚が寄ってきました。魚は英語を話しま
した。私は、英語の能力すべてを出しきって応えました。それによ
ると、その魚はチャンコという名で、海の女神ロールキャベツにつ
かえているということでした。私はチャンコに案内されて、女神ロ
ールキャベツの元へ行きました。ふつう人間は、このリーベの園に

入れないのだそうですが、私は特別でした。リーベの園は……そう
ですね、真白な雪に青いライトをあてたような……そんな色をして
いました。深緑の海燥の森がところどころにあり、色とりどりの貝
殻のおうちが散在していました。ここに住むのは小さな者だけに限
られていたのです。私の案内された、女神ロールキャベツの部屋
は、思いつきの部屋でした。そのとおり、すべての思い出によって作
られているのです。飾られた一つ一つには、ロールキャベツの悲し
い思い出、楽しい思い出が、沢山秘められていることでしょう。

私がそんな感傷に浸っていると、女神ロールキャベツが、チャン
コに案内されて入ってきました。皆さんは、女神様というところな
ものを想像しますか？ おそらく、美しく若い女性を思い浮べるで
しょう。でも違ったんです。ロールキャベツは、しわくちゃのおば
あさんでした。驚く私をみて、ロールキャベツはニコリ笑い、語
ってくれました。（これはまた不思議なことに日本語だったのです
が。）——ある時から年をとるようになってしまったんだと。そのあ
る時というのは、もう三百年も昔のことだそうですから、ロールキ
ャベツの年は三百才以上ということになりますね。彼女は静かに貝
殻のいすに坐り、一枚の絵をみせてくれました。それは、可愛い七
つくりの女の子の絵でした。そしてロールキャベツは語り出しま
した。不思議なことですが、まあ聞いて下さい。以下は女神ロール
キャベツのおはなしです。

三百年も昔、このリーベの園はこんなところではなく、もっと南
の方にありました。やはりその頃も、小さな者しか入れず、みな平

和に楽しく暮していました。海の仲間は、十八才になると貝殻のおうちから出られるのですが、その日は、ちょうど十八才になった貝殻の娘、ミンクとリカーの大人の世界への仲間入りを祝うパーティが、開かれておりました。二人はそれは美しく、かわいく、清純でした。そして、大人の世界への仲間入りに、不安でふるえていました。女神ロールキャベツは、この二人を心から愛し、実の子のようにかわいがってきたんです。だからうれしかったんですね、泣きたかったんです。自分の部屋にもどって泣きました。そのわずかなすきが、ロールキャベツをこのように年とらせてしまったんですが……ミンクとリカーは、昌隆心をおこして、リーベの園からでてしまったのです。そんなことはもちろん許されません。そうそう、言い忘れていましたが、このリーベの園にはきびしい錠がありまして。その中で、彼等にとって最も辛かろうと思われることは、人間と話してはいけない、ましてや慕ってもいけない、ということですから。なぜなら海の仲間はこのうえもなく人間を愛していたんですから。

ところで、二人は海中をぐんぐん昇り、ついに海面に達しました。そしてポコンと顔を出したところが、ナイナイ島だったのです。そこは太陽の世界でした。恐いほど赤いような、恐いほどに金色のような、大きな太陽がいつもふりそそぎ、樹木はそれに負けじと、青い青い葉をふるわせていました。小さな草花は、ともすれば樹木の存在によって、その影にかくされてしまいます。彼等は自分達の立場で、自分達の使命を守っていました。

その日はちょうど、ナイナイ島の王子ハムエッグが泳いでおりま

りに死ぬことが、一番良いことなんだと決心したリカーは、青酸カリを飲み、自殺しました。そこへ自分の行ないを反省したミンクがかえってきたのです。さあ、驚きました。悲しみでミンクの心ははり裂けそうでした。女神ロールキャベツも、これは自分の方に非があったかもしれないと反省し、ミンクを完全な人間の姿にしてやることが、せめてもの慰めと思いました。そこでミンクは、この海の楽園——リーベの園——を去り、ナイナイ島に移ることにになりました。

ナイナイ島に移ったミンクは、王子ハムエッグと結婚しました。そして彼女はしあわせなお妃様となったのです。ミンクは、自分の悲しい過去を、めったに取り出さなくなりました。思い出の箱から取り出してながめる時、必ずリーベの園をなつかしく思うからです。今や、ナイナイ島の人間となったミンクには、過去は必要ではありませんでした。とにかく彼女は——そのことを除いて——まったく幸福だったのです。そんな日々を、ますます幸福にすることがおこりました。女の子誕生！ミンクは忘きリカーの思い出の為、その子をリカーと命名しました。リカーはすくすく育ちました。可愛く……そうです、それはまったくあの死んだリカーそっくりだったのです。

そんなある日の事です。もうすでにナイナイ島の王様となったハムエッグ、ミンク、リカーの三人は、船に乗り、日本へと向っておりました。海はおとなしく、なだらかで、静かに横たわっていました。それは、少し不気味なくらいでしたが、彼等がもう半分も行ったところでしょいか、海が突然盛り上がり、その中から、女神ロー

した。この王子ハムエッグは、当時二十才で、大変高くすぐれた方でした。ミンクとリカーの二人は、すぐさま王子を慕うようになりしました。しかし、リーベの園には錠があります。きびしい………そうです。悲しい錠が。二人はためらいました。しかしついに、ミンクは浜辺へあがり、人間の姿になったのです。リカーもそうしたかったのですが、それでは仲の良かった二人の間が、王子をめぐる、どんなことになるかわかりません。泣く泣くハムエッグをあきらめて、一人松の木陰でミンクを見守っておりました。

さて、ミンクは王子ハムエッグにちかづき、その人間味あふれる人柄に、ますますひかれるようになりしました。二人は、朝の日の出の神々しいまでに光る砂浜で、ギラギラ輝く真昼の太陽の、あつい日射しの中で、真青な月の夜黒い海に船をうかべて……心と心を触れあわせました。そんなしあわせなミンクを、リカーは何とやらやましく思ったでしょう。そう、この時なんです。リカーの心に悪魔が入ったのは。リカーは思いつきました。女神ロールキャベツにこの事を告げるのを。かわいそうなりカー……悪魔にとりつかれたリカー。もうリカーは、ミンクがどんなに自分の愛する姉であったかを、忘れてしまっていたのです。急いでロールキャベツの元に走りしました。女神様は驚き、悲しみました。そして、すぐさま海の仲間の会議が開かれたのです。そこでミンクは死刑、リカーは禁固一年を言い渡されました。その時です。リカーは自分の犯したことの恐ろしさに気がつきました。どうしよう!!かわいそうなりカーは、どんなに悩んだことでしょう。そして、どうしたらミンクが助かるか考えました。そこから悲劇はうまれたのです、自分がミンクの代わ

ルキャベツがあらわれました。みんなが驚いて何もできずにいる間に、ロールキャベツは、リカーをさらってしまいました。多分女神様は、ミンクもリカーもいなくなってしまうって、淋しかったのでしょうね。

一方、リカーをさらわれたハムエッグとミンクは、悲しみましたが、どうにもなりません。ついに二人とも病に伏し、なくなってしまうました。そして、ハムエッグとミンクが死んだその同じ時刻に、リーベの園でも、リカーが原因不明の熱病で死んでしまったのです。そして、この時から女神ロールキャベツは、年をとるようになってしまったということです。あの絵は、ミンクの娘リカーの姿を、ロールキャベツが描いたものでした。

私は、かわいそうなミンク、リカー、そして第二のリカー、あるいはハムエッグのために、歌をうたってあげました。その歌があまりに悲しく、せつなかつたからでしょう。か、女神ロールキャベツは、私のひざに泣き伏しました。そんな彼女を、魚のチャンコは、やさしく部屋へ連れてかえりました。チャンコは、これからもずっと——女神ロールキャベツがなくなる日まで——彼女の面倒をみることでしよう。そして、私は、悲しかったけれど満ちたりた気持ちで、このリーベの園を去りました。

のち、私は地図でナイナイ島をさがしてみました。ありませんでした。そして、今年の夏、また同じようにもぐってみたのですが、リーベの園はみつかりませんでした。

あれは、私の夢だったのでしょいか。それとも………(おわり)

Jの胸に少女の青い隆起が触れた。少女はJの眼をはじらいながらそっと見た。Jは少女の顔が上気していくのをじっと見つめていた。電車が泣きながらホームにすべりこんだ、電車から多ぜいの人間が改札口に向って吐きだされた。Jは木偶人形のように大ぜいの人に粉れながら改札口を押し出された。視線は先刻の少女の姿を追っていたが、雑踏の中に消えてしまった。道路に出るとJはコートのをえりをたてて学校の方に歩きはじめた。「オスッ」Jの肩が軽くなった。見ちゃった。電車の中でお楽しみだった。毎日あればな。俺もこの間あんな風になっちゃってな。ところが相手は大年増と来てやがる。ついてなかったな……。」

「今日の一時間目はなんだよう。」

「英語だろう……。」

「おもしろくもねえな。さぼってどこかにしけこむか。」

「あんまり続けさばるとあとがうるさいしな。」

「また一時間、オネンネかよ。」

学校の見えるところまでくると予鈴が重くのしかかるように響いてきた。教室に入ると例の如くK達がストロブのまわりに集って雑談をしていた。Kはストロブの上に手をかざしながらしきりに何か

教師には教師自身の生活がある。教師は現在の生活に順応してしまつて教師自身かつてJであつた事を想い出そうとしない。そうする事は教師にとって生活を脅かす事になりかねないからだ。教師はJを忘れ、楽な平凡な生活を選んだ。Jに言わせれば教師は社会の奴隷であり敗北者だ。ところが社会の奴隷は敗北者にある程度ならなければ生活できない事をJは知っていた。授業終了のチャイムが教室の隅々まで鳴り響いた。Jはチャイムを聞いた時一切の物から解脱したような快感を覚えた。KがJの方に寄つて来た。

真面目な顔でJに言った。「今日の放課後例の所で待つてるぜ。来いよ。他のヤツラも来るそうさ。」Jは物憂げに「ウン」と答えた。六時間目が終わるとJはまっすぐに校門を出た。冬の日射しが葉のなくなった寒そうな樹々にふりそそいでいた。

路上は駅に向う人でいっぱいだった。Jは足早に歩きながら空を見た。冬にはめずらしいからとした上天気だった。Jは空を見上げながら「P」の半透明のドアを押した。「P」の中は煙草の煙がたちこめて、夕方のようだった。背の高いシートをのぞきこむようにしてJは奥の方に入つて行った。シートには若い男女が沢山そつと寄りそつて座っていた。偶の方でKが器用に煙をあやつりながらくつろいでいるのが見えた。

JはKの前に仁王立ちに立った。「座れよ、何飲む？」青いドレスのウェイトレスに煙草をたのみながらKが言った。Jは濃い化粧をしたウェイトレスのうなじに目を落としながら椅子に深く座つた。ウェイトレスがコーヒを持ってくると同時にY子が入つて来てウェイトレスと並んで立った。化粧のしない丸い顔がJの頭に

しゃべっている。

話がはずむと彼らはよく笑った。Jは窓際に立つて、すすけた屋根を見下ろしていた。

その授業開始のベルがなった。豚に服を着せような教師が入つてくるとK達はばらばらとポップブロンがはじけるように席に着いた。教師は不機嫌そうに出席を取り終えると、異国の文字を黒板に書きならべ、無能な生徒にそれらの事柄を教えることもと試みた。異国の文字でうめられるはずのJの空間はどうしようもない虚無感で充たされた。

教師は何んと無能な、取柄のない人間だと思つただろう。教師にしてみれば、Jは彼の理想像とはおよそかけはなれているにちがいない。しかしJには、その彼の観念的な考え方が滑稽にみえて仕方なかった。Jは肉体的にも精神的にも中途半端な人間だった。教師のは不完全だ。中途半端にはまだ未来がある。不完全は止まりっぱなしで未来がないとJは考えた。教師の目が木偶人形に向けられた。厳正的な視線だが焦点がなかった。木偶の時間が止まり、教師の影が木偶の間隙を縫った。Jはその影が全くJにとって無意味である事を知っていた。教師の注意はJの空虚な頭の中を通過するだけだった。もし、教師の思う通りになる生徒が居たら、Jは彼をこの上もなく軽蔑しただろう。Jは彼を教師を恐れた。Jは彼と教師になる可能性を秘めていた。可能性を秘めているという事、それはJにとって致命的なものだった。Jは彼と教師になるのを恐るるがため、Jの創造したJになりきろうと努力した。教師はJの努力に路傍の石ぐらゐの価値しか認めないだろう。

灼きついた。「おや、コーヒーなんか飲んで今日はアルコール類は飲まないの？。じゃ俺はいつものやつ。」Y子は眼をくりくりさせながらウェイトレスにたのんだ。ウェイトレスが立ち去るとY子はJの正面に腰を下ろした。「たのむからその『俺』っていうのはやめてくれよ。まるで男じゃないか。少しは女の子らしくしたらどうだよ。」Jの言葉には耳もかきかきと言ふようにY子は髪を後にかきあげながら天井を見あげた。見あげながらボツリと「俺」っていう響きが好きなんだもん」と今度は女の子らしく感傷的に言った。JはそんなY子に好感を覚えた。「Mは遅いわね。どうしたのかしら。またどつかで女の子ひっかけてるんじゃないかしら。」Y子はまだ天井を見あげたままだった。

Jがコーヒを飲み終るとMが煙の中を泳ぎながらやつて来た。MがY子のとなりに座るとY子はやつと首を元にもどした。Mは学生服のポケットから定期を出すといきなり言った。「百五十円でどうだ。」Kが腰をのり出しながら言った。「どうしたんだよ、又やつて来たのか。今度はどこだよ。」JはY子の黒いつやつとした髪を見つめながら言った。「どうせ元はただじゃねえか。俺にくれよ。」「取られた人がかわいそうだわ。帰してあげなさいよ。」三人は各々勝手な事を言い合った。

MはY子の黒い髪をもてあそびながらその時の状況をこまかく話しはじめた。

Jは他の三人に「P」で別かれてから、盛り場の雑踏の中を泳い

でいた。ネオンの歌が空中にむなしく浮いていた。それらはぶつかりあい、流れながら盛り場特有の音を作った。細いうす暗い露地に入るとボン引きが客待ち顔で角々に屯して居た。厚化粧をした女がＪに寄ってきた。Ｊは立ち寄ってみたい衝動にかられたが、女の毒々しい化粧を見ているとその気持もどこかに置き忘れてしまった。その露地を抜けるまで女の叫び声がＪを包んだ。空気がだるだるじめじめしたような露地だった。Ｊの足はひとりでに明るい方に向っていった。まるで光を求めて集まる虫かなにかのように。明るい場所に出ると何故か安どの念を覚えた。ショウウイドウの華やかさに比べて、あの露地の陰気だった事。二つの次元が同居しているようだった。両方とも現実だった。どうにも隠しようのない現実だった。何かしら割切れない念がＪを襲った。Ｊの影はＪの付属物であるのをやめたかのたうにＪから飛び出した。道の端に黒いどろどろしたものが盛りあがった。Ｊは重い、粘り気のある流動体に押し潰された。Ｊがいくら助けを呼んでも流動体は静かにそして冷酷にＪの体内に浸みこんだ。Ｊはばかでかい化物にうちめされたような気がした。

Ｊは又人いきれのする中を歩き始めた。

Ｊは何んのために歩いているのかわからなかった。しかし、そんな事はどうでもよかった。とにかく歩きたかった。歩けなくなるまで歩きつづけた気がした。気が付くともう回りにネオンはなかった。寒々とした樹々が寒さに枝をふるっていた。空にはたった一つ真赤な星が幽かな光を放っていた。赤い光はＪを誘うようにチカチカとまたいた。

さしく包んでくれた。何んの変哲もないだの室だった。(Ｊ以外の人間が見れば、室の隅に置かれた机が大きいために室全体が幾分小さく見える。壁には弾き手を持つギターが下っている。Ｊは家族の者達をこの室に入れたがらなかった。Ｊにとってこの室はこの世で一番神聖な場所のように思えた。その神聖な場所に、心の室に誰も入って来て欲しくはなかった。壁によりかかりながらうす暗い室でギターを弾きながらボンヤリしている事がとてもすばらしく思えた。それはわずらわしい事柄から逃避するための一つの手段だった。何かあるとかならずギターを弾いてボンヤリした。

居間に行く父が父親たる態度を持ってＪに尋ねた。「何処へ行って来たんだ？」Ｊは軽蔑に満ちた眼で父を凝視した。父はＪを自分の息子だ。俺の子だと自分自身にいい聞かせながらＪの返答を待った。その結果与えられたものはやはり冷たい視線だけだった。

しかし父はその冷たい視線に対してそれ以上何も言えなかった。Ｊは父と口を聞く事、会う事をいやがった。小さい頃Ｊと父とはどこにでも居そうな平凡な親子だった。少なくともそういう風に見えた。ところが、Ｊは大きくなるにしたがって父を嫌うようになって来た。父はなぜＪに嫌われるのかわからなかった。父自身自分はどこにも落ち度のない父親だと思っていた。他人の眼から見ればＪの家族はごく自然な生活をしているように見えたにちがいない。

ところがＪにとってＪの家族は他人同然だった。他人が一つ屋根の下に暮らしているようなものだとはＪは考えた。親がＪを育ててくれた恩なんてものは毛頭持ちあわせてなかった。そんなＪを世間一般の常識人が判断すれば完全な不良としてみなされただろう。しか

凍りついたどす黒いアスファルトの中央をＪは歩きつづけた。寒々とした樹々がアスファルトを抱きかかえるようにして枝をはっていった。Ｊはずっと以前こんな情景を見た事があるように思った。前に一回歩いた事があるように思えた。まるで幼い頃の思い出のように次から次へと空想が広がった。Ｊは冷たく凍りついたアスファルトに立ち尽くした。

眼の前に、小さい頃の思い出のような物が次々に浮かびあがってきた。空には星も月も出ていなかった。真暗な中にＪはうずくまっていた。この世に存在するのはＪ一人のような気がした。遠くから波の寄せる声がＪに語りかけるように響いてきた。低い小さな音だったけれども心の底に響くような力強さがあった。アスファルトはいつのまにか白い砂に変っていた。砂はＪをなぐさめるようにサワサワと鳴った。母の胸に抱かれていたような安心感を覚えてＪはたった一人でうずくまっていた。寒さにふるえる子猫のように――。

天と地が溶けこんだ真暗な空間の中から、誰かが幽かな声でＪを呼んだ。Ｊは誘われるままに空間の中に溶けこんで行った。周囲はまっ暗で何も見えなかった。どっちが上なのか下なのかわからなかった。放心状態で空を見あげている自分をＪは発見した。空にはまっ赤な星が一つＪを誘うようにして中天に光っていた。

III

家の戸を開けたとたん母の陰気な声が飛んで来た。「ずいぶん遅かったわ。ね何処に行ってたの？」Ｊはそれには答えずに足早に自分の室にかけこんだ。ドアを勢いよく開けるとＪだけの世界がＪをや

しそれはあくまで常識人の尺度でＪを計った場合である。Ｊはそれによって人間価値が決まるという事をよく知っていた。知っていたがためにＪはＪ自身の創造したＪになりきろうと努力したわけである。父と口を聞かないのも、教師を馬鹿扱いするのも全てその具体的な表われであると見てもさしつかえなかっただろう。Ｊの考えている事は周囲の人間が考えているよりは複雑だった。少なくとも教師の思っているよりは。

教師がＪの本当の姿を知ったら教師はどんな顔をするだろう。危険な生徒を目の前に見た驚きに青くなるだろうか。それとも驚ろきのあまり心臓が止ってしまおうだろうか。どっちにしろあまり体によくない事だけは確かだろう。教師はかつて自分自身がＪであった事を忘れていた。現在の教師という立場からしかＪを見ようとしな。いくら私は生徒と共に……などというスローガンをかかげてみても絶対といっていいくらい生徒の水準にまで下がるような事はない。

私はそんな事はないと言え教師は単なる偽善者にすぎない。そんな事がないならば教師稼業はつとまらないはずである。時計が〇時を打った。Ｊは寝ようとして立ち上った。明日は又、あの子に会えるかも知れない。そんな事を考えながら暗い廊下を通って自分の室のドアに手をかけた。Ｊだけの世界がＪをやさしく包んでくれた。これでＪの一日の生活が終わったわけだ。こんな男が一人や二人居ても別にさしつかえなからう。明日Ｊに何があるかはわからない。わかってるのはＪが教師の類になりきるまで今日みたいな生活が単調が続くという事だけである。Ｊも……………。

由木村(メモ)

二年 田中正臣

知っている人も多いだろうが、合併問題でもめた由木村は多摩丘陵のゆるい起伏にある。路村の形態をとり、貫通する道は八王子と府中方面、日野市へ通じている。人口は約六千。近郊の為に割と裕福である。

主人公を紹介する。彼は法律を専攻する大学生、名はK君とする。父は村会議員をつとめていて、この話しは私がK君から聴いているという形にする。

村は十年來、合併でもめている。彼は慣れた口調で語りだした。

「そもその始まりは、昭和二十八年九月定制の『町村合併促進法』であり、同二十九年の都からの合併勧告で本格化した。当初の相手は多摩村であったが、それは実現せず、三十七年四市町村合併研究協議会が発足し、日野市との合併が決まった。しかし、これが手続きでとまどっている内に(彼は語調を強め)その虚をついて、前から存在した八王子派が拾頭してきた。彼等はたくみな宣伝で村民をゆさぶり、昨年の選挙に勝った。村は八王子との合併に急転した。激怒したのが私のオヤジなど日野市との合併を推進していた村議連だった。オヤジ達は八王子合併決議の議場を退出し、日野合併賛成の人達を集め、村民大会を開き、日野合併を確認して、ムシロ旗をかかげて猛然と反対運動を起した。その頃から私はオヤジの手

あったろうが、やはり、声はふるえていたようであった。気持は分かった。「この上は、分村する他にあるまい。」すなわち町村合併促進法第十一条の三だ。」

K君はここで話をやめた。

「やはり、分村するの」と私は聞いた。彼は言った「こうなりや意地だよ。あくまでやるよ。」

由木村は野猿峠のむこうにある。道に沿って多摩川の一支流が流れており、水田と桑畑が多い。

今頃、村へ行けば、K君達のためた看板が、枯れたタンボのそこに見られることだろう。

鳥(ひもすどり)

二年 河野照久

茂の鳥趣味は小学校入学の時までさかのぼる。いや、茂は泣きむずずずっていても鳥の飛んでいる姿を見たら泣き止んだというから、その源流は生まれた時からあったと言ってもさしつかえないだろう。そして、いろいろな支流から流れ込んで来た水が、いよいよ大きな岩をも押し流し氾濫するようになった。丁度その時が小学校の入学式の日だった。

その日、茂は入学式で授業はないというのに、まだピカピカの黒いランドセルを背中にガタガタイわせながら家を出た。付添い

助けをするようになった。主に法的手続きの事務を受けもった。宣伝カーに乗ったこともある。反対運動をしている内には、八王子派のいやがらせもあった。青年会の人達と話していた時、見知らぬやつにいきなり胸ぐらをつかまれた。はねとばしてやったが、ビラにひどいことを書かれたこともあった。

そのように反対運動を行っていたのだが、村長がとりあわない。彼は八王子派についてしまったのだ。そこで村長をリコールすることにした。自治法第七十六および七十七条だ。署名は有権者の三分の一を必要とするが、これはすぐにとれた。我々は村長解職請求をした。村長はあわてた。そこで都が仲へ入って三者会談が開かれることになった。リコール運動の目的はここにあったので我々は応じた。会談は五回に渡って開かれ、合併決定を住民投票に、もち込んだ。(彼の語調は熱気を帯び、口角泡を飛ばすというありさま)投票までの十五日間は、ものすごい宣伝合戦だ。村中の車が同員されビラ、ポスター、のぼり、ムシロ旗、それにデマなどあらゆる手段が使われ、警察も何回か出動したほどだ。私はオート三輪の荷台でどなっていた。戦いは終始日野派である我々が押し気味であった。村の人は拍手し、手を振り、歓声をあげて応援した。わたしたちはてっきりかと思っていた。(ここでK君は黙然、私は彼に再開を促せねばならなかった。)だが、敗けたのだ。ほんの少差で……。(それで)しかし、しかしだ。我々はあきらめなかった。その投票発表の夜、日野派のみんなは、手にとることの出来ない、コップ、茶碗、一升びんを前に長いことうなだれていた。

最初に口を開いたのはオヤジだった。彼の立場からそれは当然で

は、八〇才を五年も前に越した茂の曾祖父であった。

「あんまり走るんではねえぞ、転んだら怪我をするぞ。」

こう言って彼の後からゆっくりと歩いて来る老人に笑顔で答えてから、茂は小学校の正門まで一気に駆け出した。

その小学校は、普通にオンボロ校舎と呼ばれている旧校舎二つと、木造モルタル建りの新校舎一つを持っていて、そのあたりでもかなり大きな小学校であった。校庭もかなり広く、小学校にしてはもったいない程の二〇〇メートルトラックが、運動会の為の観客席を充分余して楽に描けたし、樹木なども『サクラノハナガサキノイ』と校歌にもあるように、かなり豊富であった。しかし、唯一つの学校にも悩みのタネがあった。この校庭の丁度真ん中に、大きな杉の木があったのである。この木の根本の周囲は五メートル程もあったし、木の高さは、二階建ての校舎をまた一五メートル程も上に伸びていた。学校側でも、この木がある為にいろいろ不便が生じていたが、勝手に切り倒してしまうわけにはゆかなかった。

戦前、この小学校のある場所にはかなりの信仰を集めていた鎮守様があった。それが戦災でまる焼けになってから、地元ではこの地に神社を再建するかしないかで大論争を起こした。その結果、戦後の風潮に従いが、神社側にはこの御神木だけはそのままにしておくという条件で、とうとうこの広大な土地は小学校になってしまった。茂が小学校の正門を駆け抜けた時、始めて目に入ってきたものはこの大木であった。そしてその頂上に宿っている鳥の飛びたとうとして、黒く青味のある大きな姿だった。茂はしばらくそれを見上げていた。

「おじいちゃん、あれ。」

と、丁度茂に追いついた老人に木の頂上を指さした。

「ああ、あれかい。あれは昔からいるんでな、ずっと昔はあれで鳥占をやったもんだ。」

老人は、懐古するように目を細めながらそう言った、この老人も、一五年前は神社側の有力者として争った。

「カラスウラって何だい。カラスは鳥の事なんだろう」

茂は、老人の目のまわりの皺を見ながら聞いた。

「鳥占たあ、鳥鳴、鳥の鳴き声で占う事さ。ワシが小供の頃なんか神主がいてな……」

話が老人の若い頃の事になると、茂は新校舎の横に二列に並んでいる鉄棒の方へと走って行った。老人は、そのランドセルが上へ下へと振れる小さな背中を、やはり木を見上げたのと同じ様な目付でじっと見つめていた。

その時から、茂は年がら年中鳥の事ばかりを考えるようになった。一ヶ月五〇〇円の小遣いの中から、毎月二〇〇円ずつ引き抜いて貯めた金で『カラス(鳥)』という大きな図鑑を買った。父のカメラを持ち出しては、飛んでいる鳥の姿をピンボケながら写した。そんな様なものが、茂の机の上にはたくさん乗っていた。茂の父母はその事をあまり良い事と見てはいなかったが、曾祖父は、写真に入る茂を見つめては目を細めていた。

茂の鳥気遣いは学校でも続いていた。旧校舎にある茂の教室からは杉の木が良く見えたから、授業中でもそこから鳥が飛び立つのを見ては、教師に注意されていた。だが、茂の友達は何こう協力的

児童が全員教室の中へ入ってしまったと、すぐに作業は始められた。朝礼の時に調整していた電気ノコは、今度は本式にその大きな円板を廻し始めた。円板が次第に木の厚い樹皮の中へ食い込んでゆくと、木は電気ノコの振動に従って小さく震え始めた。上から、枯れて茶色くなった葉が、夏だというのに落ちて来て、木のまわりの土を隠して行った。鳥は驚いて杉の木の間を飛び廻った。青黒い羽が夏の光に照らされてキラキラと光る、その下で作業は進められていった。

三時間目が始まった時、木は大きな音をたてて倒れた。メリメリという木の裂ける音に続いて、それが地面にたたきつけられる大きな地響きがあった。それと同時に、鳥の雛は堅い赤土の校庭にたたきつけられた。

「おじいちゃん、木が切られちゃったよ」

学校から帰った茂は、ランドセルを机の上にはうり出すと、曾祖父のいる離れへ走って行った。曾祖父は机に向って本を広げていた。

「ナニ、ソノ、どこの木だ。」

目を本から離さないままに、本の頁をめくりながら老人は言った「学校のだよ、今日の朝切り倒されちゃったんだ」

茂はこう一気に言った。これを聞くと、老人は目を上げ茂の方を見て立ち上った。その目は、老人の一徹さを表わしてキラキラと光っていた。老人は茂をそんな目でにらみつけると言った。

「もう一度言ってみろ、ナニ、木が切られた。御神だ。よくも切りおった。茂、ワシは学校へ行ってくる。——約束を破りおって」

であった。いや、協力というよりも、からかっていたのかもしれない、彼等は、カラス、と名のつくものならば何でも茂の所へ持って来るのだった。鳥石・鳥瓜・鳥紙・鳥山椒・鳥猫・鳥の豌豆・鳥羽・鳥蛇・鳥麦・猫や蛇は別としても、茂の机の中はこれらのくだらないものでいっぱいになっていた。

茂が三年生になった夏突然、杉の木が切り倒される事になった。学校側がしびれを切らして、神社側の方には独断で事を進めたのであった。

その日、茂は朝礼で始めてその事を聞いた。校長が話している傍では、大きな電気ノコがブンブン音をたてて回っていた。それを見ると、茂は自然と曾祖父の細めた目が思い出されて来た。

「今日、この木を切る事になりました」
と校長は木のとっぺんの鳥を見上げた。

「この木は昔から、あなたがたのお祖父さんよりもっと昔からあったものですが、こんな大きな木があつては体育をする時にも邪魔になります。それで今日、これを切る事になったのです。木のとっぺんにいる鳥君には悪いですが、みなさんの為ならば山の方へ引っ越してくるでしょう。今日は、これからすぐに作業を始めますから、今日いっぱい中は庭の方だけで遊んで下さい。明日になれば校庭はぐんと広くなりますよ」

茂はこんな様な言葉を腹立たしく聞いていた。木の上の巢には今、雛が二羽ほどいるはずだった。それを知っている茂には、山の方へ引越すという校長の言葉がどうしても理解する事が出来なかった。

後の方をブツブツと言いがら老人は離れの縁側から家を出て行った。

だが、戦後二〇年もたった今となっては、以前の約束などもう役にはたたなかった。九〇才も近い老人が学校の事務室へ押しかけて行っても、学校側ではもう、一老人のざれ事としか取り扱わなかった。それに、以前の神社側の人達も、そんな事にはかわり合いになろうとはしなかった。怒る老人を見て、それらの人々は唯「もうあれから一五年もたっているんだ。我慢しなさい」と言うだけだった。

老人は夕方の七時過ぎになって、手に二羽の鳥の雛の死骸をかかえて家へ帰って来た。

「茂、お前の好きな鳥だ。あの木から落っこちれば熊だつて死ぬやい。庭でも埋めてやんな。——こんなひどい事をしておつて、これが学校のする事かね」

老人は茂に二羽の雛の死骸を手渡すと、ブツブツ言いがら離れの方へ歩いて行った。

茂は、二つの死骸を手にしたまま立ちつくした。茂にはどうしたら良いかわからなかった。今手にしているこの二つのものが、今まであの杉の木のとっぺんの巢の中で鳴いていたものであるかも、はつきりとはわからなかった。

「茂、御飯を先に食べてからにしなさい」

茂の母がこう言いながら御釜を持って室に入ってきた。

「ウン、そうするよ。こいつの種類を図鑑で調べなくちゃ、おそろくハンボッガラだと思ふんだがな。埋めるのは明日にするよ」

「今日は鳥の事なんかやめて宿題でもしなさいな。もうやってしまつたの」

「ウン」

「うそおっしゃい。今日は帰ったらすぐに森の方へ行つてしまつたくせに」

彼等は、一人曾祖父を除いて全員食卓を囲こんだ。もう誰も鳥の事など口に出す者はなかった。『おおいちゃんはどうしたんだろ。きつとあの木を切られた事がよ程口惜しいに違いない。それに、皆んなに馬鹿にされたんだからなあ』こう、口の中に飯をモグモグさせながら、茂は考えていた。

その翌朝、茂は早く起きて庭の片隅に穴を掘った。小さな、それでいて真黒い物が二つ、その穴の底に横たわった。茂は土をかけないまま、それをじつと見つめていた。

「茂、寂しいのかい。まったくひどい事をする奴等だなあ」

離れの縁側に出て来た老人が茂を見つけて言った。

「うん」

こう茂は答えたものの、それ程寂しいとは思ひもしなかった。そして、その事が曾祖父に悪い事でもしているように思えてならなかった。何は僕は寂しくないんだろ、僕の鳥も同然なのに、それに、この鳥が大きくなるのを待っていたのに——そう考えても、どうしてもその理由がわからないのだった。

その朝、いつもより二時間も早く起きたせいもあって、茂は学校に一番に着いた。誰もいない校庭は深閑としていて寂しかった。どこかで鳥の鳴く声が聞こえたが、空を見上げて、その姿はどこに

も見えなかった。

「カオー、カオー」茂は鳥の鳴き声を真似てみた。その返事の鳥の鳴き声がまた遠くの方でした。その時、「鳥の鳴き声を真似すると誰かが死ぬんだぞ、鳥だけはいけないぞ」という、曾祖父の言った事をフツと思ひ出した。茂はゾツとして目を空から校庭に移した。校庭には大きな切り株がデンと残っているだけで、木は持ち去られていた。きれいに切られた切り株の上には、きれいな輪が幾筋も描かれていた。

「オーイ、茂クーン」

と同級生の道夫がランドセルを背中でガタガタ言わせながら走って来た。

「とうとう切られちゃったね。君んとこのお祖父さん、学校にどなり込んだんだってね」

「ウン、相当怒ってたよ」

「君んとこのお祖父さんガンコだからなあ、だけど、昨日の音はすこかったなあ」

「だけど、嫌だな」

「何が、嫌なものか。ああ、鳥の子どうなった。君なら知っているだろう」

「ウチに埋めてやったよ」

この会話は茂にとつて苦しかった。曾祖父の事を言われるのも嫌だったし、鳥の事を言われるのも嫌だった。茂は、だんだん、鳥に対しての愛着が消えて行くような気がしていた。

それから二年たち、校庭の切り株は完全に取られた。学校

側では、この木を切ったために、茂の曾祖父が罵り込んで来た外は何事もなかった事を喜んでいた。茂の曾祖父は、まだその木の事を言っており、あの学校は今に鳥のバチが当たる。としよちゅう言っていた。老人は、もう九〇才になっていた。茂も、小学校五年生になった。だが、彼の鳥気遣いは依然として、その時はもう腹の底からのものではなくなっていたが、まわりからの圧力によってずるずると続けられていた。毎日庭に魚の頭や骨を置いておく茂の家には、毎朝鳥が山や森から飛んで来る様になった。老人と茂は、魚の頭をついばみに来る鳥の光沢のある背を、毎朝縁側に腰をおろして眺めていた。

そんな年の秋、茂の曾父は急に衰えを見せ始めた。どこも体に悪いところはない、と医者は言うのだったが、もう年である事に間違いはなかった。茂の家では、だんだん寒くなって行く折でもあるし、カゼでも引いたら大変だというので、近くの総合病院に入院させようとしたが、病院では老衰の者は入れてくれなかった。その為離れの小さな室は、少しの塵や寒風の出入りも許されなかった。茂も学校から帰っても、一週間に一度程しか離れへは入れてもらえなかった。

土曜日の暖かい日、学校から早く帰った茂は、特別に入室を許された。室の空気は病室特有の消毒液臭い臭いがいっばいに漂っていたが、久しぶりで見る老人の顔は楽しかった。

「おおいちゃん、鳥は今日も来たよ。蛙の頭一つやったんだ。おばあちゃんももったいないって言ったけど母さんがくれたんだ」

「鳥も冬になるとまた魚屋の後を追っかけまわすようになるなあ。」

ワシらの小供の時分には、買物に行った帰りの魚までさらわれたもんだ。小さな女の子なんぞよく泣かされてなあ」

茂には、この老人と話す時の話題は鳥だけしかなかった。この老人は鳥の事をそんなに好んでいないという事を、茂は子供特有の神経で細かに感じとつてはいたが、やはり茂には鳥の事しか話す事が出来なかった。老人がだんだん、無言のまま天井を見つめている時間が多くなるような頃になると、茂もこの枕もとから抜け出したくなって来る。だが、老人は容易に茂を離しはしなかった。

この様な状態がまる二ヶ月続いた。茂も、もう離れの病室へはほとんど近寄らない様になった。それで、時おりは老人の方から茂を呼びに来さすのであった。

茂は朝早く家を出ると、いつもの通り鳥の声を聞きに森へ出かけた。鳥の巣がある、大きな木の下に立って、じつと鳥の飛びたつのを待った。背にぶら下っているランドセルの革がしつとりと露にぬれて湿って来る様になると、高い木の方から大きな真黒いものが飛びたつた。黒というよりも、青に金粉や銀粉をまぶした様な色は非常にきれいだった。茂はフト、鳥が他の鳥の羽根で化粧をして鳥類の王者になろうとしたという昔話を思い出した。その時、鳥が鋭くクアオーと一声鳴いた。その声は森中にこだまして、遠くの方からも別の鳥の返事が帰って来た。そして、連呼し合いながら大きな翼を広げて、ゆっくりととんで行った。

茂は、じつとこのだんだんに小さくなる鳥の声を聞いていた。その声は、いつもよりひときわさえている様に思えた。

「クアオー、クアオー」茂はこう小さく口ずさんでみた。その口

唇からもれる息の音は、曾祖父の皺だらけの目を細めた顔を連想させた。その顔に、茂は鳥という言葉しか彼自身に結びついているものを感じることが出来なかった。それでいて、その顔には今飛んで行く鳥の黒い姿とも、全く結びつきを感じる事は出来なかった。

「僕が鳥の事を考えるのはおおじいちゃんがいるからだろうか。それとも鳥がいるからおおじいちゃんがいるのだろうか」そんな風に考えてみたが、少しも結論は出て来なかった。そしていくら逃げても、「おおじいちゃんがいなければ……」というところへいつてしまふのだった。その度毎に、次に来るものを恐れて、あわてて考えを打ち切った。しかし、その後の言葉が小さく胸の中で浮かび出て来るのは避けられなかった。

茂は、その言葉に追われる様に森の中の霜柱の立った道を学校へと駆けて行った。

学校から帰ると、茂の母が家の中から飛び出して来た。

「あ、茂、お祖父さんが悪いのよ。今、お医者さんが来ているけれど。——ねえ茂、この鳥何とかならない」

茂の母は、あわてた様な、あわてていない様な変な言い方をして屋根の鬼瓦にとまっている鳥に目を向けた。

「どうするって、おおじいちゃんは鳥の事が好きなんだよ。いたっていいじゃないか」

「あんたに調子を合わせているだけなんですよ。鳥なんか真昼間から鳴かれたんじゃあ、まったく縁起でもない。うちには病人もいるんですよ。あんたの鳥でしょう。何とかさない」

「ウン、じゃあ鳥威しでもつけてやるさ、あれ簡単に出来るんだ」

だよそんなもの取っちゃまいな鳥は縁起が良いんだよ」

「母さんは悪い鳥だと言ったよ」

「もうやめた方が良くいですから」

次第に声の力がなくなっている曾祖父を見て、医者は茂を押しとどめた。茂は気まずい思いで父の顔を見たが、父は怒い目をして茂をにらんだ。

それから三日、老人の病状はそのままの状態でズルズルと続いた。茂の母の目は毎夜の看病で真赤に充血していたし、すでに来て、茂の家に泊っていた親戚の者達もあまり長くはいられないと言って次々に帰って行った。父や母の顔は暗かったが、その目の奥には早く死んでくれれば良いという気持がありありと見えていた。茂は、その目の中に、自分と同じものがあるのを発見する毎にオドオドして落ち着かなかった。しかし、そんな風に長びいていた老人の病氣も四日目からいよいよ悪くなり出した。

茂は学校から帰るとすぐに離れへ呼ばれた。すでに父は会社から戻って来ていた。近くの親戚の者も二人程蒲団のまわりに座っていた。誰れもが、来るべきものが来たという落ちついた気持で、じつと下を向いていた。茂はその不思議な空気に、室へ入るとたんにドギマギした。しかし、老人のやや青ざめた顔が茂を引きつけているようだった。茂は、老人の枕のすぐ横に座った。真上から見た老人の顔は何となく茂に憎悪を感じさせた。それと同時に恐ろしくなった。老人の真黒くて青い顔が二度咳をした。ほとんど体を動かさないうで、口だけがモゾモゾと動いた。それと一緒に、瘦せた胸の奥でゴロゴロという痰の音が聞こえた。老人のまわりに座っていた人々

「え、ああ、あの森の方の家に付いているあれね。何だって良いから早くやっというね。ああ、それが終ったら離れへ行っても良いですよ。だけど静かにするんですよ」

こう言って、母は急いで家を出て行った。母がいなくなって玄關はひっそりとしたが、まだ茂には曾祖父が悪いという悪味が理解出来なかった。しかし、茂はそれを心の底からじわじわと感じて来るものにまかせ、すぐに押し入れの隅につこんである縄を取りに行

った。

威し縄をつくってしまひ、屋根によじ登って軒下へ通した後で、茂はすぐに離れへ老人の姿を見に飛んで行った。この時、茂はもうこの朝の事も、母から言われた静かにしろという事も、もう完全に忘れてしまっていた。室の障子をボタンと開けた時、中にいる父が怒った様な目で茂をにらんだ。同時に、消毒液臭いむんとした空気が茂の鼻先をくすぐった。茂は病人の顔を見てみたが、別にそんなに悪いようには思えなかった。ただ、枕元に白衣を着けた医者の座っているのが、馬鹿にもものしく思えた。

「おおじいちゃん、母さんどこへ行ったの」

「ア、ン、茂か、母さんか、母さんは薬を取りに行っただけさ。

どこも悪くないのにな、ハハハ」

茂は、笑い声が次第に小さくなって行く老人を見て、何か話さねばいけない、と思った。しかし、とっさに出て来た言葉は鳥の事だった。

「今ね、鳥威しをこさえたんだよ」

「どうしてそんなものをつくるんだい。鳥が来るのは良い事なん

は、皆一様に顔をしかめて、あわてた様に下を向いた。茂はこの様子を見て、それらの人々に反感を感じはしたが、自分の中にそれと同じ気持があるのを否定出来なかった。

「おおじいちゃん」

茂はそつとつぶやいてみた。老人は、その小さな声が聞こえたかの様に薄目をあけて茂を見た。その細い目はいつもの通りの茂を見る目だった。しかし、目をつむる時にちらと見えた白眼は、またも茂には良い気持をさせなかった。

屋根の上から、鳥が鳥威しから飛びたつ音が聞こえて、クアアと一声鳴いた。その瞬間老人の顔に黒い影が走った。茂はこれを見て、彼とこの老人との間の結びつきは、鳥しかなかった事を思い出した。そしてこの老人ゆえに茂は鳥の事を考えていた事を知った。茂は急に、今前に横たわっている老人がかわいそうになった。鳥の為におおじいちゃんは死ぬんだ。そう思った。そして、急に鳥が恐ろしいものと思われて来た。

それからしばらくして老人はゆっくりと息を引き取った。それは本当にゆっくりとした死に方だった。顔さえも少しも動かさないうで眠った様に沈んで行った。その事は、まわりにいる誰も気がつかなかった。しかし、茂だけはそれを微妙な空気によって、曾祖父何見かとても重大な事が起った事を感じた。茂が、鳥の他に、茂と曾祖父との間には何か別の連がりがあった事を知った。そして、それを知らずに死んだ老人がかわいそうに思われて来た。みんな鳥のせいだ。鳥のせいだ。茂は、今にも泣き出しそうになるのを懸命にこらえながらそう考えていた。

「研究ノート(憲法)」

二年 土 屋 明

大日本帝国憲法は、明治十年頃からの弾圧により、英美的な自由民権運動が敗退した後絶対主義的藩閥官僚政府が、君主権の強大なプロイセン憲法に学び、伊藤博文を中心に明治三二年(一八八九年)に欽定憲法として発布したものである。富国強兵の国策にもとづき天皇の権力の確立を中心として、議会は二院制を取り、貴族院を設けて民間選出の衆議院に対抗させ、同時に行政府に強い権限を与え、議会、すなわち国民の権利を大幅に制限した。

このように、出発点から制限を加えられた国民の権利が、大正一五年に国会を通過した治安維持法により、なおのことせめられ

た。

昭和三年、共産党関係者の、一六〇〇名に余る大量検挙が行なわれ、さらに翌四年の党幹部全員の検挙によって、共産主義者を社会的に押しつぶした。昭和一〇年には、天皇機関説事件により、自由主義者をも社会から葬りさった。

前述のように制限の多かった帝国憲法に示された、国民の基本的人権は、昭和一三年に国会を通過した国家総動員法によって、事実上消滅してしまった。

昭和二〇年(一九四五年)八月一日、日本は軍国主義の絶滅、連合軍による占領、カイロ宣言にもとづく領土制限、戦争犯罪人の

処罰と民主化の促進、そして再軍備の禁止などを条件としたポツダム宣言を受諾し、太平洋戦争は終結した。

同年九月三〇日、マッカーサーが厚木に到着し、ポツダム宣言による連合軍(といっても実際はアメリカ単独の占領)が始まった。そして二月モスクワで三国(英・米・ソ)外相会議が開かれた。その席で、占領政策の最高議決機関としてワシントンに極東委員会(英・米・ソを中心とした、一三ヶ国で構成)の設置が決定され、第一回の会合は翌二一年の二月二六日に開かれることになった。マッカーサーは、占領のために天皇を利用したのと同様に、憲法制定に関しても日本の政治家を使う考えであったが、二つの日本政治家を使う考えであったが、二つの日本人政治家による憲法立案(近衛案、松本案)が失敗に終わったため、急遽、占領軍内部で憲法案を作成することを命じ、同時に、いわゆるマッカーサー・ノートが渡され、これにもとづいて日本憲法の草案を作ることになった。そして出来た憲法案は、二二年二月一三日に、日本政府に渡された。この草案の基本原則はマッカーサー・ノートに記された三原則すなわち

- 一、国民主権の確立
- 二、戦争、及び軍備の絶対的放棄の宣言
- 三、市民平等権の保障

の三点である。この三点は、日本政府との折衝の過程でも、議会の審議でも、アメリカ側が決してゆずらなかったものである。

七月二日、極東委員会は「日本新憲法の基本諸原則」という決定をした。これによると国民主権の原則にもとづき、成年者による普

るため『すなわち侵略の戦争のために陸海軍の戦力を保持しない、というように読めるから、自衛権は否定されていないということである(昭和二七年四月)』

さて話をもどして、憲法改正当時、及びその後の我国政府の態度はどうであつたらう。昭和二十一年六月二十六日衆議院本会議で吉田首相は次のように言明しています。

戦争放棄に関する本案の規定は、直接には自衛権を否定してはおきませぬが、第九条二項において、いっさいの軍備と国の交戦権を認めない結果、自衛権の発動としての戦争も、また交戦権も放棄したものであります。従来、近年の戦争は多く自衛権の名において戦われたのであります。満州事変が然り、太平洋戦争もまた然りであります。

また同氏は次のようにも述べている。

戦争放棄に関する憲法草案の条項におきまして、国家正当防衛権による戦争は正当なりとせらるるようであります。私はかくの如きことを認むることが有害であると思つております……。

そして話が前後しますが、芦田委員長は、同年八月衆議院本会議でおこなった委員会報告で次のように発言している。

侵略戦争を否認する思想を憲法に法制化した前例は絶無ではありませぬ。しかし、我が新憲法のごとく、全面的に軍備を撤去しすべての戦争を否認することを規定した憲法は、おそらく世界において、これは嚆矢とするでありましょう。

この時すでに前に述べた修正を、自衛権を認めることを考えた上で行っていたのだとするとひどいものである。芦田委員長によると、

逋通拳、責任内閣、完全な立法権を持つ議会議法の独立、人権の保障、天皇制の廃止あるいは民主的修正の勧告、大臣はすべて文民であり、その過半数は国会から選ばれることとある。このような圧力の中で憲法は徐々に成立に近ずいていった。そして一〇月七日国会を通過、同月末には枢密院を通過、一月三日公布された。以上が日本国憲法成立(改正)の大まかな過程である。

次にこの新憲法の最大の特徴である、戦争放棄、第九条の成立過程についてのべてみよう。

第九条 日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

この条文は戦争、及び戦争に至らない武力の行使、あるいは威嚇は、これを行ってはならないこと。そして、それを一層確実に保障するため、戦力はこれを保持しない。さらに国の交戦権はこれを認めないことという三点からなり立っている。

この九条の現実的な問題は自衛隊についてであらう。それはすなわち、この条文(憲法)が、自衛権と、自衛のための戦争をも否定しているかということである。自衛権を認めるという解釈の源は、改正当時の衆議院憲法改正特別委員会の芦田委員長が修正を加えた第二項初めの前項の「目的を達するため」という一節にある。すなわち、芦田理論といわれるものである。これは『前項の目的を達す

すべての戦争の他に自衛戦争があることになってしまふ。

これらを一例として、憲法改正が終わるまで関係者の誰もが自衛戦争なら出来るなんてことは言っていない。

そしてこの草案のもと(総司令部草案)のもと、すなわちマッカーサーの三原則の第二に、

日本は国家の紛争解決のための手段としての戦争、および自己の安全を保障するための手段としてのそれも放棄する。

当時公表されていなかったとはいえ、司令部の中の空気からして、自衛権をはっきりうたえば、修正が許可されないと考え、表現をあいまいにしたのだとしても、憲法とは、主権者である国民のものである(当時は、はっきりそうなっていないが、そうなる予定でこの憲法を作ったのだから)決して政治家のためのものではない、にもかかわらず、国民をツンボに数におき、公けの場所では、全く逆の発言を行い国民をダメすとは、政治家とはいいい加減なものである。そして、自衛権も放棄したと言っていた吉田首相も、マッカーサーが(彼も自分で主張した、自衛権否定の原則をくつがえしたのだが)自衛権肯定の声明(昭和二年一月一日)を出すと、とたんに、日本国憲法は自衛権を否定しないと手のひらを返した。そしてこの年の七月、警察予備隊と海上保安庁が設置された。翌二年一月一日、マッカーサーは「第九条の理想がやむをえざる自己保存の法則に道をゆずらねばならなくなるのは当然であると発表した」こうして日本の再軍備は一歩前進した。

昭和二年四月二十八日、サンフランシスコ講和条約は発効し

は、憲法とは、制定された当時の政府と世論の解釈が、持続されるべきで、後に文章の解釈の仕方によって制定時の思想をも否定しようとするのは間違いであるという考えに一つ目の出発点を持つ。ここに毎日新聞社が、二年五月二七日に行った、新憲法草案に対するアンケートがある。最終的な憲法に対してではないが、当時の戦争放棄という大問題に対する世論といったものを、理解するのに役立つであろう。

○戦争放棄の条項を必要とするか。

○必要あり 一三九五 七〇%

この条項修正の必要ありや

必要なし 一一二七

あり 二七六

ありとしたものの理由

自衛権保留規定を挿入せよ。

○必要なし 五六八 二八%

その理由

自衛権まで放棄する必要なし

前文のみでたりる

一〇一
一三

このように自衛権を放棄してよしとするものが全体の五六%をしめている。次に政府はどうかという、前にも述べたように、制定当時は自衛権を否定していた(昭和二年六月二六日、衆議院での吉田首相の発言のだから、自衛隊は当時の憲法解釈と憲法思想からまさしく憲法違反であると断言できよう)。

さて二つ目の基点は前文についてである。すなわち、自衛権とは

た。この結果、連合国占領軍であったアメリカ軍が安保条約による駐留軍となり、警察予備隊は保安隊になった。

吉田首相は二年三月六日「自衛手段の戦力を禁じているわけがない」といながら、四日後には「自衛のためにも戦力は持てない」と訂正するありさまで、政府の憲法解釈は、ゆれにゆれた。そして、昭和二年一月一〇日、吉田は、自衛隊を軍隊と認めた。そして

一月三日「保安隊を増強してついに戦力に至れば憲法を改正する。この線を進みたい」と発言した。そして、同年二月一〇日に始まった第一九回国会で、「直接侵略及び間接侵略に対し、我が国を防衛することを主たる任務とする」自衛隊法、防衛庁設置法が通過して保安隊が自衛隊に発展した。

昭和二年一月鳩山内閣が成立した。鳩山は野にあって吉田内閣の九条解釈を批判し、自衛隊は憲法違反であると主張していたため首相になって苦しい立場におかれた。そして「自衛のためには軍隊を持ていい」という論に国論がなつたと思っております」と罪を国論になすりつけ、更におしめて「自衛のためならば、近代的な軍隊を持ってもいいものだ、いささか吉田君とは考えが違うのであります」と主張を一八〇度転換した。ここで政府は前述の芦田理論に到達したのである。そしてその後は自衛隊も規模だけが問題にされ、違憲論などはさわがれなくなりました。

ここで自衛隊が合憲か、違憲かという問題を再び考えてみよう。結論をさきに言えば、間違いなく自衛隊は憲法違反である。(また仮りに一步譲って合憲としても、なくてはすむものならなくした方がよいものであることは間違いあるまい)。そして僕の自衛隊違憲論

他国の侵略に対して国土を守ること(正当防衛)にある。しかしながら前文に

日本国民は、恒久の平和を企願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した……

とある。すなわち、他国が日本を侵略(軍事的に)することがないと信ずるということを前提としている。ならば自衛権は無論ないしそんな言葉も必要なくなる。これでは夢物語だと言う人が出てくるであろうが、同様に前文が、

日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓う。

とある。崇高な理想と目的なら、夢物語でもよいのではなからうか。そして、この前文は夢を夢でなくするために全力をあげてことを誓っているのではないのか、そして現在の政府のように、既成事実(自衛隊、アメリカの極東ラインの一翼)が憲法がマッチしないからといって、現実にもう憲法の改訂をしようなどとはもってのほか。

また吉田首相がいうように、戦力を持たない軍隊などというものがあるのだろうか。ある国会議員のように、竹やりはどうか、又核兵器でなければ戦力でない。などという極論は別としても、今の自衛隊が戦力を持たないなどと言う者はなからう。とすれば自衛隊は憲法違反である。原則的に廃止されてしかるべきである。自衛隊に関する三九年度の国家予算は二六二億円である。実に莫大なも

のである。

現実の政治的事件として、自衛戦争と侵略戦争の区別は非常にむずかしい。吉田首相が昭和二十一年六月二六日衆議院で発言した内容からもそれがうかがわれるであろう。原則的に、ない方がよいものならなくしてしまえばよい。若い労働力は一般産業でも不足している。消費専門の自衛隊がなくなっても、国民総生産は増加しても減少することはないだろう。となれば何ら生産力のない自衛隊など、早急になくすべきである。

『親と子』

一年 志津雅美

彼は黙っている。春には、華美な色彩を持った多様の草花を咲かせ、夏は、新鮮で永々しい数多の緑樹を生長させた公園。今は秋のくれ、既に辺は乾燥し、黄一色に包まれ、夏の雰囲気は一ツ断片も残していないこの公園。その公園のベンチに座り、彼は静寂な自然と同じように何も言わない。彼は大自然の中にぼつねんと、且つ茫然と彼の前に散りゆく、恰も彼の運命を暗示するかのような、きょしゃな落葉を見つめ、物思いにふけっている。彼の周りの巨大な木々は、それらの根元に、数多くの木の葉を、彼の踏んで来た道程（運命）よりも厚く厚く積み重ねている。その落葉の中では、春を待つ幼い芽が、或いは小さな虫が、冬の寒さを避けさせてもらうために、暖かく、のんびりと冬眠し始めているだろう。だが、彼は莫

の果てるところに、老木が堂々と聳え立っている。彼がいつもここに来るのは、入口から延びる道の真直ぐさに、魅せられたのだろう。彼の運命は、その道のように真直ぐではなく、確かにぐねぐねと曲がりくねっている。何れにせよ、彼は老木の下に来て、自分の踏んできた道程（運命）を回想する。彼は今日も又、苦しみ悩んだ他の日と寸分違わぬ回想を繰り返している。

俺のこの哀れな姿から、誰が想像出来よう。俺の生れた高貴な、金持ちの家を。俺は何でも、生れた時、いや俺は生れやしなかった。『マクベス』のマクダフの如く母の腹を切り開いて俺を取り出したそうだ。俺の運命は生れた瞬間から曲っていたのだ。俺は小さい頃から、自分の力で行動したことがなかった。俺のする事、成す事、皆女中任せだった。『僕ちゃん、着換えましょうね。』『僕ちゃん、いっしょに遊びましょうね。』なにが『僕ちゃん』だ。今俺が幼い頃の事を思い出せるのは、自分で歩いたのと、自分で便所に行った事位だ。それというのも、あの世話好きの女中のせいだ。それと母・親父が俺と遊んでくれなかったせいだ。いや待てよ。母は俺が七才の時、肺炎で死んだ。母が死ぬ前、母は案外俺に愛情を見せていたようだ。西部劇や、チャンバラを母といっしょになつて、はしゃいだことを思い出した。そうだ、母だけは俺の望んでいた清らかな愛情を俺に見せていた。母は無罪に違いない。反面親父は俺に冷酷で母と戯れていると、必ず目の前に現われ「煩い！ 仕事の邪魔だ。」とガミガミ、怒鳴り散らしていた。だが、親父は元来、仕事好きだったし、親父の仕事は頭を使うもので、怒鳴りたくなくて、怒鳴ってしまったのかもしれない。又、親父は社用、社用で追

大な数の人類の中に居ながら、誰からも、同情してもらえなかった。辺りは世の中のように冷く、又底知れぬ彼の運命を表示するような広い広い空には、どんよりとした、重圧感のある雲が低くまるで彼をその圧力で押し潰さんが如く低く、へばりついている。その雲は雨雲だった。今、雨雲は彼に無情の雨を浴せている。だがそういった中に、彼の興奮した頭脳を冷すかのように、一本の年老いた巨大な銀杏が、彼の身体全体に、木の葉を、涙を、愛を振り注いでいる。この銀杏のみが今の彼には親であるのか。その仮りの親が冷やしている彼の頭脳は、しだいに白痴の持つそれに変化しつつあった。なぜといって、彼は世の中の醜さ下劣さを知らされ、心の底からこの世を、この世の人間を憎んでいる者であるし、町の慌しい騒音に、彼の頭脳ははてりを増し、錯乱させられていたからである。そして、以前彼が持っていた――彼の七、九才の頃持っていた――現在、彼の心の片隅に見すてられている人への信頼というものも、人々への憎悪に圧倒され、なりを潜めている。彼の「沈黙」は、人の露骨な感情の醜さ、卑劣さに啞然とし、口が物を言うことを忘れてしまった。ただこれだけだった。一方の彼の前をちらちら通り過ぎる人も、彼と同じように黙っている。しかし彼等は彼程この世を、この世の人を知らず、自らの目的とする場所に急ぎ、他人に話しかける必要を感じぬだけだ。彼は自分の不運を悲しく思う時、決まってこの彼の仮の親たる老木の下にやってくる。老木。それは、何百年もの間世の中を観察し続けている。彼はその老木の長年の経験に引かれてここにやってくるのだろうか。或いは公園の入口に立つとそこから、真直ぐに延びる砂利の敷き詰められた道が臨まれ、そ

われ、俺と遊ぶ暇など無かったかもしれない。母が死んでからは、俺は親父をひどく嫌うようになった。母は死んで遊べないし、女中なんぞは、金儲けの為に俺と遊ぶ、こんなことぐらい、幼かった俺にでも良く解った。親父は勿論俺と遊ぶ暇なぞなかった。いや親父は俺と遊ぶ、俺に信頼感を与える時を、作らなかった。だから、小さい頭の俺は親父を嫌った。理由は何にせよ、俺は親父を嫌っていた。折も折、俺が十八になった時、俺は有名大学の入試勉強に一生懸命で、夜は殆んど寝なかった。その位学問に熱中していたのだが、それと言うのも大学に自分の学力で入りたいが為だった。親父は「お前、そんなに夜も昼も勉強して、身体を壊したらどうするのだ、お願いだから止めてくれ」などとほざき、俺をうまくだまし、俺を金の力で入学させようとしていた。しかし、俺は知っていた。親父はもし、万が一、俺が大学を落ちたら、家名に傷が付くとも思ったのだろうか。そこで俺は、親父を嫌っていた俺は家の金をちょいと拝借して、家を飛び出した。親父は、家名を傷つけない親父は、強いて俺を探そうとしなかった。（注―彼の父が家名を汚したくないのは、彼の言う通りだが、実際彼の父は、私立探偵を雇って彼を探させた。見つけたかどうかは後で解かると思う。）そうして、俺の安い下宿の貧困な生活が始まった。が、その時の貧しさなど「独力」と大学入試への「努力」が、吹き飛ばして呉れた。まる半年、家での勉強時間を入ると、二年間の浪人生活、ガリ勉の甲斐あってか、俺はその大学に、見事にパスした。俺は非常に満足だった。実に満足だった。生れて初めて自分でしようと思った事を見事に成し遂げたのだ。（俺は俺の学力で入学したのだ。親父の力、

金の力はもう必要ない、へん、様ア見やがれ、親父殿。」いつもこ
う繰り返しては、自負し満足していた。或いは親父の元へ帰りたい
気持を打ち消す為だったかも知れない。だが、なぜ親父は俺を探そ
うとしなかったのか、いや、俺を嫌っていたのは俺にも解っている
が、何か俺が俺にそう思わせない、それだけが、俺は気づりだっ
た……

彼は、微笑んだ。嘲笑かもしれないが、それは、モナリザの笑い
のような、不思議な、実に解からない笑いだ。彼は、いつも彼の想
起がこゝ迄来ると、この薄気味悪い微笑みをする。何が彼をそうさ
せるのか。「親父をしてやった。」と思うのか。その時上空は既に晴
れて、それは実に見事な天候の移りだった。どす黒い雲が有らん限
りの雨を彼に浴びせたかと思うと、たちまち空は青々と、どこまで
その青さが続くのか解らないほど透ききってしまい、雲など微塵も
残さなかった。彼の心同様明るかった。そして彼は、老木と背比べ
をするかの如く大きく深呼吸した。彼の幾分小型の胸が大きく脹
らんだ。彼はその時初めて、外界の新鮮さを発見し、その余りの爽
快さに驚き、そこいらを歩き廻りたくなった。実際彼は歩き廻っ
た。晩秋の死に間近いコオロギの声を耳を傾けながら、ススキのあ
のほんわりとした、軽く白い穂を摘みながら、彼の大好きな老木
に、到底登ぼる事の出来ない太さだったが、登ろうと努力しながら
あの真直ぐな道を、息がその余りの速さに出来なくなるぐらい速く
走りながら、彼は、自分の成功した入試の想い出を、コオロギに、
ススキの穂に、老木に、道に語ってやった。彼はその度に聞き取る
事が出来た。コオロギがその可愛らしい声で「おめでとう！」と言

うのを。ススキの穂がその柔らかな頬を彼の手にすり寄せながら
「えらいわ！」と言うのを。老木がその大きな身体をゆすり、その
経験豊富な枝で彼を愛撫しながら「そうだと、努力すれば出来る
のだ。」と彼に言い聞かせるのを。真直ぐな道がその幾何学的直線
を彼の目に見せ「自分が、やると思ったらその道を踏み外すな！」
と言い聞かせるのを。だが、彼には次の回想が待ち受けていた。彼
はじつと目を瞑り、湿った芝生の寝床に寝転び、追想の続きに触れ
た。突然、彼の顔は、元来赤味を帯びていた健康色の顔はさあっと
蒼白に変わり、あたかも顔面神経痛患者のようにぎこちなく、こわ
ばって来た。彼の過去の何かが彼を、彼の脳的感覺領を刺激したら
しい。彼は顔を、瘦せた大きく扁平な手で包み、憂鬱な形相に変え
回想を続けた。

俺は大学入学バス当時、嬉びの余り、天国を夢遊病者のように、
軽い足どりで、本当に空中を飛ぶような足取りで、さ迷い歩いてい
た。俺の心は、嬉びと満足で満ち満ちて、ともすると、それらの一
部をどこかに落したかもしれない。俺の周囲の物総てが、俺の物に
成った気がした。又俺の周囲の物総てが、俺を歓迎し、賛美してい
るような気もした。そして人の、誰でもよい俺の前に現われる人の
顔を見ると嬉しさの余り、腹の底から笑わずにはいられなかった。
だが……俺はその余りの嬉しさに気を取られ、心の隅に「油断」
が現われて来たのは解らなかつた。次第に「油断」は大きく生長
し、俺に昔の癖をよみ返らせた。(注：彼の癖とは、昔は金があり
すぎ、金を使う事を重要視せずして、手元に有る金は尽く使い果た
してしまふ。これが彼の悪癖であつた。)俺は折角のアルバイトで

儲けた金を、全部遊樂に使ひ果し、食物にろくな物は食はず、洋服
でさえ汚らしい、一ヶ月に一回洗濯するような物を着ていた。又そ
れに今度は新しい悪癖が俺に飛び付いて来た。キザな、自分では恰
好良いと思っているらしいが、お面白い恰好している不良じみた奴
等と付き合うように成つたのだ。そういう頃とは、入学してから
約半年過ぎた頃で、大学の成績はぐんぐん目に見えて下っていき、
反対に不良仲間がぐんぐん増えていった。一度は「落第」のレッテ
ルを張られそうになった事もあったが、低い、実に低い最低の成績
でも一応、大学だけは卒業出来た。俺の大学生活は惨めな物で、不
良仲間と付き合ひ出してタバコは吸うようになり、酒は飲むようにな
った。勉強も入学当時のように頑張つてしなくなったし、云々。
大学は卒業出来た俺だったが、大学の引き継ぎである世の中には入
学を許可されなかつた。要するに、世の中は、世の中の人々は「お前
のような奴に、ふん、こんな職業が出来るか。」と、俺に職業を与
えてくれなかつたのだ。その時は一時的に不良仲間と付き合ひを止
め、夢中になって職業を探し回つた。結局俺に最後に廻つて来た仕
事？「泥棒」だった。不良仲間とは一時的に手を切つていたもの
の、仕事が無いと成ると、奴等を頼るより他に手がなかつた。奴
等を頼ると成ると、奴等は俺に芳しからぬ職業(?)暴行、ゆす
り、泥棒等々いろいろ教えて呉れた。俺は、その中で最もスリルの
ありそうな泥棒を選んだのだ。もうそうなるから、朝は十
二時迄眠り、夜は夜で三時、四時まで不良仲間とほつき歩いた。
「泥棒」にスリルがあるのは思つた通りで、一度泥棒した時などは
こうだった。真夜中に狭い露路で落ち合ひ、あの時は俺を含めて、

四人だったかな、ある金持ちの家を俺の計画に従つて襲うことにな
つてた。その場所でもう一回綿密に計画を練りなおしたが、俺の
考えたその計画に変わりはなかつた。「今は冬だ。家は厳重に戸締り
してある。空気の流通がひどく悪いのだ。そこで、このガスライ
ターでガスストーブのゴム管をじわじわとゆるやかに焼く、不自然
に焼く。小さな穴が開く程度で止める。それから、俺達は外で
しばらく休憩する。内では自然に人は死んで呉れる。勿論ガス中毒
でだ。穴はマッチで焼けたように自然にしろ。ここが肝心だ。殺人
に成るか、事故になるかだから。それからだ。大金は持ち出す
な。少額にしろ、やばいからな、理由？少くて良い。大金盗んで盗
みだとサツに悟られるとまずい。良いか。少しだぞ」こう、俺の計
画に念を押し、大完全犯罪を犯そうとその家に出かけて行つた。さ
で俺達はストーブのゴム管を焼く段取までは総てを上手く運んだ。
そこで、俺達はガスストーブを探したが、どこにもなかつた。その
はずその家は電気ストーブだった。俺達は思わず大声で笑つた。別
段その家に変化は無かつたのだが、俺達は自分達の声の大きさに驚
いてその家を飛び出した。外で再び笑ひなおした。実にあの時
はスリル満点だった。又「泥棒」が好きにも成つた。だが、所詮泥
棒は悪い事、俺の良心の呵責が大きくなり。俺はこんな事は止める
と奴等によく言つた物だ。「泥棒」はスリルは有るながらも、俺の
良心の呵責等に押されて次第に俺の前から姿を消して行つた。俺は
世の中の公の職業に背を向けられていた。実際俺は幼い頃の清純な
気持、入試当時の誠実な張り詰めた気持を想ひ出しては、今の自分
がいやに成り、惨めに思つたものだ。或る時俺は町の繁華街を歩い

て行たがふと目に付いた人が有った。ボロの洋服を身に纏い、汚れたパンを食いながら歩いている男。乞食。俺はその乞食を見てからは、なお一層腕が激しくなった。「あんな乞食でさえ、泥棒などという卑劣な物に手を出さず、物を金を貰うというのは氣に喰わないが、一日をどうにか生活している。なぜ俺は職業にあんな「泥棒」を選んだのか。バカナ奴め！」と。「こんな事では駄目だ！立ち直れ」と自分を責め、頭を弱々しい拳固で殴り付けて戒められたのだが、不良仲間には誘われると、断わることが出来ずふらふらと遊びに行つたもんだ。ああ、俺は馬鹿だった。なぜ俺はこう愚かだったのか？ その答を考えれば考える程、俺は苦しみ悲しむ一方だった。そして俺には判っていた。俺の心は過去犯した事の「後悔」と、それを修正しきれない「現実」とが錯乱し、入り乱れ、混乱し、脳も働きが鈍って来たし、ハート形をした心は、鋭い頂点を持つダイヤ形に変化し、時々頭脳が異常を来たし、自分は居るのか、存在するのか、なぜ居るのか、と哲学めいた事を言うかと思うと、人の前で突然笑い出したり、座り込んだりしたことを想い出す。その上俺には、もう一つ判っている物があつた。即ち世の中の事、中卒、高卒、大学卒とそれぞれの勤務する職業を考えると、必ず大学卒の方が条件が良い。なる程大学卒には。学才がある。中卒より七年、高卒より四年学問をして学才を貯えた。しかし、この世の中に、どれ程の学才が必要だろうか、この世の中には、高卒者の早くそれよりは中卒の方が早く飛び出して世の中に触れてきた。大学卒の者が貯えている学問、例えば、世の中の職業の中に数学の高等数学の、知識がどれ程必要なのか、いや俺は、そんな物は必要無いと

くなつてくるのだろうか。叫びは実に奇妙なものだった。人間の叫びではなく、どこか、狼の遠吠を思わせるようだった。彼の叫びには今迄彼と戯れていた、コオロギやススキの穂も黙りこんでしまった。辺りは静まりかえり、彼の芯から出てくる叫びだけが響いた。

一体、俺は何だ！人間というものらしい。もし俺が人間ならば、俺は、もっと人間らしい生活をしているはずだ！しかし現在の俺は人間らしい生活をしているか。いや決して俺はそうしていない。もし俺が人間ならば、もっとも俺より卑劣な奴等は何だ。神か。ふざけるな！俺より卑劣な奴等が神のはずがない。神ではない人間だ。とすると俺は何だ。人間らしい生活をしている奴等が神でなく人間ならば、人間らしい生活をしていない。俺は一体何だ。俺はもしかすると、名もない路傍の小虫かもしれん。いや路傍の石ころかもしれない。ああ……

俺は死にたい。

静かに死にたい。

これ程自分を苦しめず死にたい。

小さな虫のようにあつというまに死にたい。

太陽は素晴らしい。なぜなら

永久に死なぬから。

炎は好きだ。なぜなら

静かに死ねるから。

石はもっと素晴らしい。なぜなら

苦しまず、永久に死んでゐるから。

時間はもっと好きだ。なぜなら

思つた。今も思っている。そして、現代では、人の職業が、ましてや人の一生迄が、この無用の知識の量で決められている。そうあるべきだろうか。あの時俺は、この問題に、悩まされずにはいられなかった。以前俺は「知識」と「常識」を相対して考えて見た事があつた。その問題の答が以外にこの問題、(職業と学問の)に一致すると思われた。具体的に「知識」が大学卒で「常識」が中卒という様に一致すると考えた。当時そんなことや、自分の今の生活をj考へてゐると、俺は、だんだん無口になつて行つたし、朝起きてても、顔は死人のように蒼白で、髪の毛はなぜか一本一本抜けて行く一方だった。顔の形相は。何もかも失つた人の如く、皺は増え、唇は薄く横に広がっていき、泣く子も黙る程に成つた。そして目には自分の悲運の悲しみを溢れる程貯め、視神経を司る大脳も、その悲惨さに影響され腐敗し始め、世の中の無情さ、自分が誤まつたかもしれぬ家出、下劣な職業などと思うと、胸が張り裂けん程になつた。俺の身体は、カビの生えた蒲団に横たえられ瘦せたばかりに突き出してきた目は、じつと天井の節穴だけに睨み付けられ、いや、これは俺がした動作なのだが、俺には他人の動作のように思えた。脳の異常かもしれぬ。俺の途中でぐぐつと折れ曲つた運命は、何が原因だったろうか。不良との付き合い。いや違う！奴等と付き合つた事には、立派な理由がある。奴等も、親に見離され自分の力だけで立つた。奴等の踏入つた道は間違いだらけでも、「独力」を誓つた奴等は素晴らしい。「独力」こそが、俺の奴等の魅力なんだ……彼は回想している途中で何か叫び始めた。それは、自分のあまりの惨めに、自分がなんであるか、いや自分の存在ですらわからない

あつという間に死んでゐるから。

俺は死にたい。

だが……

死は恐ろしい。

この後の言葉は、精神的叫びに変わり、聞きとることは出来なかつた。彼が言うように彼は小虫、石ころに変化しているのか。その後の言葉は小虫が、石ころが発したと思われる言葉に、泣声に、いや音に変化していた。彼はぼろぼろと大粒の涙を流している。彼の涙は一体何を示しているのだろうか。彼自身の惨めな、哀れな運命か。世の中の醜さか。彼の親への憎悪か。何れにせよ、彼は自分を極度に軽蔑している。彼の態度から、いやおう無しにそう解からされるのだ。そうしている内にも彼の回想は続けられている。頭を抱え、髪を振り乱し、死神の吐く息かもしれない暗い霧に包まれ、彼の過去に足を踏み入れていった。

しかし、「不幸」に取り付かれた俺にも、神は「喜び」を与えてくれた。思いもしない所で、突然に神は俺に「喜び」を与えてくれた。それは俺が悪たれ仲間と付き合い出して三ヶ月程たつた時の事だった。その日俺は珍しく朝六時に起きた。その日の天気は素晴らしい。冬とは思えないくらい暖かく、しかも空には雲一つなく、三階立てのアパートの屋上からは多くの家々が鮮明に、一つ一つの家の瓦を数えられる程鮮明に臨まれた。朝起きた俺が、太陽の光のまばゆさに、何か心を打たれる物を感じ屋上に上つてみたのも俺にとつては珍しい事だった。俺は朝六時に起きて、何をすれば良いのか考へている内に、いつの間にか、今俺の居るこの公園の芝生に寝転ろ

んでいた。そして、目の前のすでに全盛期が過ぎ落ちてしまった真赤で強烈に俺の目を引いた椿の花を睨み付けていた。いつまでもいつまでも俺は椿を睨み付けていた。その内にも時は流れ、辺りは静寂に、真暗になっていた。俺はそこに居るのがなぜか恐ろしくなり、自然の何からにをも動かされぬ落ち着いた態度に俺の愚かさを指摘されその場に居たたまれなくなったかもしれないが、俺はその場から尻尾を巻いて逃げ出した。さて、俺の逃亡の果てる所は、若さが溢れるジャズ喫茶であった。当時ジャズ喫茶は若者の間で人気があり、俺も別に反感なくそこにちよいちよい姿を現わしていた。そのジャズ喫茶は悪たれ仲間と初めて合った場所でもあったが、その日再び奴等と出会った。奴等は三人。あちこちバーをほつつき歩いたのか、もうかなり酔っていた。俺も幾分酔ってはいたから、奴等の口車に乗せられ、別の安いバーに行くことになった。そのジャズ喫茶では、可愛い娘が歌っていて、残念な気はしたが、奴等とそこを離れた。外は昼間暖か過ぎたのか、もの凄く寒かった。ぐでぐでんに酔って、火照っていた奴等には、寒さなど解らなかつたらしく、様々な下らない事をわめいては笑っていた。通り過ぎる人が笑うのもかまわずに、俺は奴等を安いバーに通じる道にいそいで引っぱっていた。その道は夜の暗さと、ネオンの照らすビルの影の暗さとが重なり合い非常に暗かった。道は舗装されていないためデコボコで、その日の前まで降り続いた雨がところどころに残っていた。奴等は小さな石に躓いては転び、転んだ所は定石なのか常に汚ない水溜りだった。奴等が五回、俺は一回奴等に引かれて転んでいた。さて奴等が転んだ六回目の地点が俺達の目的地だった。全

体が墨で塗られ陰気な雰囲気で包まれているそこは小さな、貧弱な家だった。その家の小さな戸に俺が手を触れた時、奴等は戸を見ているところか今来た道をじつと興味深げに睨みつけていた。俺も無意識に手を離し目を向けて見た。なんと、暗い道から現われたのは赤い服を来た、美しいとはお世じにも言えぬ、ただスタイルだけは素適な女の子ではないか。その女は急ぎの用でもあったのだろう。こんな暗い路地を小走りにすたすたやって来たのを見ると、奴等は酔っていたにも係わらず、悪い事に確実な意図を見せた。すなわち奴等は瞬時に耳打ちをすると、その女と擦れ違ふ寸前電光石火に、その女に足を掛けた。その女は、酔った奴等の転倒よりみごとに転んでしまった。酔狂と元来の性質が奴等を襲い、その女に悪戯し始めた始末。と言えども、まだ奴等は女に手はつけていなかった。奴等のニタニタ笑いが俺にそう思わせたのだろう。奴等の中の一人が遂に女に手を出した。女は酔漢に襲われただもうおろおろし。震駭するのみであった。奴等の醜態を俺はただ単に茫然と見つめているのみであった。ところが、俺の心の片隅に俺自身その正体が何であるか解すことの出来ない物がふつと現われた。その時は何か全々見当もつかず、又何をすれば良いのかも全々見当がつかなかった。だがその何かは、夏現われる入道雲のようにみるみる心全体を支配し、遂にはその何かは力として現われた。俺はいつの間にか奴等の一人を殴っていたのだ。殴られた奴が「勿論奴も酔魔にたかられていたから黙って引き下がる訳があるろうか。奴はすぐに俺に飛びかかった。一瞬殴り合いになるかと思われたが、奴は奴の体格実に背が低く痩せていたが、災禍し俺の一発の鉄拳でKOされてしまった。

その何かはまだ俺から離れず、俺に奴等に対し「やめろ」と言わせた。俺は何がどうなっていたか何も覚えていない。俺は無意識にそう言い、そうしていたのだ。「やめろ」一口で酔いつぶれた奴等が悪戯を止めようはずがない。奴等は意気軒昂とし俺に立ち向かった。あの頃、自負する訳ではないが、俺は喧嘩が好きで、又強かったから、奴等三人位何でもなかった。俺は奴等を、俺が殴られた数以上に殴った。奴等は俺の強いのに驚いて、そう、俺は奴等の前では喧嘩した事がなかった、ほうほうの態で逃げ去った。奴等が逃げながら吐いた言葉は「覚えていろノ」。これだったが……。俺は再び何かに誘惑されて、今度は彼女の方に近ずきつつあった。女は幾分俺を安心しているようで、俺の方を有難そうにじつと見ている。俺は、俺自身そんな事は考えていなかったが、彼女に對抗するようにじつと見つめていた。俺と彼女はじかに見つめ合った。二人の間は三十センチと離れていなかったであろう。初めて合ったこの女。俺をじつと見ているこの女。一体何が、俺に起こっていたのか、俺はなぜ。あんなにあの女に心を奪われていたのだったか。俺はあの時、俺の頭脳に閃きを感じた。プラトニックラブ。人間は元々恋する相手は決まっていって、恋はその二人の出合いから始まるというプラトンの言う恋愛だ。プラトニックラブ実に俺たち二人にはぴったりだった。俺があの時解すことの出来なかった何かもそれで説明された気がした。俺たち二人は瞬時の愛が燃え上がった俺たち二人は、あの時静かにその場を離れていた。手をかたく握り合いい、深い暗い都会の霧に包まれながら。二人は静かにその場を離れていた。

二人の道よ。
二人の歩くこの道は。
二人の歩いたあの道も、
二人だけの素晴しき道よ。
二人だけの光の下で、
二人は語る。
二人のことを、
二人は一塊。素晴しき塊り。
二人の胸はときめきて、
二人の胸はときめきて、
二人でなしぬ、
素晴しき接吻。

二人の世界は夢のよう、
二人はただもう見合うだけ
二人は黙っていても心は通ず、
二人の言葉は一つのみ。
二人の心は。春素晴しき春。

二人の道よ。
二人の帰るこの道は、
二人の通ったあの道も、

二人の通った素晴らしき道よ。

それからずっと俺は彼女ときき合っていた。俺の「不幸」が現われる迄は俺は彼女と、清らかな関係だった。彼女を「不幸」はこの世から永遠に消してしまつたのだ。俺の想い出のまだ先に、彼女を奪つた「不幸」が待ちうけていた。「不幸」は俺を突然襲つた。その「不幸」とは……

彼は愛する彼女を瞬時に「不幸」によつて奪われてしまつた。彼の回想通りである。さてその「不幸」とは。それは彼のこれからの想起が教えてくれる。

俺がああ娘と出合つてから三ヶ月たったある日、俺をより強烈に破壊に追いやる災難が降つて湧いた。あの日も俺は、今のようにこのベンチに腰掛け、俺の過去の想い出の中を歩いていた。夏の日だった。緑々とした草の中の真赤な花、あれはアマリスだったか、を見つめていた。突然、俺は物凄くガツチリした体格を持った男に俺のきやしゃな可弱い腕を掴まれた。俺の腕の痛さも、心の動揺も、――理由の解らない事をされて、心が動揺するのは当然だった。――考えず男は俺を車に詰め込んだ。その男は私服の刑事だというのが解つた、のは俺の乗った車が警察庁に着いた時だった。男は跳ぎに跳ぐ俺を数人の大男に掴えらせて、狭く冷い四方がコンクリートに囲まれた重苦しい廊下を歩かせた。狭い、窮屈な室、室の戸に「――取調べ室」と書いてあるのは後で知つた事だが、でその男は俺に、問い掛けた。「女を殺したのはお前だな、」突然の言葉。女。女。俺は女という言葉聞き、頭が混乱した。俺に関係のある女、俺の知りうる女。女？ 誰だろうか。果して、俺に関係のある女と言え

ば、俺の愛したあの女しか想い浮ばぬではないか。俺は一瞬ぎくりとした。頭や手足の末端部に全部血が止まり、心臓の音の高鳴るのが手に取るように解つた。俺は男に問うた。「彼女が死んだ？ 刑事さん。嘘でしょう？」その言葉の力なき、俺はその余りにも激しいシツクに絶えられず、意識がもうろうと成りゆくのが良く解つた。その後俺は氣を失つたらしい。俺は夢の中に居て、俺は夢の中の俺を俺のこの目で見ることが出来た。俺が俺を眺めていると、もう一人の俺は地獄にいる、地獄の鬼に囲まれて俺は下から噴出する炎にあふられて、苦しみ跳いていた。囲りの鬼はしだいに俺に近づいていき、俺の口をかつと開きあの物恐ろしい大きなベンチで俺の舌を引き抜こうとしていた。「ギャ――」俺はその叫びと共に目を覚めた。そこは元の通りの冷い室だった。刑事達はすぐさま俺に質問を投げつけた。俺の答は常に「知らぬ。」だった。数ヶ月たつと俺は前よりもつと冷々とした監獄の中に縮こまつていた。何とならば、俺は女殺しの罪で無期懲役を宣告されていたのだ。完全なるぬれぎぬだった。俺は探した。俺の頭脳の暗記しうる限りの人物を絞り出し、俺にぬれぎぬを着せた奴を探し回つた。犯人は割り出せた。「そなた、あの悪たれ仲間だ。彼女に会つた日殴り飛ばした奴等だ。奴等を俺は「仲間だ」と信じていたが、現実には完全に欺かれた。畜生。奴等に必ず復讐してやる。」俺は監獄でたつた一人でこう誓つた。一三日過ぎて、俺はそこを逃げ出した。脱獄は思つたより簡単に出来た。不思議なくらい簡単だった。幽かだが、脱走に手助けをした奴がいたように覚えてゐる。誰だつたらうか。彼は警察を逃げ出し、公園のベンチに腰掛けて、今までの事を

回想していたのだった。彼の回想は生れてから始まり、遂に現在の彼、追われている彼に戻つて来たのであった。今、突然彼は立ち上がった。彼はどこかに、重い足どりで歩いて行くらしい。その方向は、彼女と初めて合つたあの細い長い暗い路に、あたかも彼女の亡霊に引かれて行くように悪たれ仲間を殴つた路に違ひなかった。又しても霊の力が偶然という事実を創造した。彼は会つたのだ。彼を裏切つた奴等と。彼は奴等に問う。「貴様等だな、女を殺したのは、」奴等は答えた。「知らないね。」彼は激怒した。彼等の非人間的心境に。奴等の犯した罪を知らぬふりをして、再び彼を欺こうとした。彼の肉体からは力、人間だけが持ち、人間らしい行為をするに使われる力はたちまちにして抜け、後に残されたものは悪魔の力だけであった。彼の態度も形相も悪魔の持つそれになつていった。彼の身体が少し動いたか。その時急に恐ろしいことが激発した。彼の前にいるはずの奴等が、今は彼の足元に、恐怖にゆがんだ形相でゴロゴロと転がっていた。奴等の身体は正常な姿ではなく、憎悪に狂つた、或いは子を奪われた猛獣に襲われたように、めちゃくちゃであった。彼は二本の足で静かに立ちすくみ、片手にはしっかりと、血みどろの登山用ナイフを握つていた。彼は走元に死んでいる奴等を見て、後悔する様子もなく、かえつて満足感を味わつて

いる様だった。ところが、事はそれで終りではなかった。又しても突然、真黒な服を着た男が現われた。男は彼の後に忍びより……ちようど左側の心臓部を、一突きぐさりと彼の所持した登山用ナイフと同じ物で突き刺した。彼は突然の変異に驚き後を跳ぎながら振り返り向いた。なんと、彼の発した言葉の奇怪さ、

「おお！ おお！ ババ！」「なぜ？ なぜ？」彼は静かに男に抱きついていった。彼の力はほとんど無い。男は彼をそつと抱き締め、優しく、まるで蜚蜚の命のように短く語り聞かせた。「ゆるしてくれ。私はお前を幼い頃からずっとずっと、心から愛していたのだよ。お前は私の可愛い息子なのだ。なんで私がお前を見すてよう。家出した時も私はお前の居所は知っていた。大学に入れたのも誰のためだと思ふ。脱走の時も誰がお前を助けたのだと思ふ。私はお前を愛していたのだ。お前を死に追ひやつたのも、愛するがゆえにだよ。わかつてくれ。お前を墜落から救わんがためなんだよ。わかつてくれ。ゆるしてくれ。」

彼は自分の親をじつと見つめた。その目には涙がうるみ、親に対する「憎悪」「復讐」は姿をくらましていた。彼は親に接吻した。彼の唇はその後離れようとしなかった。なぜなら彼には唇を離すだけの力も意識もなかったからだ。彼は接吻を最後にこの世から消えていたのだ。しかもこの世に彼はにっこりと微笑みを残して。彼の親はすつと立ち上がり、周囲に転がる亡者を見、そして再び息子に視線を移し、静かに静かにゆっくりと死者に言い聞かせた。

「私がお前を嫌いなものか。心から愛していたのだよ、心から……。」

太陽はいつの時か沈んでいた。

銀座の事務所に行くわ。」

「それじゃ、お金に困まるなんてないわね。遊べるじゃない。」と真澄美が言った。

見事この雄弁作戦に巧を任めたようだ。

谷が疑惑の目でジンを進めた。が、和代は肝臓をこわしているからと断わった。アルコールは飲めなかった。突然の事件で一瞬にして主人気取りの彼女は為体の知れない不安を覚えたが乗りかかった船にしばらくは腰を据える事にした。

「でも私は満足していないわ。」

「どうして？」

「わからない。退屈だからかしら？」

「僕達の中にいればそんな事もないよ。」とさも自分達を一般人から優位に保っているように沢田が言った。彼等が天津を信用しているのは事実であった。谷はブランドイーを二、三杯飲んでいたが赤い顔もせずステレオから流れる音楽を聞いていた。紀代子が話しかけていた。

和代と天津はそれで店を出た。

「本当は谷と待ち合わせたのさ。時計の事もあったけど、君に会わせたかったんだ。やつら余所者は嫌うけどすごく義理堅いんだ。当分あの連中と遊ぶのもいいよ。あとは連絡があったら行けばいいのさ。ああ、それから君は飽逆も英雄なんだからそのつもりでね」と言った。

それから一週間程して、例の、谷、天津、紀代子、鳥井、吉井それに和代は品川にボーリングに行った。吉井が「ボーズがすごくき

れいだ。」と言って和代をほめた。が、やはり楽しくはなかった。

熱中して帰って来た時のさみしさ、寂寥とも似た空々しさであった。床に着いてからもその空しさは消える事なく彼等と同行した事を後悔し、そして次第に色々な事が頭に描き出された。又少なからずこうなろうと和代自身想像していた。それは滝田を失った事も作用していたろうが、根本の原因はもっと他にある様な気がした。

精神的な傷を治やすのには時間以外の何者でもないからだ。遊びは短時間の肉体的酔酔でいわずに麻酔だ。麻酔は或る時間に達したらその効力を断つ。遊びも全く一致する。意志の薄弱な者は現実には空白で、しかも内面では重要な時間に堪えられないから遊びに行く。大抵がこのケースだが、遊ぶ事によってその時の自分を誤魔化す。だから別れて家に帰れば再び寂しくなりそれに空しさ加わる。

和代には無二の親友として疑わなかった滝田という女がいた。その仲は中学時代から続いていたが学校では格別目立ちもしなかった。家庭内の事、進学……しかし、所詮女は女で年頃になると或る男性の事で急に疎遠となり破壊して行った。別れたのは四カ月前である。和代があらゆる物を疑い出したのは別れる半年前頃からで、親密であったが故にその度も激しかった。いわゆる不良・体裁良く言ったら資本主義体制の生んだ奇形児とでもいうのか、そんな者に興味をもつ様になったのもこの頃からだった。

又、天津は天津で悪気はさらさなくかえって和代の事を熱心に考えた末の手段だったに違いない。何故なら、彼は体験を通して身に着いた事が理論で覚えた事よりいざという場合に役立つ事を確信していたからだ。

谷から電話があった。叔父の創立祝賀会に呼ばれているから行ってみないかという事であった。彼等の中で最初に招待してくれたのはあの時一人で酒を飲んでいた男であった。礼儀正しい言葉使いに母は真面目な友達と言った。

その夜、彼は黒いオースチンに乗って向えに来た。母は上品な車にか、上流階級の洗練された仕様に安心してか和代をまかせた。

チアコール・グレーの背広に同系色のネクタイという盛装だった。それにしても彼の変装ぶりは見事だ。真昼からアルコールを飲んでいたりとおもえば車に乗って来る。M族スタイルとおもえば渋い英国調の背広を着て……和代はこんな彼の正体を知りたかった。今はあたりの雰囲気まで尊敬にしてみよう顔つきだ。

成城から赤坂まで

しばらく口をきかなかった谷も「今日は僕達の学校の連中も来るんです。申し遅れました。僕はK高の三年です。貴方の事は天津からうかがっています。秀才高の女子はやはり理知的だ。」と月並みのセリフを言って和代を見た。彼女も負けてはいなかった。「今日の貴方は素晴らしい品格をお添えですわ。それに背広の御趣味も……」彼は参ったと言って降参しこのゲームが済むとあっさり和代の優を認めた。

道路の水銀灯が車を包んだ。

「ところで、今晩はアルコールも出ますが。」と意味有りげに言った。彼の腕は右に左に急がしく旋回している。「私アルコールは全然駄目なんです。」と否定した。予期していた返事通りになったのか谷は満足気な笑いを浮べた。「僕もそう思いました。天津のや

りそうな事だ。それにしても貴方の出現は彼女達に変改をきたそうとしてるのは事実ですね。全く貴方の出現は魅力的なやり方でした。」明らかに谷潤は彼等から離れている事を認めている。かりに入っているなら今の様な彼等との仲に溝を作る様な暴言は言えないからだ。和代は谷の行動が納得出来なかった。そしてこの際だと思つて和代は「貴方は何故あのグループに入ったのですか。」と尋ねてみた。すると彼は、こう生活が倦怠して来るとたまらなく刺激を求めたくなり、気兼ねのいらぬ彼等とつき合う様になったと言った。実に単々とした解答ぶりである。先程よりわずかながら気不味い様子を示したので何か事状がある様な気がして同情ともつかない親近感を覚えた。この同情も少女趣味の他愛もない連想感により生じたものだが、こうする事によって彼と親密になれそうな気がした。彼の後について会場に行った。「大東株式会社五〇周年祝賀会」と記されてある。ブーンと匂ってくる蘭の香が彼等を陶醉させた。

「やあ、これは谷君、老社長はお元氣かね。」背が高く、髪の毛一本乱さず、年のわりには派手な背広を着、同色の茶色の靴をはいていたその余裕のある顔の底に世の辛酸をなめた様な深いしわが刻まれ、独創的な感じがした。和代は谷がどこまで驚かすのだろうと見当もつかなかった。あれだけの年長者としかも同等の位置で話しているとは。中央よりやや東側に席が用意されてあった。しばらくすると彼と同じ位の少年がテーブルに近づいて来た。紹介が済むと「谷、この間の君の論文読んだよ。良かったぜ特に朝鮮戦争のところ力があつたよ。ところで今日は？」僕は親父の代理なんだ。彼女とテートの約束があつたのに。」と小言を言いながら帰った。

社交界と実生活・学生しかもバランスがとれているのだろう。でなければどこかで食い違いが生ずるはずだ。中世の騎士と異う点といえは現在恋愛していない事だ。

主要人物の挨拶が済んだ。財界団から集まるとあって、各新聞社、雑誌社のカメラマンや記者達も少くなかった。和代の父、足代基彦も姿を見せていた。

しかし和代としてみればこんな形式化したパーティーよりM族の方がむしろ興味深かった。そしてこんな所で誇らしげに話している女達を憐れに思った。ペールをかけての交際―虚栄だけのその内側においては鹿鳴館時代と大差ないのだ。彼の進めで少量のシアンペンで口にしたせいか顔が熱かった。

……この人、青山にいた時は普通の高校生と変わらないし、銀座では南京袋を持って歩いてた。と思うと一夜明ければ閑雅たる趣のある紳士ぶり、あまり度きつい化わり様にどう解釈してよいのか？ 遊び、学校、社交界全然別の世界にためらう事なく、こたわらずに入っていく。その時々で人間が変わる。勿論外面だけだが……分裂的なのか？ どっちにしても今日の彼は本物ではない。こういう場所に必要な慇懃な態度をとり父親の代理を勤めているだけだ……などと考えながら車に乗っていた。

和代は床に着いても眠れなかった。人間は何か熱中している時が一番美しいというが谷は何に熱中しているのか何一つ分からなかった。

朝教室に入ってきた和代に二条が、最近自分達と話さなくなったがどうしたのだと聞いた。和代にすれば別に答える必要もないと思

倫理の時間に限って反論者の出ない事は確定的であった。退屈な時間には人間は一時的に空模の世界を這うだけである。

三時限の物理の時間、この前の試験をかせいでくれた。若い教師はみんな点数が良いと言って喜んでた。

そして四時間目終了と同時に和代は関担任から呼ばれた。教員室に入っていくと一斉に教師が自分の方に注目した様に感じた。この伝統的退屈精神の雰囲気は個人の意見を率直に言えないものにし、和代にとっては苦手な所であった。担任は

―最近授業に身が入っていない様だがどうしたのだ。―と訊ねた。彼女自身もその事は認めたが

―別にどうもしません。暑いからだと思ひます。―と言ったら喫茶店の話やなんだかんだといってくるので心配してくれる彼には悪いが気分的に口論はしたくなかったので物理の試験が良かったといつて帰してもらった。

和代は関担任にあんな態度をとろうとは思っていなかった。ただ自分の気持ちに柔順に従って事をなしたらそんな風に言っていた。自分でも変わったものだと思ひながら帰路についた。

山中から「D」に行こうと誘われたが和代は担任の手前遠慮したその夕方、家に帰るや否や和代は母から呼ばれた。よく呼ばれる日だと思ひその理由は放課後の事だとわかった。居間に入っていくと、あんのじょうそうだった。気分が良くないからと母にも嘘をついた事で最終的には罪悪感に駆られた。その後数日間外出はしなかった。

それから一週間達って九月十九日、大津から電話があった。今週

っていたのか黙っていた。そして山中が心配していると言った。和代は諄そうに心配する様な事はしていないと答えた。

一時限―倫理社会、例のごとく教頭の長つたらしい話が始まった。ジョン・スチュアート・ミルの巧利主義をひっぱり出して話していた。蝶ネクタイに手をやり目がねを鼻まで下けている。あちこちで関係のない話し声が聞えてくる。後から大津の軒が聞こえだした。寝てから二〇分位だ。彼は常に寝てから二〇分に軒をかく癖があった。教室は静まりかえって大津の軒を除いたら誰も息をつかないのかと思った。

八〇分の授業は飽きて来た者を黙想と耽らす。和代もその中の一入であった。

―私は半分どころか全部あのグループに入ろうとしている。最初は興味本位だったが今は違う様な気がする。谷がいるから？ 滝田さんとの事があって以来私は一人でいる苦しさに耐えられなくなっている。あれだけ堅い友情だと信じていたのに、些細な事から脆く崩れ落ちてしまった。加速度的だった……。あの人も私も傷つき、そして私はあのグループに入る事で自分を自分から逃避させようとしているのかもしれない。だって当の滝田さんは苦しみというまでに笑っているじゃない。私が逃避しても卑怯じゃないわ。それにあのグループに入れたのは大津君だわ。結論としては逃避的な考え方が支配して現在の不安を少しでも薄らげ様としていた。又、そう考える事が和代にできる唯一の自己防衛だった。

教頭はまだ熱心に講議を続けていた。この現代の矛盾した教育法に誰が反論しよう。

の土、日にかけて葉山に行こうという事だった。谷も同行すると言ったので和代は承知し、迎えに来るのは谷にする様言った。大津は不平そうに口をきいていたが結局谷を迎えによこすと言った。母には谷と彼の姉と軽井沢に行くと言って許可を得た。土曜日の午後二時半、二台の車を使って一行は谷の家から出発した。前を走る沢田の運転する側に真澄美が坐わっている。無論大形の免許は誰も持っていないかった。京浜第二国道を通り葉山に着いたのは途中遊んで来たせいか五時四〇分だった。

谷の別荘には白木老婦夫が住んでいた。

彼等は休む暇もなく海へ行った。昼の終わりを遂げ様と、太陽は地平線に沈もうとしていた。朱色の光線が海面に映えてふんと潮水の匂いが鼻をついた。彼等は遠く南海の孤島に閉じこもった兵士の様に沈黙に耽り、その虚無的な風景に見いられていた。砂の上に腰をおろし、しばらくこの状態が保たれた。

やがて、どこからともなく奏でも音色にふと我に返りその音に耳を転じた。波とギターの音だけで、静かで、皆善人で、平和だった。真澄美と大津がそれに合わせてハミングしている。月の光りで砂が黄色っぽく、ギターの絃も銀色に照り返した。それぞれ感傷的になり哀愁に誘われていた。波もただ砂を洗うだけだった。

こんな彼等を見ていると和代は彼等の言っていたモダンジャズや「D」での態度に不可解さを感じるのだった。

突然オクターブの高い音がなり出した。すると彼等は忘れかけていた記憶をとりもどした様に立ち上がり踊り出した。

アメリカのニグロの音楽である

沢田は体を傾めにしたままギターを弾いている。真澄美は奇好な恰好で体をくねらせ、大津は空中転回した。ただステップだけを考へればよい。吉井は海の中に飛び込み上がって来ては砂の上に横たわった。鳥井は沢田の肩に手をかけ髪を振り乱し、腹の底から絞り出した様な低い声でうめいた。口は大きく開き激しく息をついている。そのうち興奮して来た彼等は上着を脱ぎ水着になって海へ入って行った。和代は初めて見るこの光景に、不安と興奮と多少の軽蔑とで最初は途方に暮れていたが、彼等は熱狂の余り和代の事は気がつかなかった。踊っている間は彼等の嫌う教室での緊張の持続はないのだ。

砂の上にギターと赤いシャツが捨てられてあった。谷がそこから五米程離れた所に坐つてしきりに太陽の跡を監視していた。和代が近づくとも砂をつかみながら「こんな所に来た事を後悔しているだろう。あれが彼等さ。」と言った。自己を捨てて言っている様な彼に奇な共感をもった。確かに彼等は資本主義体制が生んだ奇形児かもしれないが、まだまだ彼等から吸収する物がある様な気がして、あえて首を縦には振なかった。と言うより、和代自身彼等に入りきれなかった事を本能的に感じ口に出して言えない自分の勇気のなさに地団駄踏んだ結果にすぎなかった。

谷は沢田のギターをとると静かに弾き出した。時々かすれる音が殺伐たる彼等の音楽とは違い物寂しささえ感じさせた。

二時間程達ったか大津が真澄美を抱いて海から上がって来た。遠泳していたらしい。

「彼女、さっきアルコール飲んでいたのさ。」と言って砂の上に

に真澄美は紀代子が露骨な態度をとることに反抗的になり、全力をあげて強情に立ち向っていた。が、彼女は結局敗北を認めざるを得なかった。各々が独立した世界の主だ。そして、その中には他人が入る事は出来ない。和代がいくら慰めても無駄だった。

五時間も踊りっぱなしの彼等も疲れを感じたのか十二時近くなる一人、一人と帰って行った。和代は谷に真澄美をどうすると聞いたら、彼ははっきりと「彼等と来たので残酷な様に思われたがそうした。」

白木夫妻は眠らずに待っていて軽食を運んでくれた。隣の真澄美の部屋からは壁を通して微かに泣く声が聞えた。

和代が食器を運んで行くと、「今時めずらしく気のつく方だ」と言っていて和代の名前を尋ね、「潤様のお友達はみなさん御立派です。」とついでに谷を誉めた。

そこでしばらく新聞を読んでいたら谷が二階から降って来た。イスに腰をかけて黙りこくっていたが「君は早くこのグループから出て行けよ。」と言った。内心自分もそう思っていたが何故か反撥を感じ奇な意地で私の勝手よ。」と言った。そしたら

「角田への同情だろ、そんな必要ないさ。しばらくは正常になるけど常に過度の刺激を求め合う彼等には、一時的な興奮にすぎないんだ。この刺激もすぐに尽きて別の物に取付くんだ。現代がそうさせるんだ。君一人で対抗したって勝ち目はないさ。」と言った。和代は腹の中を片端からえぐられる様な気がした。

「君の過去に何があったか知らないし、聞きたくもないけど、そんな事はたいした事はないのさ。君が入って来た時から長く居る人

置くと立ち去った真澄美は悲鳴に似た苦しさをうったえた。和代が介抱しだすと「どうして踊らないの。」と聞いた。「貴方が良くなるまで踊っても楽しくないからよ。」と言ったら和代の手を払いのけ子供の様に大声で泣き出した。そして彼女の胸に顔を伏せた。

「私は同情は真平よ。私を憐れんでいるのでしょうか。私不良だから……くやしい。同情なんかしないで！」と一層激しく騒ぎだした。彼等はちらっと真澄美を見ただけで何も言わなかった。何も言われないのが彼等の礼儀なのだ。

沢田は近くの松林から小枝を集めて来て火をつけた。乾燥しているのでもめらめらと燃えた。

谷は砂の上におおむけになっている。要するにこの男達は格闘に勝てるだけの体と人を口説ける雄弁術しか必要のない人間だ。女も同様に口説かれる為に着飾っていればよいし、したがって口にしえないが女特有の或る虚栄からなる競争心で仲間同志戦っているのだ。無言で。同性に同情心がみられないのはそのためで、彼等はそれを吞込んでいた故、彼女達を裂く事はしないのだ。

自分達を満足させる刺激を欲しているだけだ。しかし利己主義者ではない。何故なら、紀代子は真澄美に対する競争心があっても疲れ切っている彼女を短時間ながらもそっとしておくではないか、話しかけないで狂気じめる事イコール静なのだ。全く理論では矛盾している。

大津は長いパンをかじっている。吉井はリンゴの皮を捨てた。誰一人真澄美を踊りに誘う者はいなかった。そのうち紀代子は勝ち誇った様に特意になり真澄美に敗北を認めさせる為か踊り続けた。逆

でない事はわかっていたさ。」と言って二階に上がって行った。それから和代も引き返した。翌朝十時半、誰も起きてはいなかった。しばらく散歩して帰って来ると、彼等も起き出した。真澄美は目を赤くさせている。一晚眠むらなかつたのだらう。ソファに寄りかかって眠りはじめた。そんな彼女に和代はおもわず笑えんだ。

午後一時、食事を済ませると彼等は達つ準備をし始めた。老夫妻は六時に達つても遅くないと止めたが、満足した彼等には葉山は用のない所となった。

四時、一路東京へと向った。前の車には大津と紀代子が寄り添って坐わっている。吉井がひやかしていたが二人共知らぬ顔をしていた。谷の運転する車には和代と沢田、紀代子が乗り、紀代子は彼の膝に頭をのせて眠っている。鳥井は急にスピードをあげた。谷の運転する車からはその後方がわずかに見えるだけでだんだん離れて行った。沢田も眠っている。

防波堤のすぐ下には昨夜と違った白銀の砂が波と戯れている。太陽の光で海面が白み、それが路上に反射してきた。この鋭い太陽の筋が束となり、永遠に続く様であった。

人間のなにかもを狂わしたのはこの白い太陽でこの乾燥期に出合った者が苛酷さを知り、およそ象徴として崇め祭るという事はできなかつた。

その光線が谷の横顔を赤く染めた。額から汗が落ちた。谷もこの物を杓き枯す冷酷な夏の終わりを満喫しているのだ。彼も孤独に違

いナかつた。和代は夕べの彼等を顔中に浮べ、結局人間はそれぞれの生き方を

肯定するしかない、まともに積極的に考えてそうなら。

午後六時、「D」に着いても鳥井達の姿は見えない。車を止めて彼等待った。紀代子と沢田は気の抜けた顔をしている。ジ、ジ、無線電信の音波が車内から流れた。発信地は鎌倉、大津からであった。制限時速六〇キロの所を七五キロで飛ばしたらしく、その上無免許運転で警察に保護されているとの事だった。

「多分今晩は帰れないから先に帰ってくれ。」と言った。谷が迎えに行こうと言ったが向こうから断わってきた。沢田は紀代子と「D」に残った。再び谷は車を成城へと走らせた。東京の空にはもはやあの激しい太陽もなく、人間と車と建物とでひしめき合っていた月曜日、彼女は昨日の疲れで二時間目から出席した。仏語の時間だった。この二日間の興奮がさめきらず頭が痛んだ。

三時間になっても大津の所は空席であった。そして、とうとう四時間終了までついに姿を見せなかった。警察からの帰りが遅かったのだらうと和代は思った。

学校の帰り新宿の地下鉄の入口で母と待ち合わせ銀座に行った。父の事務所にいき、それから夕食の約束をし、買物に出かけた。「御本本」………に行った。母のつれて行ってくれたところはみんな鄭重な御辞儀をし、立派な敬語を使い、月並みなお世辞を言った。どの人も紳士的で終始優しい心使いを示してくれたが和代にはそれが造られたロウ人形の示す単一の仕度である事を知っていたし母も知っているはずだと思った。これも文明社会の刻みこんだ息吹きなのだと思う。母は珊瑚の帯止めを買ってくれた。が、彼女はシルバー・グレーのスポーツシャツの方が欲しかった。

緒だというから事が面倒になったんだ。

「それから不利な事に葉山の海岸で騒いでいたのを見たやつがいるんだ。」藤間の事務的な言い方に興奮している様子が見られ対照的に二条はずうと下を向いたままだった。

「私には処分が下されていないわ。」と言うと、「やはり和ちゃんも一緒だったのか。」と二条が言った。

「大津君の車には乗っていなかったけど。」

「あいつはしょうがないさ。やってしまったんだ。自分で責任をとるよ。和ちゃん、何か言えよ黙っていると体に悪いぜ。」二条が大津に対する諦めの境地で言った様にとった。こういう場合には、ちょっとした言葉でも激しい侮辱を受けた様に感じやすいもので、突き上げるような激情が和代の体を襲った。

「随分ひどい事を言うのね。それだけ知っているのにどうして私にも同じ事をいわなかったの。あいつは駄目だと言ったわね。あの入道より残酷だわ。」

大津の事で朝から苛立っていた和代は、この誘因によって混乱興奮の血潮が一度に堰を切って一路怒りへと驀進してしまっただけ。二条としてみれば、男の大津はほおっておいても和代はそうできないからで、無論大津にも和代同然心配していた。しかし、彼女の衝動は二条への誤解を作りその上熱に駆られてどこまでも破壊的にしか考えられなかった。冷静さの欠いた彼女は「貴方が親友の様にしていたのは外見だけ？」

二条は受身になって聞いていた。

それから三日後、和代はいつものごとく念入りにブラッシングして学校へ出かけた。途中R大の学生が呼び止めたが素通りした。

二時間目山中恵子を通して大津が無期停学処分を下された事を知った。ここ二三日休んでいたのはその為で恵子と和代を除けば誰にも知られていなかった。山中は委員の立場を利用して関担任から聞き出したらしい。大津と同行していた和代に執拗な理由を訊ねたが彼女は拒んだ。二人共顔はやや蒼白した。当然と言えばそれにあてはまるが、もし葉山の事で処分されたのなら自分も同様にされるはずだから、少なくともあの夜の事ではないと思った。和代はあのグループの形にマンネリズム化して行く過程にあったのか、大津に対しては気の毒や同情に思ひより「やった」という感じの方が強かった。又、こうなれば自分にも事が起こると覚悟を据えた。

二条から紙切れがわたって来た。「四時間終了後例の公園に来るべし」と書いてあった。和代は清掃の途中抜け出して公園に行つた久しぶりの曇り空は人間に思考するだけの余裕を与えた。が、又そのどんよりとした空は重圧な憂鬱感を必然的に感じさせた。

松林を駆けめぐって彼等を捜しあてたのは学校を出てから十五分過ぎであった。和代の姿を見ると二条が立って彼女を坐わらせた。真刻な顔つきから大津の話である事を推測した。

「和ちゃん大津が停学になったの知ってる？」と二条が落ち着いた口調で訊ね、和代は予期した通りになり先程の蒼白さも消えぬまま、「知っているわ。」と答えた。

「鎌倉で警察に保護されたのが学校に知れて……スピード違反。無免許運転、未成年者でアルコールを飲んでる。しかも女子が一

「私帰るわ。」二人共彼女を止めなかった。「和ちゃん、自分の言いたい事を言えないのが苦しいんだよ。」と藤間が言った。

「やはり大津より和ちゃんの方が被害者だぜ、大津は遊びの為に思ってもあの人は中途半端な事は嫌いだからね。勿論大津だってそれだけでやった事じゃないだろうが。」

「彼女少し意地になっているだろう、だから今は言うべきじゃなかったんだ。」

和代は二条達と別かれてから小田急に乗っていた。このまま大津の家に行こうか谷に合おうか迷ったが、結局多摩川に行った。墨を這わせた様な空から小雨がばらついて来た。平日なのでボートに乗っている人も少ない。小糠雨に濡れた鉄橋がうら錆びた膚を露出していた。膚寒い風が頬をぬって、雨が容赦なくあたる。水面は殆ど静止状態であったが水は濁って、所々に水草が点在している。和代は自分の冷静さをとりもどすためにこの時が持続する事を望んだ。しかし、そう望む事が出来る様になった時は、何か類魔的な感じを覚えた。

自分はそのグループにいる時、或る自己満足に溺れた短い時間にも、現在直面している大津の問題にも、相手と自分を見つめている冷静な理性があると信じていたし、又、客観的にも働くだらうと思っていた。しかし、先程の二条へ言った言葉興奮して感情の操作もできず口走つたにしろ、その内容の幼稚さに、行動と思想とその表現の一致のむずかしさが実証されただけで、やはり自分は精神的に子供だと思った。だからこの感覚は大人ぶっていた錯覚をさますもので大津や二条に対してではなかった。それから奇に二条と自分と

大津の中が破壊していかのか様だった。しかし、その奥では絶対破壊しない自信がありながら……。

オールが鉄の支えに食い込み油の切れたその体からギンギン音をたてた。「水泳禁止」と書かれた札も見窄らしく色あせている。

和代は車を拾って帰った。彼女の心に残ったものは自己嫌悪の苦々しさだけで慰めてくれるものは何もなかった。そしてとことんまで考える事が恐ろしくなると、こうして苦しむのも原因があるからで、それは人間界の因果関係によるどうしようもないものと決めていた。

家に着くと、雨にぬれたためだろう頭と体が熱って来るのが感じられ、そのまま眠ってしまった。

遠くの方から頻りに誰かに呼ばれるのが聞えた。——こっちの方が楽しいわ……。

——お前は今のままでいいのか？ それは

幻想的で話してみれば途中で切れてしまう物語だった。霞のかかった様にぼんやりした頭が自分は病気ではないのか……と考えていた。頭が激しく痛みを覚え、喉の辺りが苦しかった。腕がベットの上にとり出されているようだ。幼い時花畑で蜂に刺された時の感覚を思い出した。冷たい液体が体内に流れほとんど同時にジーンと痺れた。そして急に眠気がさしてきた。

その後長い間何をしていたのか、されたのか全く分からなかった気がついた時は頭の痛みがとれて体が楽になった。

山中恵子が見舞に来た。

体の方はすっかり良くなったのだが考える必要のない空虚な世界

れた様に肩の力を抜いた。吉井がつられて立ち上がる。鳥井の奇声が飛ぶ。鳥井が谷に「踊らないのか。」と言ったが谷は「踊る必要はない。」と答えた。彼はこの返事に軽蔑された様に感じたのかそのあとは言葉を続けなかった。和代はベランダから庭に出た。病み上がりの彼女は縛られた世界が無意識のうちに、たまらなく苦しく感じていた。谷が後から来た。

水銀灯に照らされている木々が冷たい不健康な鮮緑色をしている。大きな松の間からちよろちよろ水が流れ、それが池へとつながっていた。池の側のイスに腰かけしばらくベランダの彼等を見ていた。

「君は何から遠ざかろうとしているみたいだ。」と言った。和代は無言のままだった。「だが今はさければさける程、もがけばもがく程それは奇妙な形で忘れられなくなる。」彼はあえてどうしろとは言わないが和代には自分が今ここに居る事と、大津の事だと反射的にはねかえった。

「君は事実を事実として認めるのがこわいんだ。自分の過失をふりかえるのはいやなものだけど、君はこの中にいやいやいけないんだよ。好奇心、逃避なら続かないし、かえって良くないさ。だから自分のとった行動を見窮めてこれからの事を考えなくてはいけないんだ。」谷の誠意も身にしみてうれしかったが、こうしている事が自分を成長させる要因になる様で、脱却する分岐点に達するまでとてあえずこのままでいようと思った。この分岐点もすぐ近くにあるかあるいは遠くにあるかおぼろげながら分かった。このグループにいる事は大津の処分いかんで決まる様な気がしたからだ、

に慣れたら体が楽を覚えてとうとう一週間休んでしまった。

紅葉し始めた庭の木々が夜露に濡れている。母に呼ばれて応接間に行った。すると鳥井、沢田、紀代子、吉井、谷が来ていた。和代の珍客のために歓迎してくれた。母は葉山での事はまるで知らない。大津の姿は見えず、真澄美も来ていない。ソファによりかかっていた彼等も和代が行くと口々に「元氣じゃないか。」と全快を祝ってくれた。

「真澄美さんはどうしたの、お見えになっていないけど。」と尋ねたら、誰も良い顔はしなかったがそれもその時だけで、沢田が、「あいつ葉山から帰って以来いくら誘っても来ないんだ。噂によると勉強しているらしい。」大津の事は聞かなかった。誰もこの二人の存在は見えて見ぬふりをしていた。

しばらくはこの荘厳な広い部屋になじめなかったのか話題もなかった。母が飲み物を運んで来た。この仲介者により奇な解体は一応まとまった。そして、雰囲気にも慣れて来ると、彼等はベランダに出たり、コーラをついで飲んだりしていた。鳥井がレコードをかけた。ステレオから音楽が響き出すと紀代子が踊り出す。順調なすべり出しである。片手にはコーラのつがれたグラスを持っていた。曲が激しくなるにつれて腰の動きもせわしくなる。葉山でのニグロの音楽と似ていた。彼等の持参したもの。コーラである事が不満らしかった。紀代子は踊りながら飲みほした。タンゴでもなければジルバでもない。この踊りは和代は初めて見た。無理に名づければ、「K族ロック」とかいふ彼等同胞のものだった。肩をいからせ、かかとを上げ、腕を腰につけたまませわしく踊り、スローになると疲

「君は理想家で空想力旺盛なんだな。それにわりと感受性も強い。」和代はこの谷が不気味であった。数える程しか会っていないのだが言う事が適中しているからだ。

自分が実力以上の事を言わないかわり相手にも嘘を吐かせないのだ。

和代は谷を残して部屋に戻った。

吉井が和代に踊る様要求した。

おそらく誰も彼女が踊ろうとは想像もしていなかったのであろうか和代がステップを踏み出すと、しばらく和代を見ていたが、ついに拍手を送り再び踊り出した。こうやってこの中にいる事は、およそ人間から何かをとった様な彼等の中に、同じ年頃の人間共、教師、社会との対立その最後の破局に直面して、人間として信じられる何かを見出した他にならない。彼等の中の十のうち九までは欠点であとの一つは良く、普通の人間は反対だが、その一つが人間として価値づけられる一番素朴なものなのだ。人間として裸なのだ。彼等が帰ったのは十時近くだった。翌朝、和代は母と学校へ行き母は担任に挨拶に行った。

その帰り大津の家に寄った。「どうしてあんな事をしてくれたのか……何不自由なく育てていたのですけれど。あの子は勘当されて高崎の祖父の元に行っています。」と聞き彼の不在を知った。涙ぐむ彼の母親を見て和代はどうしたら良いか当惑したが、適当な言葉が見当らなかったで、「大津君には大津君の考えがあつてやった事ですすから心配しなくても……。」と月並みの捨てゼリフを言っ

大津に手紙を書いたもののやはり出す勇気がなかった。

翌日、大津が勘当されている事を、山中恵子、二条、藤間に行った。彼の住所をおしえ手紙を出す様言った。

大津の空いた席はクラス中に波紋をなげかけた。事状も分からずして学校側の厳しい処分に反感を覚えたか、彼に対する同情としては、今では消息を尋ねる者も出てきた。

その後この事件に対する学校側の対策も一斉明らかになされている。生徒としても軽率な行動はとれなかった。

和代もして言えば二条との不和、滝田の件位で格別他から精神的、肉体的に迫害を受ける事もなかったから、彼女自身それ程切迫もないのだが、やはり滝田の件、例のグループの事で心理的に退却する所まで達し、度胸がすわったとでもいうのか、こうクラス中で騒ぎ出すと表情まで硬直して行く気分だった。

「どうして退校になるんだ？ 遊んでスピード違反、そんなの良くある事じゃないか。」仲間というものは身をもって信頼したら容易に離れるものではない。ふざけた口調だが決して遊び半分でない誠意があった。

「誰だい！ 余計な事言ったの。」血の気の多い彼等はなんらかの団結の後には万人の味方を得た様でどんな事にも猛進できるものだ。「おい校長のところに行こうぜ！」と立ちあがったのは田代であった。皆自分の事の様に騒いでいる。確かに大津の事もあろうが、こういう事件に熱中する事が高校生の特権であるかの様で、又そうする事で優越感を感じていた者も少なくなかった。「静かにしろよ。みんな口だけでなんだかんだって言っているけど、もっと考

っていた。

「おい足代君先生を脅迫するの。」と深見が言った。先方から言わせて自分の立場を優利にさせようという計画は失敗した。

「本当です。スピード違反に直接関係ありませんが、無免許運転で無期停学になるんですか。私達には家の事とか友達の家で、無意識に、いや、悪いという事が頭にあっても止める事が起きなくなる時があるんです。校風を守るだけで退学ですか、勿論他の理由があるかもしれませんが、私も同罪です。」

「足代君良く聞きなさい。僕だって大津はかわいい、しかし、高校生で無免許運転、それにあまり態度の良くない高校生も同伴、その上深夜葉山での事を目撃した者がいるんだ。どうとでも良くはとれないだろう。僕だってどうしようもない。校長は前例もないから二週間の停学にしようといったんだが、PTAの方が騒ぎだしてこんな処分に落ち着いたんだ。事件を起こした事が無意識だったと言うなら弁解だな。」と和代に行った。

「でも、私も一緒に葉山に行っただけです。」

「目撃した者は大津と、二人の学生しか見ていないと言ってるし、大津もそれを認めたんだ。」

「おい深見君、君からも良く話してくれたまえ。」と言って関は店を出た自分を説得するには納得のいくまで話さないから和代は関担任が理不尽を押し通している様に思えたが、彼の中にあるまっすぐなものが膚を通して感じられ、逆に自分は自然と抵抗を失って彼の筋の通ったそれを肯定した結果となった。

そのころ二条は大津の家にいた。

えた方がいいんじゃないか？ 学校の出方を見ようよ。校長だって退校させる様子じゃない……。」すると藤間が、「僕もそう思う。気ばかりあせったってどうにもならないさ。」と呼びかけた。

その日の放課後和代は関担任の所に行った。あんなに嫌っていた教員室も。大津の事しか頭になかったのか、自分の意見、欲望、批判を率直に言う自信があった。

「先生お話ししたい事があります。」

「なんだい、休んでいた所が分からないのか。」彼の冷静窮まる態度に抵抗を感じたが、

「大津君の事です。彼の処分になるまでを説明して下さい。」と意を決して口走った。彼もこういう事態を予想していたが、この露骨で率直な彼女に疑問を起さず納得させるにはどう答えたら良いか瞬間迷いが生じた。

「学校側には一斉口を出せないんだよ。」と注ぎきみに念を押したが、和代はこの担任を睨み返した。

「どうしたんですか関先生、足代君そんなにいじめるもんじゃないぞ。」笑ったのは生物の深見教諭であった。和代は遊び半分で言っていると思われたのがくやしうてしかたのない様子だった。そして一人はかりの人間にかまう程暇がないと言いたげな非情さに苛立った。

関担任は和代と深見をつれて近くの喫茶店に入った。

「たまには生徒と来るのも悪くはあるまい。」と言った。「先生話をそらさないで下さい。私もあの時一緒にいたとしたらどうしますか。」和代は二人の大人を前にして議論しても勝ち目のない事は知

「二条、僕金学連に入っていたんだ。兄貴の友達で矢島恭二と

いうのが党主なんだけど。」

「そうか、大津、君には学校があるんだぜ。」

「勿論やめたくはないさ、だけど多分退学だろう、そんな事はどうだっていいのさ。」弱点を突かれないうちに多分に自分から先手を打ってくる気配が感じられた。

「僕達次のデモで、原子力船寄港反対だけど、事件を起すかもしれないんだ。お前と合うのも今日が最後かもしれないな。今までの運動の総決算っていつちやおかしいけど、こんどのが終わると親父とフランスへ行くんだ。彼は会社の主張で二年間、僕は絵の勉強したいんだ。離婚したのさ。いい気なもんだ二人共。母はデザイナー親父は会社、ここ五年間位すれちがいの生活さ、おかげで金には不自由しなかったけど、僕だって人の子だもの人並みの生活をしたかったな。」

「それにしては今まで自分を偽っていたな。」

「いくら信じていても言わなくてもいい事だってあるよ。」

「下手な誤魔化しはよせよ。」と二条が呟鳴った。

「和ちゃんに悪い事をした。彼女真剣に真澄美の事考えていたからな。僕は彼女の気晴らしのつもりだったんだけど。」

「お前の言った事伝えるよ。ところで僕もデモに行くよ。」と二条が言った。二条は最後の出合いを約束して別れた。

翌日、三時間目の倫理社会の時間であった。いつもの様に教頭が入って来ると、「先生質問！」と大声で田代が立ち上がった。「ほお田代から質問をうけるのはじめてだな。」と言うや否や「先生、

封建社会制は今でも続いているのですか。」と尋ねた。教頭はよく得意なものを聞いてくれたといわんばかりに、メガネの端をもって北欧の中世や江戸時代の封建制度について話した。

「先生、封建制度について質問しているではありません。今も続いているかお聞きしているのです。」この質問に不がちな様子だが、「まあ、未開発国を除けば現在ではありませんね。」と言った。

「あまりないという事はあるという可能性も含まれていますね……この学校の様に。」田代の奥歯を噛んだ言い方と、彼の平素の言動が氣にくわなく思っていた事も伏線状に作用したのであろう。

「田代、今の続きを話さない。」と言った。
彼等の等えは天津を救おうという、これだけの単純なものかもしれないが、教師に対する暴言はそれだけでは済まず、濁った意情な気分を伴った。

「だから、生徒の意見も聞かず一方的処分を下す学校があるかという事です。」と田島が言った。「我々の雄士が或る教諭に質問をしていましたが相手にしてもらえませんでした。僕は一人で行く勇氣がないからこうして大ぜいでお聞きしているんです。」皮肉めいた言い方である。喫茶店での話を誰かが聞いていたのであろう。

「田代と田島は後で教員室に来なさい。」平穩無事な日々を過していた彼も、遂に怒って授業を放棄した。そして、田代達の計画的同事件であろう四時限にも「B」組で起った。前例から、学校に事件発生の際は臨時自治会が開催され、生徒で裁いてから職員会議にかけられていたのだ。ただ校外で発生した事件に対して聞かせる事は

す―足代和代の事は何も記されていなかった。

二時半、田代達は緊急集会を開いた。

「この際我々は一致団結によって処分撤回を要求しよう。」

「絶対の無抵抗状態にある者に下された処分にしてはひどすぎる。」二十世紀の封建制に対する反動で教室中蜂の巣を突いた様な波瀾万丈となった。

「みなさんまってください。」この反論者に全員振りむいた。二条であった。

「僕は彼からの伝言をうけついでいるんだ。『僕が退校になったとしても騒がないでくれ。僕のやった事は道徳的にも悪いし、あの時自分に襲いかかって来る事状に勝てなくて、感情に任せてしまったんだ。これで自分の進むべき道が決った。それから関先生には心配ばかりかけてすみませんでした。』と言っていた。停学になってから彼と会ったし、彼も僕を尋ねて来た。僕も最初は処分撤回を望んだが彼の話を聞いてるとそうばかり言えなくなつたんだ。彼の家庭内の事だから言えないけど、みんなにも迷惑をかけたってあやまっていたよ事状も話さないで悪いが、もし本当に彼の事を思ってくれるのなら、このままにしておいてくれ。」この発言により空氣のぬけた風船の様に誰もがぐったりしている。

「あいつがそう言うんなら僕達何も言えないけど、こんな事で学校止めるなんて弱い馬鹿だよ。」田代は両手を振らせながら叫んだ。

和代は天津を思う心が、田代より自分より誰よりも深いのは二条である事を知った。和代は二条に許しを求めた。

容易ではなかった。彼等も自治会を開かせればどうにかなるからと思つたのだろう。その日の事件はすぐさま校内に知れわたった。田代と田島は「授業態度が悪い。」と注意されただけだった。

四時限終了と同時に職員会議が開かれ、田代がリーダーとなって起こしたこの事件も一応彼等の意図した通りになった。

教員室では三、四時限の事件の経過を如実に報告され、当然三時限目に田代の言った雄士、足代和代の名前もあげられた。最近校内が乱れつつあり三年F組の授業態度が甚だ悪いとつけられ、田代の名前もあがった。「自治会を開かせましょう。」いや、今日の連続同事件は明らかに天津の事で開かせようとの学校側への要求で、もし開かせたらどんな事をしてでも便利な方へ進める事が考えられるので開かせる事はできないと思います。『関教諭も責任上の覚悟はできていたものの、この機械的論議に不満を感じた。』

三時間半の結論として、学校の様な団体生活には一時的便法、温情主義は禁物でこの際一人位の犠牲者を出してもやむをえない。ただ足代和代は証拠不十分のため同処分に出きないとふれなかった。

窓の下には田島と加賀がいる。

「おいこの分だと自治会はおるか天津は退学だぜ。」

翌日、九時二〇分、全校生徒が講堂へ招集された。校長の話。最近学園内で不可思議な事件が発生しているが、それにかかわり合にならぬ様に……そんな意味の話であった。事件発生とばかり喜んでいた野次馬連中をよそに、その日の午後二時天津はあっさり退校処分決定した。――不平、不満のある者は直接校長の所に来るべし、以後こういう事件のみ自治会の判定を通さず、すべて職員会のみ通

「天津、君に悪い事をしたとあやまっていた。あのグループに入れた事を、彼の両親離婚したんだ。天津は親父というよ。苦しかったらうな、ここ二三年家庭なんってなかったもの。こうなった方がいいんだよ。」和代は天津の母と会った時を思い出し、ふと体裁だけの世間いや味がさした。そして、今まで会わないで来た事を後悔した。

「和代さん、谷さんからお電話があったわよ、二、三日中にみえるそうですよ。」

「そお……。」氣の抜けた返事である。

「貴方このごろ元氣がないけど……。」と母が言った。母には葉山の事は話せなかった。まして天津の退校の事など口にも出せない葉山の事を聞かないのを見ると学校からは何の連絡もなかったのだらうと思つた。母の心配そうな顔が無理に笑んでくれて、それがわえって和代を苦しめた。入浴後、精神的に苦痛が続いた為かけだるい重圧感を覚えた。

この数カ月の間で、五年も十年も自分の生活圧縮した烈しい意味のある緊密な体験をした様な気分であった。天津の事が氣になつた。そしてあのグループから完全に抜け出した様な氣がした。この夏からの興奮は、まだ生熱い燃焼状態にあつて、筋の通る心の整理は何一つついていないが、自分なりに上手に心を治めていいたら、飛躍的な成長を遂げるかの様な氣持ちだった。

彼の退学になった今、何故か安堵の氣持ちがあつた。もはや天津の事で事件は起こらなかった。

「僕この間、全学連のデモを見に行つたんだ。あれ日比谷の野外

音楽堂で集会やっただろう。議事堂付近は大混乱だったろうな。」

「しかし、前から疑問だったんだけど、大津が政治運動などやってなんになるんだ。彼の心を治す為ならよくないぜ。文部省の教育方針が悪いからって騒いだってしかたがないさ。左翼から圧力かけて……。」

「僕はそうは思わないな。」

「だって国民の代表が決めるんだぞ。逆えないじゃないか。」

「資本主義の落担を見ていて君の様な言い方をするのは臆病で卑怯さ、自滅するだけだよ。大津の気持ちが変わるよ。」

田代と二条が口論している。二条だけでなく、大津の事件以来、急速に政治に関する興味を増した様にみえた。

その日の夕方谷が尋ねて来た。

「この間大津に会ったけど、とても元気だったよ。」

「そうですか。よかったわ。男の人って割り切る事が出来るからうらやましいわ。」谷は和代の暗い影を見のがさなかった。

「大津には大津の、君には君の生き方があるんだ。君は自分を粗末にしすぎるよ。今までの事は忘れるんだね。そう努力するのさ。それができなかつたら、大津や二条達の悩みとくらべてわがまますぎるよ。」母が茶と菓子をもって来た。谷の強い言葉は、これまでの彼より奇に教祖的に聞え、それが少しも不自然ではなかった。

裏門から出て散歩に行った。古い高塀に緑のつたが渡って、ひとり紅葉した木々の中でがんばっていた。石段の上には昨夜の風で散った松の葉が美しく敷かれてあった。そして互いにこの夏の事は忘れる様誓った。谷が帰り、和代は部屋にもどった。

顔の上から流れ落ちワイシャツにしみこんだ。

「ある警官隊につっこむんだ。」

「それ！」

三本の帯は腕によって織られ、彼等は、それが宿命的に持って生まれた不朽の意志である様に目的地に向って駆け出して行った。

「田代、かっこいいだろう。」

おれこれ位懸命になった事ないよ。」とどこどこ聞きとれない。

「ワッショイノ、ワッショイノ」警官がこん棒を振り上げた。

「つっこめ！」

警官が二人がかりで足をひっぱり、手を取り、この帯を断ち切ろうとした。議事堂前に陣どったトラックの上には先導者らしきものが拡声器を使い何か言っている。調子に乗った若者達の行動はそれが最高潮になるまで続けられた。それが終わると彼等はひとまず二条の家に行った。

「ア……愉快だ！ 実に愉快だ。」

「おれもそう思う。」

「お前の顔、泥だらけだぜ。」

「おどろいたな半日近くも歩きどうしだぜ、しかし、思想を行動に移すのはむずかしいと思っただよ。たいへんな精神的エネルギー、勿論肉体的にも消耗するもの。」彼等は顔を洗いみなりを整えた。

空腹と寒さを覚えた彼等は食事を済すと、二条の部屋に行き横になった。さすがに疲れたのか、しばらくは誰も口をきかなかった。

「ところで大津、お前いつ達つんだ。」気分が回腹が感じられる口調がひびいた。

一枚ばりのガラスを通し。レースの間隙から弱々しい晩秋の夕陽が入って来た。予習をしようと机に向っていたが何故興奮しているのか分からなかった。ヘッセの本を読んでいた。

「身も心も潤い、喜び振え、暮る暮情に苦の陶醉を求める……」詩でも口ずさむ様に独り言を言った。多分に本の影響もあったが、久しぶりに感じた甘美であった。太陽が燃え尽きて崩れ落ちる事もないし、当分クーデターも起りそうもない。こんな世の中だもの私の熱情だって高まって自然だわ……などと考えていた。焦点の決まらないぼんやりとした感情に、何かが終始不変の愛をおしえてくれた様だった。多分、今までも無意識に感じていただろう。しかし、何に對していだいた愛情が自分自身分からなかった。角田真澄美、山中恵子という同性に對しての友人愛か、谷に對してか、それとも大津か？ 慕情という言葉が口から出たが、これが本心なら利害が成立しているからそれは異性に對してではないかと思った。

十一月十一日。

国会議事堂付近には「原子力船寄港反対」のプラカードを持った群衆が蛇行している。デモは開始してから二時間になろうとしていた。彼等は四人で先頭集団に入っていた。

「おい大津！ 手を離すなよ。」

「わかった。田代はどうした。」

向こうで学生と警官隊が衝突している。ど、ど、ど砂塵が舞いあがり、喚気と叫声が烈しくぶつかり合った。

「やけに『さつ』がいるな。」谷の顔にも、二条も薄黒いほこりがついている。汗とはこりと人体から排出された油がからみ合っ

「今日だよ。」大津は屋外をむいて言った。

「今日！」

「大津どこに行くんだよ。」無論、田代は初耳だった。

「フランスさ。」二条が田代に大津の出発を伝えた。「何時？」田代が時計を見た。すでに八時四〇分をまわっていた。

「十二時四〇分のエール、フランス機で……。」先程までの自分達の熱情を行動に表わした満足気な顔も、仲間との別れの為か口をつぐんだ。

その頃和代は、今週の日曜大津と会う事を考えながら机に向っていた。十時半。

「和代さんお電話よ。」と母に呼ばれた。

「もしもし足代和代さん？ そうですね。私は大津和代の……母です。以前一度お会いしましたね。」大津の母からだった。

「和美、今晚父親とパリに渡ります。十二時四〇分発の……あの子は私の事をうらんでいますわ。こんな事はどうでも……どうか羽田に行つてやつて下さい。」彼女の声はかすれ気味だった。どんな事情があつたにせよ何か真に迫る物が感じられた。それとほとんど同時にひょうひょうとした空気が体の中を吹き荒すのを感じ、大津のフランス行きを知らなかった彼女は自分の耳を疑った。

「もしもし、行つて下さるでしょうね。」言い終わるか終わらないうちに、ガチンノと受話器の切れる音がした。

彼女達の様な人間は話している間は才気煥発するが、いざとなつた場合の人間的な強さは、半封建的教育を享けている旧型の人には及ばない。ただおろおろするだけであつた。

「お母様どうでしょう？ 本当かしらフランスへ行くんですって……どうして今まで知らせてくれなかったのかしら。」

「行っておあげなさい。お父様にお顔いしてあげますから。」

和代は急いで外出の支度をした。たった今、彼等の事を考えていたのが和美の母の一言で消え、羽田へ行く事だけ考えた。そのころ、田代、二条、谷、大津を乗せた車は銀座から羽田に続く高速道路上にあった。

「何も事件らしい事も起こさなかったな。これでいいのさ。おい田代クラスの連中に手紙を出せと言っておけ。」

「相変わらずお前の暴言にはまいるな。」普段なら遠慮会釈のない彼だが、この時はかりはどう思ったのか控え目に言った。額にはったバンソウコウが愛嬌を添えた。

「足代さんに会わないで行くのか。」と谷が訊ねた。大津はそれには答えず、「おい谷スピード違反でつかまるのはごめんだぜ。」と言った。そして溜息をついた。

羽田に着いた。

「しかし二年って言ったら長いな。」

「別に二年で帰るか分らないさ。むこうが気に入ったらずうっと住むよ。」彼等は今日のデモの事を話し合い、田代はこれからもデモを続けると言った。

十二時二〇分和代が着いた。

和代は葉山以来の再会で、一瞬ためらったが、ロビーで彼の姿を見ると、引力が働くかの様に進んでいった。

「和美さん！」小さな声で言ったので聞えなかったのか二条が振

りむいた。大津はこの声に始めて和代の姿を認めた。

「急いで来たのよ。よかったわ、間にあって。もう会えないと思った。」

「君どうしてここへ？」と田代が訊ねた。

「和美さんのお母さんが電話でおしえてくれたの。貴方の事気にしていたわ。お手紙出してあげなさい。」

「あの人が？ 和ちゃんごめんね。」その言葉もときれがちで、次第に落ち着きを欠いていくのが意識できた。

——十二時四〇分発……お急ぎ下さい——屋内放送が流れた。

「これ私の詩集、あまり突然なので何もできないけど。」声がつまってそれ以上言えなかった。大津は一度振り返っただけだった。かえり見ない彼の姿に寂然たる様と、前途の不安と希望と惜別の情に駆られ複雑にかうみ合った彼等の感情を高ぶらせた。仁王のごとく直立している。一条の光線が天津の去った彼を照らし、濁った爆音が耳を突いた。まるで、せみのぬけがらの様に空虚で、今までの緊張が一度に破れ、寂寥だけが残った。積極的な男の欲望表現の裏の予韻の残す旅立ちであった。

あれから一度谷が会いたいと電話をくれたが、和代はなんとなくが進まなかったので会わなかった。

十一月も末

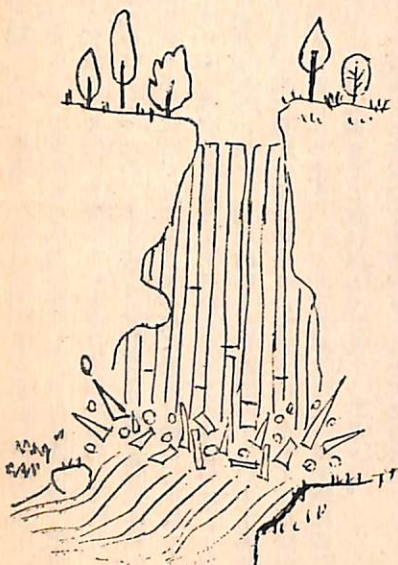
校庭の木々もすっかり葉が落ちた。梢の間隙から澄んだ青空が見え、弱々しい光が落ち、そして、人々は始めて安堵した。人々は芸術に専念し、探求し、澄んだ自然のごとく、生きた人間に帰り、成人への分岐点の一端を吟味した。それは無意識のうちに精神の肉付

けになり、彼等は大衆をおそれ、その阻害を教え、それと逆に感覚的陶醉として彼等の熱情が得たのに、その苦しさや甘美と孤独は後長く、潜在感として存在するのだ。

試験が終わってから「D」にも行っていない、時雨けむる水面にボートを浮かした。音もなく川面に垂れる雨足が和代の手のひらにも落ちた。

未知なものへの挑戦、その力いっぱい戦った後のよぶさやかな哀愁が和代の全身をおった。

——完——



光りと闇

二年 辰 巳 知 勝

あの完璧の美を誇って居た金閣寺を放火し炎上させた青年の心理にも、或るいは、新雪に足跡をつけるために飛び歩く少年の心理にも似ていた。ひっそりと青まりかえった公孫樹並木を西条はもの思いにふけりながら、独り歩き続けていた。

昨日の昼頃から降り続いた雨もやみ、すでに空には繊細な三日月が光り輝いて居る。薄く白い雲は月を横切り西から東へ早足で流れて行く。三日月の光りを受けた雲は青蒼く変色する。その三日月の光りは下界にも差して居た。公孫樹並木に差す冷たい光りは幻の様な明るさを帯び、街頭の明りと共に公孫樹の落葉を黄金色に化す。それが狭い歩道の両端にレイの様に連なっている。

今日は文化祭の初日であった。西条達美術部員にとりその日は単に作品を公開するだけではなく、彼らの先輩でありまた極最近美術界の脚光を浴びて居るE氏が来て批評をして呉れる貴重な日々であった。それで少しでも良い批評を受けるために、またE氏の眼を引き留める様にと彼らは展示する作品に全力を傾けるのだった。西条は夏休みの中頃から二学期の初めまでを費し、全神経、全知識、全脳力を集中して描いたのであった。それは炊熱した都会の空気がから逃れ伊豆半島の或る海岸に泳ぎに来た時の事だった。彼は泳ぎ疲れて赤銅色に焼けた身体を砂浜に横たえ、眼を閉じて文化祭に展示すべ

き絵画の事を考えていた。澄き通る様な青い空の中央で、ギラギラと我武者羅に光り輝く太陽——冬の静的陰鬱な太陽とは違い無敵の野獣の様な太陽の直射日光を受けていると隙の裏側に暗赤色になりインスピレーションが彼の脳髓に浮び上がった。強烈で、悲惨で、美麗な情景を抽象的に表現したいと彼は以前から思っていた。それが突然浮び上がったのである。果々と群がる餓死者達、更に飢餓の苦痛から逃れる為に骨だけの身体を林檎に近付け様と力を尽す人達、そして、最上部に肉付きのいい林檎の果実を二つ三つ描くのである。全体を紅色に統一し抽象的にまた神秘的にする。——構想を練りながら、頭に描いた情景の余りの無残さに、そして、以前から計画し適えられなかったものが、非常な早さで次々に的確に表われて来た事に、彼は興奮し心臓は激しく鼓動するのだった。

帰りの電車の中でも彼は美術の事だけを考えて居た。家に着くと直ちに彼はキャンパスの前に向かった。が、最初の幾日間は何も描けず、近代や現代の西洋美術の本を見たり、空を見上げながら、海辺での記憶を辿ったりしていた。

その内、腕が、身体が、脳が、激しく活動し始めた。彼の胸の中で納まって居たその力は、障害物を破壊し、砕き、消滅させ留る所を知らなかった。

残暑に喘ぎながら、彼は、芸術に対する情熱を、美術に対する野心を、青春の叫びを、キャンパスにたたきつけた。熱中していると、きは、脳みそも、時間も、忘れた。——そして、一段落して筆を休めると彼は快い疲労を感じるのだった。

彼は正に浮城になった。勉強は落ち着いて手につかなかった。時

には、犬の遠吠えを幽に聞きながら真夜中の静寂の中で独り描き続けて居た事もあった。それだけにこの絵に対する自信はかなり強烈なものであった。以前の自らの絵とは比べものにならない程、差があると彼は思っていた。更に二学期が始まりほかの美術部員の絵を見た時にも、自分より秀でているものはないと確信して居た。文化祭が待ち遠しかった。——E氏が自分の絵の前に立ち止まり、暫の間眺めている。そしてこの絵を画壇に紹介したいと言う、たちまち新進画家として認められ英雄になる——若い人特有の空想力に依り彼の将来は薔薇色に描かれて行った。そして、今の自分にはそれを実現させるだけの力を持って居る、と彼は思い、もしあの「薔薇色の将来」が実現されたとしても彼にとってそれは少しも不思議な事ではなかった。

西条の友、住吉は雪舟の水墨画を思わせる様な明確清涼な風景画だった。後方には険しい山脈を連ね、前方には杉林と農家と岩石とを配した割りに平凡な構図だった。

住吉の絵を見ながら、西条は言った。

「古典的だね。」

「別に意識して描いた訳ではないけど、皆がそう言うんだ。……君のもしいいじゃないか」

「全力を尽したからね。自分でも或る程度の自信は有るんだ。」

「強烈な感じがするよ。僕にはとうてい描けないなあ」

「君も抽象画を描けばよかったのに。今、世界的に流行して居る位の事は君も知っているだろう」

西条が抽象画を描きたかったのは唯世界的に流行しているという

事を知っていたからに過ぎなかった。そういう知識を所有した後でピカソなどの抽象画を見て、知らなかった時以上に感動しあこがれを抱き始めたのだった。だから、もし写実的な美術が世界に流行していると知ったならば、きっと西条は写実的な絵を描くに相違なかった。

西条は「抽象画は世界的に流行している」と言った。しかし、極最近漸く抽象画は衰退の兆しを見せ、あの極端に神経的なまた直線的な絵を描くピュッフェなどの人気も下降線を辿り始めたこと住吉はバリ画壇通である人の著書を読み知って居た。ただし、住吉はその事を言わなかった。彼は秘密主義で自らが思っている事もほとんど口には出さなかった。

——そういう彼の性格を知って居る西条は、口には出さないがきつと住吉は自分の絵に対し自信を持っている、唯謙遜しているに過ぎないのだ、と思っ居た。それでも西条は住吉の描いた絵よりも自分の方が勝れて居ると思ひ疑わなかった。

西条は住吉の描いた絵を見てちょっと不快になった事がある。それは今の住吉の絵は以前西条が描いた絵に良く似ている事であった。構造といい、筆使いといい、何んとなく似て居る。しかし、それ程気にもならなかった。もし住吉が模倣したとしても、とに角西条は住吉の絵に対し強い優越感を持って居た。

美術部員に限った事ではないが、クラブの中で彼らは秘に意識し合い、競争し合い、そして、順調に力を伸して行ったのだった。先生が一人だけ特に著たりすると、ほかの人々は秘に嫉妬を感じるのであった。またそれが競争心を沸き立てる原因でもあった。特に美術

部員を励ました事は今年の初春に起きた事件である。それは、東京の或る百貨店で青年の美術展示会がありそれに名古屋在住の一高校生が応募しその作品が一流の画家に認められた事であった。その高校生はたちまち、新しい美術界の旗手としてジャーナリズムの注目を集めていた。その事に依り美術部員は大きな可能性を見出したのだった。西条の「薔薇色の将来」もこの事実があるからこそ描かれ、そして、可能性を持つのであった。

文化祭の初めの日、雨の日曜日だった。

極最近建てられた近代的な建築の講堂では各級の代表者達に依って劇が演じられている。水酸化カリウムに希硫酸を混ぜたりして色の変化を主に見せている化学部、美しく草花樹を生けている生花同好会、泉鏡花、谷崎潤一郎、三島由起央などの唯美派の人と作品を美辞麗句を羅列した文章で研究発表して居る文芸部。——しかし、期待に反し無情な雨のために、どの教室も観覧者は少ない。

美術部は教室の中失にベニヤで壁を作り、その両側と部屋の四面の壁とに作品を展示して居る。油絵が多いが中には水彩画も幾つか見える。残念ながら、これも観覧者は少ない。

二時頃、雨の中をE氏は訪れて来た。彼は直ぐに二階の美術室に向かった。

E氏が来た事を知り部屋に居る五人程の美術部員は皆緊張した。そして、誰もが自らの絵に視線を移し、服装を正した。

清楚な背広を身に付けてE氏は美術の先生と一緒に部屋に入ってきた。先生と何か話しながら、楽しそうに見て回るその姿にも、若い先生と比べどことなく威圧感があった。

にデッサンに励む様に」それから暫くして住吉の絵の前に来た。

「住吉君の絵はかなりよくできているね」と言ってから更に言葉が続けた。

「旧きを尋ねて新しきを知るといふ精神は高校生としては割りと着実だね。この絵も山水画的なところがあって地味だが、新しい感覚で描かれて居るから絵全体が若々しい。」

「ただこの林は良くないね、もう少し丁寧にして白色を多く使った方がよかった。そしてたより空の陰鬱さが引き立って来る。……文化祭が終わったらその絵を持って私の家に来なさい」

西条は無意識に降り向き後ろに居る住吉に目を移した。住吉の陰気な顔に微笑が浮んで居るのを西条は見取った。

E氏の言葉が西条に与えた刺激、驚嘆、悲痛、憂鬱。西条だけにはない。そこに居た二年生三年生の総てにそれは襲って来た。以前に、個人的な名前を出し賞賛する事はあっても、家に来る様にと進めた事は一度もなかったから……。

窓の外には柿の木が見える。円錐体の果実は紅色に熟し重たそうに枝も鈍く曲げて居る。その豊かな果実も今日の冷やかな雨のため二つ三つ落ちて居た。

ひさしぶりに降った雨は乾いた地表や屋根の赤い甍を潤しコンクリートの運動場に幾つも水留りを作った。糸の様に繊細な雨であるが休みなく時にはかなり強烈に降り続いて居た。

帰り道で住吉と西条は雨に打たれて居た。二人共傘を家から持ってきて居ない。駆け出すと水溜りが跳ね上がるので彼らは静かに歩いて居た。

西条の描いた絵を実際には幽な時間であったが、E氏はほかの人々の作品よりも長く眺めて居た。それに気付いた西条は秘に喜びを感じた。

終り近くになって住吉の絵があった。E氏は暫くの間その絵から眼を離さなかった。かなり注意して見て居る。その時間は、住吉にも西条にも、またほかの人にも、一番長いと感じられた。西条は心の底で秘に失望した。

幾日か前E氏は当校の美術部に額を贈った。そのお礼として美しく飾りつけた鏡を贈呈する事になって居た。代表に西条が選ばれて居た。以前から敬愛して居たE氏に贈呈できるのかと思うと、西条は名譽心に包まれた。

E氏が一通り見終わる、先生と一緒に隣りの教員室に入って行った。西条は住吉達と共にその後について入って行き、中で鏡を贈呈した。

「ここに居る人達の作品を批評して呉ますか」と美術の先生は言った。E氏はそれを承諾した。

再び美術室に行き幾人かの生徒にとり囲まれてE氏は作品の批評をし始めた。

西条の作品にはこういう事を言った。

「いかにも青年の作品らしく幻想的でいいのだが、未だ残念ながら抽象画を描くには基礎的な勉強が欠けて居る様だ。」

是は君達高校生総てに言える事だが、今は成可く抽象画は描かない方がいい。余りにも飛躍し過ぎるからだ。正直言って君達は基礎的な勉強を疎かにして居る傾向が見える。だから、是からは今以上

二人の心理は全く違っていた。住吉の胸の中は快適さと喜びとに満ち溢れているのに対し、西条は悲痛と憂鬱とに襲われていた。

さらに重苦しい敗北感にも捉われて居るのだった。しかし、自分が敗北感を抱いて居ると住吉に知られたくないために、西条は胸の中を隠し、割りりと陽気に装いこう言った。

「今日はいいい日だったじゃないか」

「悪くはないね」

「羨しいよ」

「それ程の事でもないさ」

隠そうと努めて居るにもかかわらず西条の言葉には時々敗北的な響きを持って伝わる事がある。しかし、住吉には勝利者のな所は少しもなかった。ただし、唯謙遜して居るだけで、心の内は勝利者の喜びを感じて居るのだった。

西条は嫌な事——住吉一人が認められた事——を忘れ様と努力した。そのため彼は歩きながら、陽気な表情で美術とは全く関係のない話をし、そのために一時的ではあるが忘れる事ができた。

二人は駅で別れ、西条は独りになると美術室での事を思い出し暗鬱に成った。出来るなら今日という日を無くしたかった。あれ程自らの絵に対し自信を持って居た、またあれ程住吉の絵よりも優越感を抱いて居た西条が今日一日で自信を失い、優越感を失ったのだった。

西条の胸に暗鬱が注し始めたのもこの時である。——もしかすると住吉は直ちに世間の注目を集めるかも知れない。あの名古屋の高校生の様に。ジャーナリズムでこの事を取り上げ、朝礼でも住吉の

絵の事が紹介された。まちは彼は学校の英雄になる。しかし、彼をそういう風にはしたくない。今まで通り、自分達と何んの差別もしてもらいたくない。(この気持は彼の利己主義を表わして居た。以前「飢餓と林檎」の絵を描いて居た時にはほかの人々と自分との間に格段の差別を生じさせたかった。)

同じ学校の、同じ学年の、同じクラブの、しかも友達である住吉が世に認められるかも知れないのが、なぜ自分には嫌な気持ちを起こさせるのだろうか。なぜ心から賛美し、祝福する事ができないのだろうか。自分は異常心理の持ち主なのだろうか。

と西条は思ったが、彼は異常心理の持ち主ではなかった。誰もがこの様な時嫉妬を感じるのであった。唯それを表面に出さずに理性や倫理で被い隠してしまふ。賛美や祝福の言葉を表現するだけの事だった。なぜそれ程激しい嫉妬を感じるのか。もし、住吉が違う学校の生徒であつたならばこれ程激しい嫉妬は感じなかつたに相違ない。クラブでも同じことが言える。個人個人の集まりであるクラブは時々嫉妬に似たものを感じる事があつた。——確かに、高校生活に於いてクラブ活動の占める比重はかなり貴いものがある。若い人達にとり実に貴重な体験である。しかし、団体競技に於いて一人(特に後輩や同年の人)が秀でて居る時に、秘に嫉妬心、またはそれに似たものを抱く人が生じるのだつた。そして、時にはこれがクラブ内での争いや分裂の根本原因になる事もあつた。

西条は未だ住吉を親友だとは思つて居なかつた。それだけにもし住吉が世の中に認められたりすると、対等の交際ができなくなり、二人の間に危険なひびが生じる様に思えた。またほかの誰よりも彼

石も緑柱石も、紅玉も、蛋白石も、今の彼には必要なかつた。必要有るのは唯住吉の絵だけであつた。

夕食後彼は住吉の絵を盗みに行こうと決心した。——彼は熟慮不断であつた。自分自身もその事に気づき自らを諫めこれからは結論を直ちに実行に移そうと決心した矢先の事だけに、自分の隠れて居た実行力を試みるいい機会だと思つたからだつた。

また住吉に反感を抱き始めたからでもあつた。それは「真似」の事である。以前はさ程気にも掛けなかつたが、今夜の彼には重大事だつた。自分の技法を使用しそれでE氏に賛美された事に對し彼は面白くなかつたし、また住吉に腹立しさを感ぜた。

彼は計画を練つた。母に何んと言つて家を出るか。どの道を通つて学校に行くか。どこから校舎の中に入るか。綿密により綿密に計画を考慮し整理した。

計画が整うと彼は棚の上に置かれて居る箱の中から懐中電氣を取り出し居間に行き母に「友達の家に行つて来る。一時間位いはかかると思う」と言つて外に出た。

電車に乗つた。高架線なので遠くの街の明りが見えた。東京タワーの幽な光り、夜空を色とりどりに変色させる百貨店のネオン、一等星の様に小さく光る街のネオン、そして家々の灯。昨日の雨に依つて空氣は清められ何人の妨げもなく直接伝わる色とりどりの明りは正に都会の象徴であつた。この日常見慣れた光景はいつもと余り改つていないが、自らの心理は激突して居る事を西条は認識した。以前は美術に対する野心が、夢が、自信が有つた。しかし、今夜の自分はそれらを総て失ひ、唯、破壊と劣等感などの陰鬱なものに包

は西条に自らの絵に対する自信を語つて居た。住吉の絵よりも優越して居ると思つていたが、時にはその事をつい言葉に表してしまふ事もあつた。その様にして自分の隠して置くべき本心を知つて居る住吉は、自分に対してほかの人以上に非常な勝利者の喜びを味つて居るに相違ない。

西条は彼にそのような勝利者の喜びを与えなかつた。また自らの敗北感や劣等感や悲痛感などを消滅させるためにも、何かいい解決策を見い出そうとした。色々な事を考慮した後彼は一つの結論を得たそれは住吉の絵を盗む事だつた。もし盗失されたと知つたならば、表情には出さないだろうが内心はかなり狼狽するに違いない。そして、その事に依り自分の悲痛感なども消滅でき、また彼から勝利者の喜びを奮い取る事ができる。しかし、素晴らしい考えであると思つてはみたものの、自分にはそれを実行に移すだけの勇氣が無い事に気づき、落胆した。

家に着いた頃には雨は小降りになつて居た。彼は母に「只今」も言わずに、自分の部屋に入つて行つた。そして、椅子にもたれながら、再び考えた。

どうにかしたいと彼は思つた。もし、自分が魔術師であつたならば、などという突飛な考えも浮んで来た。素晴らしい考えを持つて居ながら、それを実行に移せない自分に対し苛立ちを感じ始めた。丁度蟻地獄に陥つた一匹の蟻に似て居た。跳ければ跳く程彼の頭の中は混乱しその後にとつと「どうにでもしやがれ」と言う自暴自棄になつた。

素適な光沢があり、極めて美しい、貴重な宝石と聞いて居る金剛

まれて居た。

彼らの学校は終点から南へ七分程歩いた場所にある。その途中は繁華街で未だ人通りも多いだろうし、店も開いて居るだろうと思ひ、彼は終点の一駅前で降りた。

もはや午後七時を過ぎて居た。

人間は完璧なものに接するとそれを永遠に保存したいという欲求と、傷つけて見たいという矛盾した欲求とに囚われる。ほとんど喜怒哀楽を示さない住吉を一度狼狽させて見たいと思つた。翌朝学校に来て自分の絵が無い事を知つたら、どんなに驚き慌てるだろうかと思ひ、興味を感じた。そして、この様な興味を抱く自分は、住吉との間に矢張り何んの交情も無かつたと改めて思ひ返されるのだつた。

中秋の三日月と街灯の明りとに依つて写し出される葉の無い木立は不奇味な形をして居る。昔聞いた木立がお化けに変化し少年を驚かすという御伽話しもこの光景を眺めると納得できる。さらに、明りは滑らかな舗装道路の上に影を作つて居る。薄い木立の影の上に濃い西条の影が二重に写り、時には西条の後に現れ時には前に現れる。影は奇快な影になり二つ生じる時もある。

彼は公孫樹並木を横にそれて雑木林の中に入つて行つた。木の枝と葉の間から三日月が見える。

さらに鉄条網の間を潜抜け竹の林に入った。毎日老人が耕して居るこの林の土は柔く歩くと足は減込んだ。竹に触れた手のひらに水滴が冷たい。幽に揺り動かしただけで、葉に付いて居た雨は雫となり地上に落ちた。西条の肌に落ち冷とする。三日月と青竹、

風派人の好きそうなこの取り合せも今の彼には何んの感動も得ない。緊張しているから。

再び鉄条網を抜けると細い道に出た。彼の横を新型のコロナが通り過ぎて行った。向こうから人影が見える。次等に近ずいて来、その影も大きくなって行った。街灯に近い場所で擦違った。彼は本能的に顔を背けた。

暫く行つて自らの態度を不自然だと思った。何に食わぬ顔で歩いて見れば良かったと考えた。

中学二年の時、西条達の級は拳闘が流行した。昼食の後、或るいは放課後に校舎の裏の空地に行き時間を決め、審判を決めて素手で戦った。強い者は自然と仲間のリーダー格になり、増々拳闘を好む様になった。弱い者はそれから手を引きたく思った。しかし、人から臆病者と思われるのが嫌で、怖怖と戦いつけて居る者もいた。丘もその一人だった。丘と戦った上原は強い方であり、二ラウンドの終了間近に丘をノックアウトした。丘は左眼を失った。中学生の暴力事件が世の中の注目を集めて居た時だけに、学校当局もこの事を重大視し、上原の毎日の素行を調べ手におえない非行少年と見做し、直ちに彼を少年院に送り届けてしまった。日常の悪い行為——遅刻が多い、禁止されて居る昼の外食をする、喧嘩をした（それに彼は勉強の成績が余り良くなかったし、悪い上級生とも交際して居た）これらの事を過大視し日常の彼の良い行為はほとんど認めなかった。

西条はこの事を思い出し、自らが今犯そうとして居る行為が恐しくなった。もし学校の中に入りそれが見つかり因われたら、自分は

暗闇の中を記憶に導びかれて生物室に向かった。生物室は西条達の級がいつも掃除する教室である。北側の幾つかの窓の内一つだけ鍵が失墜して居ると彼は記憶して居た。注意深く歩いて居ながら、溝に落ちアキレス腱の少し上を怪我した。彼は傷口に手を触れた。しつとりと中指は血に濡れた。彼は危険を感じ道の左端を歩く事にした。傷が冷たい風に触れられてすきずきと痛んだ。彼は元來臆病者であった。この広い楽園に独り来て、校舎の中に忍び入ろうとして居る彼は、不気味な光りを放つ三日月の夜に盗人と化した彼は、歩いて居る時も色々な邪推をするのだった。この時間の中に人が居て自分の行動をじつと監視して居る様な気がして恐しかった。彼は周囲を見回した。そこには低く雲の立籠めた夜空と巨大な建築物と奇怪な形に枝を伸ばした樹木が有る切りだった。壁に身体を張り付ける様にして再び彼は歩き始めた。いかに静かに歩こうと努めても革靴と砂利は音を立てる。そして、漸く生物室の前まで辿り着き、右の端から順々に窓を軽く引っぱった。一番目二番目は開かない。そして、やっと三番目の窓がギギと響く音をさせて僅かに開く。彼は靴を脱ぎ、蹣跚の樹の陰に隠す。そして、平静にならなければいけないと自らを諫めその後で彼は再び窓枠に手を掛ける。慎重に、慎重に静かに静かに窓を開けて行つた。彼の身体を冷した北風は、カーテンをゆらゆらと揺り動かした。彼はギクツとした。風の仕業と知って居ながら、生物室の中に誰かが居て揺り動した様に思え、驚いた彼は思い切つて飛び上がり教室の中に入る。カーテンに月の光りもささぎられ真暗闇だった。西条は窓を閉める。暫くの間に彼は身を屈め様子を見て居た。時と供に眼も慣れて来龍に影絵

少年院行きは免がれても停学処分位は覚悟しなければいけないと思つた。あの上原の様に日常のささいな悪事が過大視されるからである。

さらにこうも考えた。なぜ自分は絵を盗まなければいけないのか。来年は住吉に敗けないぞという気力を持って進んだ方が正統ではないか。住吉が認められた事を励みとしこれから努力した方がいいのではないか。

彼は病院の前に立ち止まり躊躇して居た。しかし、こう思いなおした。

今さら中止しようとするのか。あれ程十分に考え、そして、今日こそは十分に考慮した事を実行に移そうと決心したのに、実行しなければ後から悔やみ、きつといつもの様に自らの実行力の乏しさを嘆くに相違ない。

彼はその通りだと思った。石段を駆け療り病院の横を通つた。病院と学校との境にある低い壁を思い切り飛び越え、中に入つて行つた、未だ先程の雨のために土は濡れて居た。気落つけないと滑るぞと自らを諫めた。裏庭であるが幾本かのプラタナスの樹立が植えられてある。幽かな月の光りに依つてそれらは浮び上がる。

静かな夜だった。

自動車の警笛が遠くから流れて来る。

時々鋭い金属音が不気味に響いて来る。

……それらが遠く幽かに聞こえて来る為に、却つて自分の今居る位置が人間の世界とは隔離されて居る様に思われ、孤独感と寂寥とが彼の身を包んだ。

の様であるが物の存在を認める事ができる様になった。文化祭の展示品——檻に入ったモルモット、二十日鼠、鶏、蛇、蜥蜴、鵪、免。動物達は人の気配に驚いたのか動き回る。れして、彼は視線を左角に向ける。彼の心は激しく戦慄した。人が居る。しかし、良く見るとそれは人間と同じ位の体軀をした人体解剖の人形だった。見慣れて居るとはいえ緊張して居る彼には激しい戦慄を与えた。彼は静かに生物室を出て行つた。

二階に上る為、階段に近ずいて行つた時、彼は人の足音を聞いた。しかも、それは近ずいて来るではないか。余り活発な足音ではない。彼は驚き咄嗟に階段の下に隠れる。が、その途中平静を取り乱した時に旧い床をびしりと音させた。彼はしまったと思う。万事休す。今は唯ここに隠れて居るしか無い。彼は静かに物置き小屋に入り蹲つた。小さな穴を見付け一点を凝視した。次第に足音は近ずいて来る。先っきの音を聞いたらしき、前よりも用心深く歩いて居るのがよく解る。

幽かに響く不思議な金属音は断続的でありまたその間隔は一定である様に思えた。不思議に思えば思う程その音は奇怪に感じられた。その金属音と近づく足音。

もし囚れたならば正直に総てを語ろうと思つた。そうしたならば自分の行為を少なからず理解して呉れるだろう。

懐中電灯の光線は壁に当たりその一面を明るくした。次に老いた夜警の姿が明瞭に写し出された。夜警はその場に立ち止まりあたりに光線を当てて居る。それに対し、西条は窮屈な物置小屋で身を潜めて居る。唇を開け吐息でさえも注意を払っている。眼は爛々と光

り凝視する。沈黙、寂寥、暗闇、寒気、それらの中で演じられる老
夜警と一高校生との無言劇。緊張と恐怖とに包まれた時間が過ぎて
行く。そして、聞き間違えと思ったらしい夜警は再び巡回を始め、
周囲は暗くなった。

それから幾分後、彼は怖怖と小屋から抜け出て階段を上り始め
た。神経過敏になって居る彼は一段上るたびにみしみし音がするの
を気にした。角に消火器が有ると彼は記憶して居た。注意して見る
と思った通り小さな消火器が置いて有る。廊下の突き当りは暗闇の
中に隠れ見る事ができない。幾時間前には美術に対する野心と自信
と夢が有った。E氏が来た事を知り緊張して美術室まで歩いたこの
廊下。しかし、今は空虚な感で、神経を鋭敏にして忍び歩いて居
る。西条は、そういう自らの姿を思い悲しくなった。

美術室に入り周囲を眺めて居たが、懐中電灯をつける勇氣はな
い。カーテンの間から光が漏れたらと思うと恐しかった。記憶に依
り住吉の絵を見付けたがそれに手を触れる事を躊躇した。その彼の
心理を比喩するならば長距離レースを走りやとゴール間近に來な
がら歩き始めた走者の心理に似て居る。彼は庄迫感に苦しみながら
自問自答した。

——何もしないでこのまま逃げようか。悪い行為をするよりもす
なおに敗北感に包まれて居る方がいいのではないか。

——いや、この絵を盗まないと住吉に優越した態度をとられきつ
と後悔するぞ。

落ち着いて考慮して居る時間は無いと考え、思い切つて絵を壁か
ら外した。その行為の後で、これでいいのだと思ひ自らを納得させ

が、時と供にそれも薄らぎ罪悪感と自己嫌惡とが彼の心にひしひし
と忍び入った。彼は窮屈さを感じ始め重苦しい状態に陥った。感情
と理性とが彼の心の中で争った。

——俺は悪い事をしたんだ。きつとこの事は心の隅に残り気にな
るだろう。

——誰だって悪い事はするさ。それに住吉の優越した態度を空想
するとやりきれない威圧感に襲れるのだ。

——住吉の様に謙虚な人間が果して優越感を表面に出すだろうか
ではないか。そうした時、今の自分の行為を後悔するだろう。

長い間、住吉を見るたびに悩まなければいけないだろう。今なら
ば未だ平気だ。もどろろ。住吉の絵を再び美術室に置こう。

西条の心理は乱れ威圧感に苦しんで居た。どうすればいいか解ら
なかった。彼は佇み、家に帰るか、それとも学校に行くかを考えた
神経を使い果し再び学校に忍び入るかと思うと彼は嫌な気持ちになっ
た。

——俺にはもうそんな勇氣はない。

と、彼は心の中で叫んだ。感情が沸き立った。

公孫樹の枝を折り、未練を断ち切る為には彼はすたすたと住吉の絵
を切り裂いた。そして、闇の中に放り投げた。くるくる回転しながら
絵は曲線を描いて雑木林に落ちた。

彼は再びひっそりと静まり返った公孫樹並木を歩き始めた。その
後姿には孤独な淋しさがあつた。

人々から敬愛され、騒がれて居るE氏の様に英雄になりたいと思

た。しかし、絵を包むものが無い事に気づき、困惑した。あれ程綿
密に計画を立てたにもかかわらず、風呂敷包みを忘れてしまったの
だ。しかたなく彼は学生服を脱ぎそれに包んだ。美術室を出ようと
した時自分の絵が気になりそつちへ近づいて居た。生き生きした
また印象に残るこの絵の一体どこが悪いのか。獨創性に富み幻想的
なこの絵が住吉の模倣性が強い絵よりも悪い作品だといふのか。彼
は未だ自分の絵に對し完全には失望して居なかった。そして、E氏
に對し不信を抱き始めた。しかし、この絵の印象は色褪せ、美術界
を騒がせたりする事は不可能に思え淋しさが西条の身体を走った。

彼は帰途に着き再び廊下を通り生物室に向かった。外に出麗麗の
陰から靴を取り出した。壁に向かって歩いて居ると外の道から女の
話し声が聞こえて來、西条は身を屈めながら壁に沿って歩いて行っ
た。二百メートル程の距離を歩いた後で彼は機会を見付け壁を飛び
越え、舗装道路に出た。眼前は暗黒の平野が広がる。街灯と家々の
明りが点在する。さらにはぼろぼろ線になって明りが続いて居るとこ
ろが有る。それは都心から郊外に伸びる高速道路の夜間作業の明り
だった。不奇味な金属音はここから響いて來るのだった。日晷は街
の騒音に掻消され教室までは伝わらないこのキーンキーンという金
属音も夜の静寂の中ではかなり遠方まで響き渡った。

汚ない川も闇の中に隠れ、さらさらという音だけを聞いて居ると
山の中で見た、澄んだ清らかな小川の流れを思い浮べるのだった。
西条はその川の上流に向かって歩いた。途中にあった橋の欄干は木
造の為に朽ちてしまいがらぐらと揺ぎ夜渡るには危険だった。

始め彼は危険から脱した時に感じるあの快適さに包まれていた

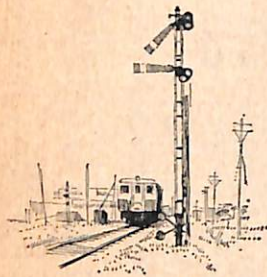
ったのだが——。

夏休み前或る人に恋愛を感じ、それが思う様に行かず、或る日悲
しい噂を聞き、ここで淋しさを消し去るのは英雄になるのはかはな
い、英雄になればあの人の心も掴めると思ったのだが——。

余りの緊張の為に忘れて居た足の傷も落ち着いて來ると再び痛み
始めた。どうなってもかまわないと彼は思った。血は靴下ににじみ
出て居た。中秋の冷たい三日月は、依然幽かな光りを公孫樹並木に
降り注いで居た。西条の心理は空虚であり、何も考える事はできな
かった。唯歩き続け、ふと夜光時計に眼を移した。三本の黄金色の
針は奇怪な光りを帯びて居る。もはや八時に近かった。急がなけれ
ばいけないと彼は思った。

閉静な街路を歩いて居る時、敗北感を消去しようとしてかえって
強い敗北感に囚れて居る事に気付いた。以前は、単に住吉だけに敗
北感を抱いて居たのに対し、今は自分の中にある理性や良心に對し
ても敗北感を抱かなければならなかった。

彼は、余りにも自分という人間が小さく思えた。



昇 日

——二郎について——

二年 大津 佳明

我

日輪となりて

水平線より

昇り出でむ……(二郎の高二の時の日記より)

第一章 小さなできごと——

「こんにちわ、おじさん、万年筆下さい。」オートバイの止まる勢いの良い音がして、買物途中の娘さんがピアノの音のように、軽快く店に入ってきた。山彦の幾つも返ってきそうな、娘さんの声の響きであった。

娘さんは赤いジャンパーを着ていた。そして、維新の志士のような髪をしていた。長く背に垂らした髪の中程を、白いきれでぎゅーっと縛ってあるのだった。

店の主人は、余を掴み取りケースに入れた。

余は万年筆である。主人は、余の入ったケースを紙で包みながら「学校は休みずら？」と聞いた。

「うん、昨日から春休みなんよ。いいねー、休みは。オートバイでね、遠乗りするのよすごく気持ちいい。あの、おじさんちのみっちゃんもバイク乗るんでしょう。」

でも見劣りのしないたすまいである。しかし、このような町並は駅前大通り周辺だけの話であって、駅そのものは、そして又、駅前を離れた地域は、かなりひなびた様相である。

余は幾日も埃のかかるままに任せて置かれていた。だが様々の話声や音——伐木の話や山上(地名)のバアさんがどうしたとか、今年のもろこしは出来が良いとかいう話やバス・自動車の音等々が聞こえるので退屈はしなかった。夜になると、それらの音は全く絶えてしまった。そのかわり遠くで幽かに、セミが鳴いているようなシーンという音がする。そしてシーンという音を抜けて川の音が聞える。初め、何の音かと思った。葉ずれの音かも知れないぞ、などと想像したりしたがじきに分った。川の音だった。ザアザアなどという音ではなく、ザアザアの幾つも幾つも無数に重なり合った川の音であった。昼間はそんなにも感じられぬ音なのに、夜になるとその音ばかりシーンという中を通り抜けてはつきりと聞こえて来た。

そんな目が続いたのであるが、ある日の昼に余は、あの娘さんに買い上げられ、花子さんという人によって東京の宮本二郎なる男の元へ送られることになったのである。

これで西川村ともお別れだ、と余は観念したのだが、二郎の胸のポケットに収まって再び西川村を訪れようとは、この時は夢にも思わなかった。

○二郎の印象

初め、余は二郎が気にいらなかった。その第一の理由は、二郎は眼鏡をかけていない。眼鏡をかけていない人間は、概しておっちょこちよいで、食い意地が張っている。第二に顔が長い。顔の長い人

「あー、乗ることは乗るんだが。でも大丈夫か。この頃は田舎にも事故が多いだから。」

「平気よ、おじさん。腕は確かなんですから。みっちゃんも、あの子おっちょこちよいだけど、意外と慎重だから安心ね。ね、おじさん、今度みっちゃんにバイクの後ろへ乗せて走って貰いなさいよ。風がびゅんびゅん当って涼しい。」

娘さんは、釣り上げられたばかりの魚が、陽光を浴びて跳ね回っている様に喋った。

『世田谷区池尻町三の二十六 宮本二郎様』

余は娘さんの家で小包にされ、右の様な紙を貼られた。そして、朱で『高等学校入学祝』と書き添えられたのである。——この事は万年筆の知覚伝達器官である「テレバシー」で知る事ができた。

(科学的精神を有する方への注。)差出人は宮本花子。余の買主ではない。もう少し年上、二十二、三才の人である。

これで、山形県寒河江群西川村ともお別れかと思うと、不思議と西川村でのこれまでの余の生活が思い出された。

○余と西川村と思い出と

余は産れた工場の名も場所も知らない。物心ついた時には、薄汚い店に置かれていた。それは駅前の店であった。物心ついたばかりでも、万年筆だけあって字は読めた。駅の看板には『西川駅』と書かれてあった。西川駅は東京から汽車で六時間も要する駅だが、駅前をアスファルト道路がよぎり、それに沿って東京では見られぬ真青な空の下に商店が立ち並び、京王沿線の、例えば柴崎駅前と較べ

間は必然的に鼻の下も長くなる。鼻の下の長いのは、Hな証拠だそうで、これは人間としてあまり上等なことでない。まだある、第三に便所の中で歌を歌う。

歌を歌う事自体は陽気で良いのだが、WCの中ではちょっとみっともない。

長く一緒にいるとお互い理解し合えて好きになれる。そのうち余は二郎の良い面も分かり、二郎に好感を持つようになった。

○それから一年八ヶ月後(一九X二年十二月)

二郎はさつきから「実力テスト優秀者氏名」と冒頭に書かれた、二階校舎の壁に貼ってある紙を見上げていた。この日は二学期の期末考査に近かったので、放課後になるとすぐ、たくさんの雲傘が雨粒をリズム良くはじき返しながら、校門を出て行き、普通の日に比べると学校全体が嘘みたいに静かになっている。三教室しかないこの二階校舎には二郎の外は誰もおらず、廊下の窓から見えるグラウンドの、その面を打つ激しい雨音がうるさい。

ちきしょう、と紙を見上げる二郎の胸の中で息が洩れる。が、声にはならない。

二郎はカバンを手に持ったまましばらく紙に書かれた名前と点数を見上げて立っている。眺めているのではなく、ただ目に写しているだけである。(二郎の精神の動きは余のテレバシーで全て感知できるのである——注)

この時、余はふと昨日二郎が友人に送った手紙の初めの文句を思い出した。

「前略、玉徳君、僕の手紙で君の手元に残っているのがあったら

全部読きすて下さい。手紙の文句で君が覚えていたのがあったら、みんな忘れて下さい。どうにもいけない。僕はだめだなあ。おかしくってたまらない。クルクルバーのおかしさだ。実力テストで番数が凄く下がったのが、中国の核実験よりも僕にとって大きな問題でした。ショックでした。入試というものが、まだはつきりとはつかめませんが、僕にとつてこんなにも厚い壁——つまり僕らの生活を強く規制するもの——だとは思いませんでした。」

余は主に手紙用万年筆として二郎に使われて来た。昨日の手紙の文句を思い浮かべてみると、不思議とこれまでの二郎の事が（とりわけ二郎の手紙の事が）余の胸をよぎって行く。

※第一の手紙（一九〇一年四月十日）

前略。三月になったら急に中学から消えてあんな手紙を寄こすのだから、驚いてしまった。卒業式には顔を見せてくれるだろうと期待し、その時には詳しい話を聞いてみようと思っていたのに君は来なかったね。あんな手紙一本だけじゃあ、とても君の行動は理解できない。君はいつでもそうだ。誰にも言わずに——君と一番親しいと自負している僕にも言わずに行動する。永平寺つ、て禪寺だろ。名前だけは聞いたことがある。自分を愛する程、人を愛するように成りたい、なんてキリストみたいだね。君は、いや皮肉じゃない、実感だ。君のお父さんの事は知らないが、永平寺行きはお父さんの希望かい。禪寺なんて修行が厳しいだろうなあ。でも頑張つて下さい、事情は良く分からないけど。

その後の僕について書いておきます。高校入試、敗けちゃったよ。落っこっちゃった。

桜の木が盛んに雨に打たれている。窓の近くを落下する雨つぶは、はつきりと形をなして見えるが、遠い所になるにつれて段々と無数の線として二郎の目に写り、桜の枝に落ちる雨は、茶碗の水を高い所でひっくり返してこぼれ落ちるのを少しぼんやりさせたものに似ている。遠くで（校門の方で）生徒の音がする。友だちを呼ぶ声らしい。その声は雨の激しい音に粉れてしまっている。不意に二郎の頭にセッケンの様な顔が浮ぶ。カバンを持つ手がやけに重い。ちぎしょう、と二郎の胸の中でまた息が洩れる。

そうしているうちに余の中で、走馬燈は回った。

※第二の手紙（一九〇一年五月二十一日）

拝復。手紙から察する所、修行、辛そうですね。自戒自律か。でも元気でやっている様子、安心しました。僕はだめです。最初の意気は良かったんだが、三日坊主なんだねえ。次に僕の近況。今、僕は英語塾に行っています。通信添削も受けることにしました。そうしないと落ち着きません。塾には一ヶ月二千円もかかる。通塾の方にはもう少し安い。と言っても大分要ります。金かけなきゃ、てめえ、勉強できねえのか」と、ふっと思うと寂しくなります。学校の授業料払うのにきゅうきゅうしている人のこと聞いてもピンと感じぬ自分に気づいて、余計寂しくなりました。怒りは感じません。塾の中にはいやな人——他人の事を色々聞いて参考にして自分の勉強については語りがらないことや、その他様々な点でいやな人——が少しいますが、そういう人に対しても怒りを感じません。そういう人を見ると、自分がどこか深い所へ沈んで行くような気持ちを抱かれます。なのに僕は塾へ行く。おかしいね……。塾の先生は、S

都立のS高からM高へ回されただけまあ良かったけど。大体親の期待が大きすぎるんだ。息子が僕一人で残りはちっちゃな妹だから僕にすごく負担をかけて、大阪の家から東京の伯父さんの家へ僕を下宿させて勉強しろだろ、それが中学の時からなんだからね。でもこんな結果になって、お母さんには申し訳なく思っている次第。入学式、桜がきれいだった。学校の塀から桜の枝が通学路に顔を出している。満開を少し過ぎていた。桜の花びら一つ一つはそんなに美しくはないね。たくさん花びらが集まると感激させられちゃう。不思議だ。話は変わるけれど、玉徳君、お寺での修行に精進して下さい。大きな声援を送ります。東京から福井までじゃ、ちょっと遠すぎて聞こえないかな。僕も高校での勉強、もりもりやります。三年後を見て下さい。せっかく生まれて来たのだ。偉くならない。M高。第一志望ではありませんが（うまく言えないけど）変な感情（不満？あきらめ？コンチキショウ？）は持たないようになっています。テストで一番になってから自分の高校に文句をつけたら良いと思っています。一番にもなれずにつぶつ文句を言うのは卑怯だと思っています。来月にはもう実力テストがあります。クラブの事はまだ考えてませんが、入りたいなあ。若いうちは何でもできるんだから。ともあれ、お互い、一生懸命やりましょう。山の中のことですから体には気をつけて下さい。それじゃあ

夏川玉徳様

○雨と二郎

郎は舌で口唇を僅かに濡らす。名前と点数の書かれてある紙から目を離して、二郎は窓越しに校庭を見下す。塀に沿って植えてある

高を停年でやめた人です。生徒は先生のお宅まで足を運び、お宅の一室で講義を聞くのです。随分立派なお宅で、天井は全て征目の木で出来ています。先生の給料じゃとても征目の天井は作れない。僕達の月謝で征目の天井が出来たんだと思うと妙な気分になります。妙な気分、悔しさがよびり、あとは味けなさ。ここでもやっぱり怒れません。高一の生徒は全部で十一人、つまり二万二千円です。

浪人、高三、高二、僕達、それに中三まで教えているんだからボロい商売だ。T高、S高と、有名校の生徒が半分以上います。いやな気分でした。しばらくしてS高の人と親しくなりました。彼の学校では、リーダーを妻いハイペースでやり、何冊かは忘れましたが副読本を僕らの学校よりも数多くやり、中には講義なしの副読本のテストもある。こんな話をしてくれました。（僕が聞き出すという形でしたが）そういうS高の事実、僕は羨望に近い感情を抱きました。（可哀想という気持ちもなきにしもあらずでした）憤りはあまり感じませんでした。そんなに英語の授業（？）を受けて、なぜ塾へなんぞ来るんだと聞いたら、入試のキーポイントは英語だ、それなのに自分は英語が苦手だからさ、ときやがった。恐れいってね。そうそう、こんな話もあります。お寺にも新聞は届くんではない。この前の新聞に高校生の自殺の記事が載っていたのを覚えていますか。S高生がデパートの屋上から飛び込んだ事件です。記事を読んだ僕は、塾から帰りながらその自殺についての詳しい話を親しくなっていたS高生に聞いたんです。自殺した人は私立中学からS高に入学したのだが、中学の時病気で一年休学していて、クラスメイトより年上だったそうです。それで、彼、偏屈になってたんだ

ね、いつも黙ってイスにじっとしていた、と奴は言いました。奴は自殺したS高生と同級だったそうです。皆な彼の事聞くね、と奴はちょっと笑顔を見せました。——自殺の後、ホームルームが何かやって、皆なでその話話し合ってたのかい、と僕。すると奴——いいや、普段と少しクラスの雰囲気違ってただけだ、何しろ無口で友達がなかったらう。少し学校の事、書きましよう。僕は「英詩を囲む会」に加入しています。その会、クラブじゃあないのですよ。英語の詩の解釈とその詩に関して各自思った所を述べ合う趣味と実益を兼ねた同好会なんです。この前三年生の会員同士で、三年になって会の活動をするのは受験を考えてみては否かというものすごい討論をやっていた。討論の中味は分からなかったけれど、それから生徒会の事も少しやっています。H・R委員をやっています。委員会では上級生の発言するのを聞くと、やっぱり高校だなあって実感がわく。こう書くとも高校の生徒会の活動が活発だなんて君は誤解するかもしれないけど、本当はだめさ、ほんの一部の上級ばかり懸命であとの人には無関心のようなんだから。そのほんの一部の上級生と僕達一年生のH・R委員のうちで比較的真面目な者たちが、この前、委員会終了後雑談をしたんだ。生徒会活動の沈滞についてある上級生は、「やはりその主な原因は高校予備校化じゃないか、そして、その予備校化を産み出したのはただの風潮や個人の心情じゃなくて、日本の政治、経済にあるのだと思う。生徒会の沈滞を考えるにしても、社会を直視しなければいけないのに高校生の多くが逆に社会に背を向けている状態だ」なんて言ってたぜ。それから話題がどう転じてか、憲法とか自衛隊についてになったんだよ。それを

ってある紙を見上げる。それは僅かの時間であった。その僅かな間に、二郎のこれまでの高校生活のことが再び余の胸に去来した。

走馬燈は更に回った。

○「小さな出来事に至るまでの二郎」

一年生の時、二郎は何かに向ってしゃにむに突進して行った。突進すべき対象が何であるかは分からなかったが、ともかくもそこにはびっくりするような事が沢山あると思われた。高校での毎日の経験が突進のエネルギーとなった。

※第三の手紙（一九X一年十一月八日）

拝啓。山での修行いかが。こっちは元気。君はどう思っている？

福井の山奥に閉じこもったこと。僕には社会からの逃避じゃないかと思える。だってそうだろう。君はいつも言っていた、大人は醜い、自分の事ばかり考えているって。君は自分自身を鍛えれば君の例の「自分を愛するみたいに人を愛せる人」になれると思っているみたいだ。でも福井のお寺なんて日本の社会から較べればほんの一部だ。その小さな固い殻に閉じ込めて、その別世界でいわゆる善行をなして自己満足を得る、それがどうして人間として立派な生き方なのか疑問だ。僕が誤解している事実があったら指摘して下さい。僕は色々な話を聞いたり、本を読んだりするたびに、自分を現実を知らなかったんだなあと痛切に感じる。僕達の年代の者は社会の流れを余り知らないし、また、知らされていないんじゃないかなあ。それに第一僕達は現状維持型の者が多すぎるよ。試験地獄の現状、学歴尊重の現状、山谷と銀座が同居している東京の現状、「古く良いものは大事にしよう」という掛声に乗って戦前の軍国主義

聞きながら、今までの甘っちょろさじゃいけないなあってつくづく感じました。僕には「信念」がないなあ、君のように。前途多難、山は高く険しい。でもとにかく第一歩、ぐらつきながらも踏み出しました。

君には負けません。

夏川玉徳様

○「小さなできごと」の前に。

二郎は舌で口唇をちよっと濡らす。人間にもどこか万年筆と通い合うものがあるらしく、英語の点数を順番に見ていくうちに、二郎は去年通った英語塾の事を思う。「私に教われば志望の大学に入れます。」と言いつつ塾の先生の自信あふれた笑顔の目が、塾の思い出として二郎の頭に浮ぶ。

二郎の心臓の鼓動が雨よりも強くなる。顔の赤味が増す。二郎は、教室の窓に手をかけて開けてみる。その教室にはカバンが一つ机の上に置かれてあるだけである。三教室とも人はいない。二郎は自分のカバンを教室の机の上に置いてから廊下に出てみる。そこにはやはり誰もいない。階段を登る音がしなかったでそれは（無意識のうちに）予想している。

二郎の上着のポケットには「勝手にしやがれ」と大書した紙とノリが、ふざけ半分のほんの思いつきで入っている。

心音が二郎を圧する。二郎は、心音にさえびくついている自分を悲しく思う。二郎の脳みそに、誰かの自信の満ちあふれた笑顔がぎゅーっと伸びる。みじめな自分。二郎はカサ立てを引きずる。ずるずるという音が谷間のような自分の中で響く。二郎はもう一度壁に貼

と結びついていた行事が再び盛んに現われてきた現実、そういうものの目を向けようとせず、どうやら現在の世の中で得をするかなんてことばかりに頭を使っている。「しょうがないじゃないかこんな世の中だから」って言葉の氾濫だ。これ、人からの受け売りなんだけれど、「僕達の生活態度は改革的でなければならぬ」ということ、この精神でいきたいものです。変に説教ぶってすまない。同好会にはまだ入っていますが、H・R委員会の方が忙しくて余り会には出られません。この前、上級生のH・R委員の人達が、S高の生徒会を訪問しました。その時の話を色々していました。S高では生徒会活動が活発で、文化祭にはクラス単位で「学校生活の問題」「社会問題」を取りあげて研究発表したのだそうです。でも勉強も凄くやる。素晴らしい学校ですが、僕にはヤマトノオロチの様に思えて薄気味悪い。塾で知り合ったS高生の事が頭にあるからです。変な事書いちゃった。でも何でも良い、とにかく動け、積極的に、誠実にノ苦しいね。でも僕達何に対しても突進しましょう。十六才、若い、イノシン年なんだから。

イノシン君の前途を祈って、筆を置きます。

夏川玉徳様

この頃、二郎は既に英語塾をやめていた。費用がかかり過ぎるのがその第一の理由である。そして塾の息苦しさ、重苦しさに耐えられなかったのがその第二の理由である。塾に行く事が、改革的生活姿勢ではないからと思つてやめた訳ではないのである。二郎の生活態度が高校入学頭初と較べて変わってきているとは思えない。相変わらず便所の中で歌を歌う。橋幸夫の「あゝ特別攻撃隊」を気持

ち良きように歌う。これはどう見ても改革的態度とは思えない。与三郎伯父さんに、「二郎君達が理屈をこね回した所で社会は変らんよ。」と言われたと、反論もせずに黙って下を向いてしまふ。少し赤くなる。妙に涙が出そうになる。これも改革的態度とはいえない。クラスでは、人と議論をしたりホームルームで遮断機みたいな手をあげる外はあまり特徴が見出せない二郎であった。

十二月に入ってから、うっとうしい日が続いた。雲が魚のうろこのように幾つも重なりあって空を覆う日がある。かと思うと、切れ目の分らぬ位に雲が薄く広がる日もあった。それが、良く見なければ分らぬ程ゆっくり動く。雨は降らなかった。今にも降るぞ降るぞと、感しつけているような暗いねずみ色の空だった。

二郎の期末試験の成績は芳しいものではなかった。日頃怠けており、その上試験前一週間、ほとんど勉強しなかったのだから試験の成績の悪いのも当り前の話であった。

余が二郎を御主人に持つてから八ヶ月もたつ。従つて余と二郎とは一身体、余は二郎の心の動きが手に取るように分かつて来た。二郎は試験前のドタン場の勉強が大嫌いであつたのである。非常な圧迫感を感じる。ドタン場の勉強が懲役でもあるかのように思えて苦しくなる。牢屋にでも入れられた気分である。そして試験の終つた日が出所の日という訳である。二郎は試験前に勉強をせず何をしていたかという小説を読んだり、あらぬ事をこいらの紙に書きなぐったりしていたのである。例えば——人の言う事をそっくりそのまま信じられる世界がないものかしら。騙されても騙されても、正直でさえあれば恥る事なし。「仰いで天に愧ぢず。俯して人

政治への受動化、さらには政治からの逃避につながり易い事も事実で、これは日本の民主主義を守り育てて行く上に危険な傾向であると言わねばならない。この記事、僕の知る限りでは、真実をついていると思うんだ。個人的な生活の向上って、とても大事な事だけれど、そのみに関心がいつてしまつて、社会のいけない事には目を向けなくなつてしまふ。あるいは目を向けても、そのいけない事と自分とのつながりを完全に絶つてしまつた状態で思考しようとする。そういう意味の事を「点取虫」って呼ぶんだと思う。点取虫って言葉、誤解されてたよね。利己的で青白くて、人間的なデコボコや暖か味の感じられない人間を点取虫って呼ぶんだつたら、他の学校の事は知らないが少なくとも僕達の回りでは、点取虫なんていなくなつちゃう。そうだろう。中学の時も、利己的な人間なんて、君はほとんど見かけなかったろう。変てこな人間にならないように（できる）と言われている人は特に、必死なんじゃないだろうか。そういう必死の人。あるいは、入試体制良い悪いなんて声に全く耳をかさず、超然としてバカンスを楽しんだり、クラブに精出したりする（但、一・二年の時のみそうする人）。皆点取虫也ノ馬糞くらつて出直して来い。意識を持つて受験勉強すれば良い（受験には良い面と悪い面とがあつて、自分がしっかりして受験の良い面を利用すれば良いという考え方）もゴマカシだね。基本的には「与えられた体制のワクの中での身近な個人的な生活の向上に主要な関心が注がれ、社会的に悪い事には大して怒りを感じない」そういう生活姿勢なのだから。誤魔かしちゃいけない。『人は客、自分は問夫と思ふ客』この遊廓の名言、いわゆる意識ある受験生への警句ではないか

に忤らず。』の心意気。孟子万才。でも、少し悔しい。◎鬼の二郎になれ。◎僕の良い所、全て認めて下さい。◎僕が小さい頃、お客様が一杯やりながら言った、「おとなしい坊っちゃんですな。」馬鹿野郎、警戒してるんだ。◎嘘を吐き、人のいやがる事を言い、利己的で、それでいて平気な人間を、僕は呪い殺してやりたい。◎虚栄って悪い事？◎目を血走らせている人を横目で見てニヤニヤ笑う「余裕」のある奴、自分は偉いと思つてやがる。◎笑いは条件反射でもある。慣れれば好きな時に笑える。◎微笑/微笑/微笑/。◎これでも生きてるんだ。◎人間として立派な人の前にでるとおどおどしてしまふ。素っ裸にされた気分だ。油断できない。◎神様みたいな良い子になりたい。◎ヘラヘラ笑つて下向くな。真直ぐに。◎自己を憐憫せよ。◎あなた、御立派、分かつた、分かつた。◎自分を常にマイナスの位置におけ。そうすりゃ幾ら落てもゼロになる心配なし。こんな断片的な訳の分からぬ文句を一杯書いて時間を消費したのである。これは生産的な行為ではなかったが、紙に心をぶちまける他に、二郎は近頃感じて来たモヤモヤの解消方法を知らなかった。しかし、その行為はモヤモヤした感じを逆に一層強くした。

※第四の手紙（一九九二年二月十四日）

拝啓。玉徳君少しは下界の高校生にも関心をお持ちよ。君の手紙、いつも山での修業の話とか説法じみた事ばかりだ。次に僕の大論文（？）をお目にかけます。下界の高校生に対する君の理解の役に立てば幸い。最近の新聞記事にこんなのがあつたんだ。『現代の青年の主要な関心は身近な生活の設計や与えられた体制のワクの中での個人的な生活の向上に注がれている。その結果が

大論文。一応ここで終えます。実はじきに夕飯なんだ。この手紙を持ってポストまで一っ走りして腹を減してから夕飯にありつこうという魂胆。

返事下さい。

敬具

夏川玉徳様

人間には参った。断片的な訳の分からぬ文句を書いたのもこの手紙を書いたのも二郎である。奇妙だなあ、と余は思った。

◇ 二年生になって。二年に進級してからも相変わらず議論と遮断機が特徴の二郎であった。

二郎は多くの経験をした。二郎は考えた。

そして夏休み。夏休みに入つて、二郎はYゼミナールへ数学の講習を受けに行った。それは伯母を通じての母の指示によるものであつた。―暑いのに御苦労さまだ―二郎がゼミに行く事に対して抱いた感じはそれだけのものではあつた。あるいはもつと複雑な感情を持つていたのかも知れないが、少なくとも二郎が自分で意識した感じはそれだけのものではあつた。実際暑い夏だった。ゼミには浪人が多かった。タバコを吸う者もいる。それらの浪人に対して二郎は余り心を動かされなかった。どうでもよかった。

H・R委員会が討議資料として、H・R運営に関する資料を作製した時、二郎がその作製を手伝いながら「協力って大切だなあ。一人でやっていっちゃだめだ。皆なと一緒にやるんじゃないか」と思い知らされたのもつい先の事であつた。

―何でも予備校ってのはこう沢山人間をつめ込むだろう。きゅうくつでそれに暑くてかなわない。昼間だつてのに螢光灯なんかつけて、空はあんなに青いじゃないか。あの講師随分速く喋るな、立て板に水。―

二郎はとりとめもなくこんな事を考えていた。講師の声だけが自然に耳に入ってきた。が、またすぐにその入ってきた声が自分から抜けていった。そうして二郎は時々思い出したように講義に耳を傾けた。

ゼミに在る間中ずうと、二郎は口をきかなかった。もともと友達と来た訳ではなかったから、特別に話し相手もいなかった。二郎は自分に非常な重たさを感じた。又、二郎には隣の人の事などほとんどと言つて良い位、気にかからなかった。もし明日、今自分の隣に座つて熱心に講義を聞いている男の突然の死を聞かされたとしても、自分はちよつといやな気分になるだけだろうと二郎は思った。が、実際そうならどうだろうか分らないと思ひ直した。そんな思ひにふけていて何がかは分らないが惨めになってき、その惨めさをバカ笑いで笑い飛ばしてやろうかと思ひつき、それが不可能だと気づいて、二郎は余計惨めになった。

何をするにも物憂かった。暑いなあ。電車の中でも歩いてる時にもそればかり考えた。複雑な思考はめんどくさかった。自己完成への努力に関する意欲も湧かなかつた。自分の身を何かにゆだねたようで、ただ暑く物憂かつた。

二学期。

九月には雨の日が多かつた。台風もあつた。その為福岡のある町

二郎が中学二年の時、小学校二年生の次子がお兄ちゃんお風呂に入ろう、と言つた事がある。二郎は物心つてから女性とお風呂に入つた経験がないので、きまりが悪かつた。そのきまりの悪さに妙にこたわつた。それで、僕はお風呂で歌を歌うんで、それを次子ちゃんに聞かれるとうまく歌えないから、次子ちゃん先に入んなとこまかつた。とにかく二郎は次子の良い遊び相手になれた。

隣の部屋の富子の声が多一段高くなつた。富子はものすごい勢いで喋りまくっていたが、二郎達には何を言っているのか分らなかつた。バカノと一喝する声があつた。次子は、さすがに一点を見つめる表情ではいられず、下を向いてもじもじした。次子は小学校五年生になつていた。ばか野郎、と二郎もどなり返してやりたかつた。しかし、自分の両親のように何かと言うとすぐ締めたがるのよりも、伯父さん達みたいなのが活発で良いかも知れないと、ふつと思ひ、次の瞬間その思ひを強く打ち消した。ヒステリックな声や強い語勢にひどく鋭敏になつてきた自分に気づいたから、バカヤロウと外に発散されるはずの声が、行き所がなくなつて、逆に二郎の心の底まで鋭いもののように落ちていった。

二郎は隣の喧嘩を無視することが自分にも次子の為にも良い事だと思つてこつと言つた。「次子ちゃん。僕は後三手で四三だよ。どこだか分かるかな。」そして勢いよく石を打ちこんだ。それだけ言うのに、二郎はわきの下に汗をかいた。

長女の定子はお金を貸りに与三郎の家を訪れたのだつた。旦那さんはサラリーマンである。定子達夫婦は、二郎のよく口にする「小市民生活」を営んでいるのだつた。夕食の時、定子と与三郎夫妻と

では崖崩れが起り、一家六人が生き埋めになるといふ事件が起つた。雨の被害は多かつた。そして被害者には金持ちがわずかで、その逆の人が多かつた。二郎はそういう報道を聞いても心が暗くなるだけだつた。

十月のある雨の日曜日の事であつた。その日、お嫁に行つて定子が与三郎家へ来るといふ電話が理由で、与三郎と奥さんの富子が言い争ひをした。富子のヒステリックな声が隣の部屋の二郎の所までつき抜けて聞こえてきた。二郎は、又かと思つた。二郎が中学一年生の時、当分へ預けられて三日目に二郎は富子のヒステリックな声を聞いた。長男の弘を叱つてゐるのだつた。弘は慣れているらしく平気な風であつたが、二郎にはその声を聞いているだけで骨身にこたえた。頭の髄が痛くなつて自分も大声をあげたくなつた。たまらない思ひであつた。

隣の部屋から富子の声が聞こえて来た時、二郎は小学生の次子とちよつと五目並べをしてゐるところであつた。二郎は当分へ預けられた頭切、次子を随分依怙地な子だと思つた。学校から帰るといつかは一人で積木をしたり、折紙を人には意味の汲み取れない形に切つて畳に並べてままことをしたりして、それをゴハンデスヨと呼ばれてもやめない。そして、お母さんに例の高い調子の声で叱られても一点を見つめて絶対に泣かなかつた。少くとも二郎の知つてゐる限りでは、泣いたことがなかつた。次子は始め二郎に警戒心を抱いてゐる風であり、しかも人見知りの強い子なので、二郎にはなじめなかつた。しかしこれまで遊び相手がなくて寂しかったせいもか段々打ち解けて来た。よく一緒に遊ぶようになった。

の会話――不思議にもほのぼのとした愛情の交流が二郎には感じられた会話――聞きながら、二郎は――家庭生活を営むのに、定子さん必死なんだなあ――それだけの感想しか抱かなかつた。「子供が健やかに育つてくれるように。家庭が円満であるように。夫の給料、もう少し上がるように。知り合いの人達と楽しくお付き合いしたい等々」これらの事に（極端に言えば）現在の人生の目標を置いてゐるらしく外見には見える定子に対して、二郎は批判めいた考えを少しも持たなかつた。夫の給料に対する不満を述べ、「この頃は物価が高いし」と言いながらも楽しそうにご近所のうわさ話をする定子を、二郎はほんやり見ている。

二郎は自分の部屋に戻つてから、ガラス窓の風にガタガタいう音に混つて雨の音がするのを、驚きに似た気持ちで聞いた。夕食時には雨の事など全く忘れてしまつていたから。窓を開けてみた。雨はよく見なければ分らぬ程細かつた。定子達はまだ雑談をしており、ときたま笑い声が二郎の耳に聞こえて来た。それは幸わせた暖か味の感じられる笑い声のように、二郎には思えた。

※第四の手紙（一九二二年十一月二十四日）

前略。玉徳君、僕の手紙で君の手元に残つてゐるのがあつたら全部焼きて下さい。手紙の文句で君が覚えてゐるのがあつたら皆な忘れて下さい。どうにもいけない。僕はためだなあ。おかしくつてたまらない。クルクルバーのおかしさだ。実力テストで番数が凄く下がつたのが、中国の核実験よりも僕にとって大きな問題でした。ショックでした。入試というものが、まだはつきりとはつかめませんが、僕にとってこんなに厚い壁――つまり僕の生活を強く規

制するもの——だとは思いませんでした。以前、教生の人と話した時こんな言葉を聞かされました。「壁が厚い事を理由に退くな」って。僕にとって「退く」とは、同好会をやめ生徒会から手を引きあえるいは入試勉強以外の方法で自分を鍛えることを避ける。そういう方向に僕の生活の歯車を（全くではありませんが）より多く向けることを意味すると自身では考えています。（恥かしいな、解説者みたいで）でも退いてしまった、少しだけだね。でも少しがいけない。スリはドロボウの始まりって言うだろう。僕達の中にも（入試がなかったら勉強するかとか、入試は青春期における一つの修練だとか、その他様々の理由によって）入試を礼賛する人、あるいは、消極的に肯定する人がいますけれど、現在の入試には「地獄」と呼ばれるのにふさわしい側面が多過ぎるようには僕は思っています。でも僕にとって、現在の受験体制が天国か地獄かなんて考証に時間を費すより、勉強に精出した方がより有効な時間の使い方じゃないかと思えてきました。受験の事は書き、山奥で厳修に励んでいる君にはすまないのですが、もう少し書かせて下さい。なぜなら、僕はこれまで自分の考えを余り表に出さなかった。その方が奥ゆかしいなんて考えていたのかな？秘密主義？ともすると自分の考えをどこに隠したのか自分自身で、分からなくなる事があります。そういう態度を廃したい。君、大松監督はやっぱ偉いねえ。みんな開けばなしてその上で勝負しようと言っている。僕も、開けばなしに書いて、恥かいて、面の皮、うんと厚くしよう。勝負はそれから。書かなければ、何も分からぬ／今の所、開けばなす相手は、お角違いなのですが、君だけです。本当に悪いんですけど、読んで下

さい。僕は入試を突破する事が僕の人生路線の第一歩だと考えるようになってきました。あるいは、そういう意識を掘り起こした、とでも言っておきましょうか。僕の人生路線？どう生きるべきか（ちよっとキザッぽい言い方かな。でも君にキザだと思われても良い。スタイル気にして、大事な問題、ヘラヘラ笑って誤魔かしたくないから）どう生きるべきか、それはとても漠然として今の所、ここにははつきりと書けない状態です。僕の特長である機械設計の職に就き、そこで僕の能力を思いっ切りためてみたい。フルに活かしたいという考えの後にはもやもやした感じという訳です。コンクリートに思いっ切り頭をぶっつけたらあるいはスカッとするかも知れませんが。でもその漠然とした人生路線の第一歩が入試突破にあるんだという言わば、義務感のようなものは僕の中でかなりはつきり（？）意識されます。

——義務感？焦り？

機械設計の技術、取得できるだけ取得して、その技術を（僕にとって？）一番効果的な方法で社会に吐き出していくんだ、という義務感？皆様の行く所どこまでも？まさか……？お母さんや伯父さんに対する義務感？これまでの僕の生き方——つまり僕の生きていく上での価値（？）は僕自身の中にはなくて、他人の評価にあったという生き方の要求する義務感？（もう少し大松精神を許して下さい。）あいつがやるならという競争心の焦り？大勢順応の安心？夢中になれる手近なものが欲しいから？そんな答は……。習慣？それとも……それともうやめにしましょう。クエスチョンマークだらけで、しかも、こういう問いかけは僕にとって無意味だという気が

がします。勿論（自慢じゃないが）クエスチョンを解こうという気も起りません。坊っちゃんだねえ。助平根性かな？変な事書くよりもまず行動せよ。——ごめんよ（何でもあやまっちゃえ）自信がない。（自信は努力の産物なり——アベベ？）でも今は不安で一杯だ。僕は元来心配性だから。将来に対する漠然とした不安。僕の能力に対する不安。こんな事で自分は良いのだろうかという不安、そんな掴み所のない漠然とした不安をけ散らす為に、何かしなきゃいかん、何かしなきゃいかん、と焦りを感じます。でも何とかやります。僕の手紙、あまり信用しない方がいい。人間には本能的に自分を正当化する気持があるらしいから。自意識の強さ？でも、良きにつけ、悪しきにつけ、自意識の強いのは僕達の年代の者の特徴なのじゃないか。僕達の多くは、極端に言えば、小さい時から断えず自分の成績と自分以外の全て（？）とを比較する気持ちを抱かざるを得ない教育の中に育って来たから。駄目、駄目。自意識がどうこうより、まず点を取れ——天の命令だ。至上命令。弱ったね。机にへばりつくセロリにはなるな。でも、大学には入れておくれよ。（悩んでるふりをしろ。そうすりゃ誰かが助けてくれらあ——ジャン・クリストフ？）

弱さに徹せよ。

乱れた手紙でごめんなさい。でも僕がふざけてこれを書いたのではない事だけは信じて下さい。これでも真剣になって書いたのです。ですから、書き終えた今、清々しさを少し感じます。これはヒロイティックな（自分は悲劇の主人公だなんて言う）清々しさではなくって、埋没した自分をできるだけ掘り起した大松精神を持ち得た清

々しさであると僕は信じたい。玉徳君にはいつも心のハケ口になって、もらってすまなく思っています。

体には気をつけて。

夏川玉徳様

二郎はさっきからいらしていた。十一月の末の事である。（正確に言えば「小さなできごと」のあった日の午前中の事である）この前の実力テストの成績についての先生の講評が続いているのだ。雨の音がうるさい。激しい雨の音の世界の、その真空の場所にクラスがあるようだった。二郎は先生の講評を聞くなどという意志は最初からなかった。だから天井を見上げたり、机に彫られてある字を読んだりしていた。点燈されていたので、電燈のカサの影がシミだらけの天井に大きく写っていた。しかし聞かない積りで、声は自然二郎の耳に入ってきた。——現役の人に入試を甘く見過る傾向があります。——とか——三年になってあわててもなかなか成績なんて上がるものではありません。——という声が断片的に二郎に聞こえて来た。いたたまれない気持ちになった。そんな事分かってらいたと大きな声を出したらすっきりするかもしれないと思ったりした。机の中の本やノートをかき回してやりたくなくなった。それでも二郎はじっとして、机の上をにらんでいただけだった。（余思へらく、二郎は幼い子供のようにわがままである。八ツ当りしている。これが御主人二郎に対する余の考えである。ここに、余は余儀なく二郎の態度を客観的に記さねばならぬ立場にあるのだが、ただ、講評を述べる先生がどなられ役になっているのが忍び無く、余計な注をつけ加えたのである。）

○そして「小さなできごと」

二郎は舌で口唇を少し濡らす。二郎はゆっくりと壁に貼ってある紙から目を離し、カサ立てを見る。物憂い中に、心臓が、びくつくもう一度見上げる。「紙」が自分に大きくなる。襲う。二郎の空っぽの頭に、真夏のゴムが、伸びる。誰か来る。そういう危惧は、複雑過ぎて、二郎の頭の中には、ない。雨に加えて風が強くなり、雨粒がしきりに窓ガラスを打ちつけた。

紙を引き破く時の特有のばりばり言う音はしなかった。

第二章 知と淡い悲しみと

余は万年筆である。再び余は西川村を見ることができた。しかし少々寒い。二郎はオーバーを着ないから。花子さんと弘と二郎は、今、胴の短かい西川駅のプラットホームに降り立ったところである。駅前から見えて駅の向こう側は狭い畑になっており、畑の向こうに幾十年前の建物だろうかと思わせる長屋、その向こうに山が迫り、そして夕方の空が広がっている。どこもかしこも雪だ。長屋の手前の畑は雪の下で冷たくなっている。汚ない長屋は真白い雪でお化粧。雪は既にやんでいる。欲張りな空は、雪と濃い闇との両方を、遙か高い所でしっかりとつかまえているらしい。しかしもうしばらくすると、それらを一齐に地上に放出するだろう。そんな気持ちを抱かせる寒さだ。電柱の先っぽにもかき氷みたいな雪。それはきつと夜になると闇の中で冷たく目立つだろう。足長おじさんの綿毛の白い帽子のように。谷川の流れの音は聞こえない。こおっているであろう。

——二郎君、いかが。——お花ちゃんが余に対しテレパシーを送って

十回程合っているそうだ。最近では、二郎が中学二年の時に花子さんと民江さんが二人だけで東京に遊びに来た。その時に会っているそうだ。お花ちゃんも花子さんの胸のポケットに収まってやって来たのである。その時の二郎に対する印象をお花ちゃんは思い出しながらこう語ってくれた。平和な顔してよく笑うけれど、お話は苦手のようだった。食いしん坊。そして、今あなたの御主人の事まだよく分らないとつけ加えたのだった。

花子さんと弘と二郎は、西川駅前バスに乗り込んだ。一べんに暖くなった。

実は一昨日、与三郎家へ遊びに来た花子が、弘と二郎と次子と一緒に山形へ帰って田舎でお正月を迎えたらどうかと誘ったのである。次子だけは、東京の家が寂しくならないようにというので残った。二郎は、終業式には行きたくないし、自分の環境を少し変えたいなどと思っていた矢先なので、渡りに船、早々田舎に出掛ける事にした次第である。

二郎と一身同体になっていたために、不本意ながら余は与三郎夫妻を悪く書いてしまった。与三郎夫妻は良い人なのである。富子夫人は特に歪んだ描き方をされた人である。余は夫人は良い人である、と弁護しなければいけない。弁護理由の第一番目、夫人は忍耐心に富んでいる。根気が非常にある。同じ事を十べん繰返して喋ってもケロリとしている。その第二番目、夫人は大変素直である。であるから自分の感情に対しても素直であって、怒る時は怒りおかしい時はおかしそうにする。これは夫人の長所である。与三郎氏も大酒は飲むが、飲めば飲む程にかっぱれなどを踊り出す。かっぱれを

来た。お花ちゃんとは、花子さんを持主とする万年筆で、山形へ来る汽車の中で親しくなった。——うん。素晴らしく美しい景色だ。でもお花ちゃんには及ばない。余はこう返答した

汽車の中でお花ちゃんとのテレパシーの交換で、余は宮本家の大体の人間関係を掴み得た。山形の伯父さんと与一といい、そのすぐ下の弟が与三郎伯父さんである。その下が二郎の父親である。そして与一伯父さんの長女がお花ちゃんの御主人の花子さんである。二十三才で、じきに結婚するそうだ。家にこもってしきりに縫物をしているのだそうだ。花子さんの弟は大学の経済に在学中である。

なぜ農科へ行かなかったのかお花ちゃんには分からないそうだ。余を買い上げてくれた娘さんは、民江さんと言う。与一伯父さんの妹が民江さんのお母さんと言う。が、民江さんを生んでもまもなくなくなれたそうだ。しばらくして民江さんのお父さんは新しいお嫁さんを迎えた。それと相前後して民江さんは、与一家へ預けられたそうだ。その時には、おばあさんはまだ生きていたそうだ。民江さんは今、高校三年生である。なぜお父さんと新しいお母さんと民江さんと、一緒に仲良く暮らせないんだと余は憤りを感じた。——そんな事、万年筆の私には分らない。それよか、年忘れテレパシーの会がもう少しするとあるんだけど、どう？——お花ちゃんはこう言うて来た。余はお花ちゃんの言葉を聞くと、今まで憤っていた事は忘れてしまい、嬉しくなってしまう参加しよう、と言った。余はお花ちゃんに弱いんだ。それでも年忘れテレパシーの会まではまだまだ時間があったので、話題は再び宮本家の事に戻った。お花ちゃんのテレパシーによると、余の御主人二郎は、花子さんと民江さんとはもう

踊る人で悪人はいないと断言してまず差支え無し。二郎の両親についても同じ事が言える余は推察する。案外二郎の両親、おっちょこちょいの楽道家で、二郎の小遣いを一月に二回も送って来る事もあったのではない。有難い御両親である。

バスは雪の中を貫く一本道を走った。駅前を過ぎると、左手には広い田と、そこにぼつんぼつんと家屋が見える。その向こうに山がある。非常に平面的な光景である。それは薄闇のとおりが物の隠影を被ってしまったかららしい。目の前をバスの速度につれてゆっくりと流れるその光景全体が白い。右手に竹やぶが続く、低い山が竹やぶの上にある山の裾は段々畑。竹やぶを通して、こおりついた谷川のあるのが認められる。近くの山の頂上より更に高く、遠くの連峰が夕闇の空へ頭を出している。そこは他よりも余計白っぽい。しかし、その峰々と、暗く冷やかな大気との境が、しかとは分らない。

雪がまず西川村を包みこんだ。そして西川村と雪とを夜が蓋った。村をつつむそれらは、二つとも、ただ静かだった。

目覚めた二郎に日光がまぶしかった。冬の弱い光線ではあったが、ちょっと寝ぼけながら目を開けた途端に飛び込んで来たのである。二郎はしばらくきょとんとしていたが、日の光がいやに白っぽいなあと薄ぼんやり感じ、ようやくそこが山形の田舎の客間である事に気づいた。まだ朝が早いらしく、隣の弘は寝ており他の人も眠っている様子で、家中シーンとしていた。雨戸は閉まっていたが、光はかもしの横に長い明かり窓から射し込んでおり、その窓の所が

白っぽく感じられるのは雪の為であった。もう起きようと思つて着がえをしている時、二郎は何かの音を聞いた様な気がした。空気が裂ける音に聞こえた。随分遠くの音のようであるが、近くの音のようでもあった。音は段々近づいて来るらしかった。エンジンの音だと分かったのはそれがかなり近くで聞こえるようになってからだった。音は又遠くへ去っていった。

二郎は早朝の空気のひんやりした感触がたまらなく好きだった。二郎は戸外に出ると思いっきり深く息を吸い込み、そして静かに白い息を吐き出した。吸い込む空気の冷たさが肺の中がすっきりしたみたいであった。前方のバス道路も、竹林も、近くの山裾も、遠くの連峰も、それらの外面だけでなく性質まで被い隠した雪の為に、御伽噺の世界に出て来る景色の様に思えた。二郎は雪を見慣れていなかったから。不意に、あたりの人影のなさが二郎に物寂しさを覚えさせた。それは、夜明け時の薄暗いプラットホームに一人で立ち、点滅する警報器の音を聞く時の寂しさに似ていた。(逆に言えば、デパートの屋上の沢山の見知らぬ人々の中に自分の身を埋める時の、そのほっとした気持ちと求めなくなるような寂しさに似ていた。) 似てはいたが、しかし、それ程強い寂しさでもなかった。なぜなら、そこは都会ではなくて三方を山で囲まれた雪深い農村であったから。

太陽は山の頂上の少し上の所まで昇っていた。昼に空の真中で輝くものより、随分大きく見える早朝の日輪であった。空と山との境のあたりは橙色をしており、山の頂きの雪に映える橙色は特に鮮明だった。西の方向の空の端は、橙色というよりむしろ薄紫に近かったから。

と呼ぶ声があった。花子が襟巻を手を持ってそれを振り回しながら家の玄関から駆けてきたのだった。かわい素適なお花ちゃんの姿が花子の胸にない。余は少し残念だった。

雪はかなり硬くなっていたが、踏むとサクッと歯切れの良い音がして、そうして踏みつけられた雪がキーンと小気味のいい音を出すのであった。花子は、二郎ちゃん早いね、と二郎に笑い顔を見せてから「あたしにも乗せてくれない。ちょっといいから。」と民江に言った。白い息を汽車の蒸気のように盛んに吐いた。「うんでもこの前みたいに大江まで行っちゃだめよ。」民江は眩しそうに笑いながらそう答えた。「心配しないで。すぐ戻って来るから。」花子がそう言った後に続けて、「上着きないで出て来たから寒くなっちゃった。イロリの火にあたってくる。」「二郎ちゃん、かぜひくわよ。イロリはまだだからコタツにでも入っていなさいよ。ほら仏間の隣の。」花子の声が二郎に返って来た。「コタツの中で猫が寝ているから氣をつけて。」民江の声も返って来た。「はい」空の端の燈色はもうかなり薄れている。僅かの間に太陽はそれと分かる程昇っている。二郎の雪を踏む音に重ねてエンジンの始動する音がした。そうしてエンジンの音は勢いよく遠ざかって行った。「すべらないでねーっ。」山の頂上で「ヤッホーッ」と呼びかけるような調子の、民江のそんな声が、冬朝の静けさを遠くまで破った。

昼間も依然として太陽は弱い光を大地に投げかけていた。が、雪は溶けそうになく、大地を凍らせたままだった。客間の縁から近所

た。

まともに太陽を見る事は出来ないもので、二郎はその下の峰を見上げた。二郎そこに明るさと清らかさ——どんなものでも炎と化してしまふ輝きを持つが、冬である為その中に優しさを含む太陽の清らかさ——を感じた。

再び爆音が聞こえて来た。その方に顔を向けると、真白い視界に赤と黒の動体が見えた。小さなその動体はオートバイであった。オートバイは素晴らしいスピードでこちらへ近づいて来た。はっきりした形として、その姿は二郎の水晶体の中にみる大きくなっていった。ブレーキ。スリッパ。

「お早よう——。」民江の声が、白い世界に響いた。屈託のない響きであった。「こんにちは。」山裾の針葉樹は、鋭い緑の葉の一つ一つに雪を載せ、さながら樹一杯に現実的でない真白な実をつけたようだった。民江は、幼児が大人を見上げる時のようなまなざしで——遠慮のない、そしてとても不思議な物を見るみたいになまなざしで、まっすぐに二郎を見た。

「朝早く乗り回すのって気持ちいいわよ。胸がすーっとする。すーっとし過ぎて寒くなつてしまふ。空気がつめたいでしょう。二郎君乗れる？ オートバイに。もし出来るんだったら走ってごらんないよ。」

民江は太陽を背にして、二郎にはシルエットだった。

「さあ、自転車には乗れるけど。それに雪の上だから。」

民江の表情は常に変化していた、昔のぞいた万華鏡のように。二郎の言葉にちょっと笑って、あたしと言いかけた時「民ちゃん、

の子供達がソリを引っ張りっこして遊んでいるのが見える。雪ダルマを作る子はいなかったが、雪を他人に投げつける子は多勢いた。二郎はさっきからそれを見ていた。

弘は近くの田んぼに作られた即席のスケート場に、東京から帰省した与一の長男と一緒に出かけている。スケートはツルツルすべってしゃくにさわるので二郎はついていかなかった。

頭の良い子がいるなあ、と二郎は感心しながら子供達のソリ遊びや雪投げを見ていた。頭の良い子は雪玉を直接相手に投げつけず、相手の頭の上の枝に投げつける。すると、枝に積った雪がどつと相手の頭にかかるのである。その音が今、耳の端で聞こえているかのような氣に二郎はなった。と、その時、「民ちゃん、こんなところで水あっためて、魚にでもやるん？」遠くでそんな声がした。友達が三、四人来たらしく、納屋の方がうるさくなった。「これ花びんの水なのよ。冷たい水いきなりあげたら、花、びっくりしちゃうでしょう。」何の？ という間に、菊、と答えていた。「でも、たっぷり良い水あげているのに、花びらがカサカサなのよ。」若い人達には地方訛りがそれ程強くなく、民江達にはほとんどない位だった。「日当りの悪いところに置いとくからよ。」「うん、そうかもしれない。水を吸う力がないんよね。」

「うそ。肥料が足らんよ。」

「あらー、あつちゃん、活けた花に肥料なんかあげるの？」

「初耳ね。でもほんとだろか。」

「あつちゃんたら、いやだあ。また、ひっかけるんでしょ。」

「うそそうそほんとよー、この前のあのー上のおじいさんのとこ

に、知らない？あのーあるでしょう。」

「ホラ、あっちゃん榮養博士頑張つて。もっとゆっくり話しなさいよ。」

あっちゃんと呼ばれた娘さんの投じた愉快な経験談は、波紋の広がっていくように四人の中に楽しさをばらまいた。

娘たちは楽しそうに話を合した。

嬉しげなくやしげなそして困ったような話し手につれて、話し合の波紋も嬉しげにくやしげに困ったように広がっていった。——
そうして笑い声も。

二郎は縁に寝ている子猫を抱き上げた。子猫は目を細めてミヤーとないた。二郎のヒザに生あるものの感じが暖くじかに伝わった。考えることをあまりせず、二郎は小猫がモゾモゾ動く有様をただ目に写していた。

「民ちゃん、大阪行つたらおいしい物うんとこさ食べられるわね。」二郎の耳にこんな声が飛びこんできた。それまでの話し声も二郎の耳まで快いさざめきとして届いていたのだが、その声は不思議と明瞭に聞こえた。

「テンブラ、がんもどき、たこ焼き、お好み焼き、かんとだき。回転焼き」

「みっちゃん、よく知ってるよ。」

「何しろ食べ物のことだからね。まだ知ってるよ。珍しいのもうんと有るよ。海ツパメの菓のスーブ。豚のデベソのから揚げにゴリラの丸焼き。」

「いやだあ、そんなに食べたら、うんと太って今の洋服みんな着

られなくなっちゃう。」笑いながらそう言った。

二郎の指を小猫が噛んだ。それは痛いよりむしろ快かった。

二郎は猫の目の前で指をくるくるさせたりしてじゃれてみた。しばらくして、なぜか小猫は二郎のヒザから縁に飛びおりどこかへ行ってしまった。その首根っこを押えて留めようとは二郎はしなかった。それは二郎の性格だったから。

猫がいなくなるとヒザがすうすうして、大事な物を失ったような気がした。ひどく空しかった。

「それじゃ頼むわねー。ありがとー。」

「さよならー」

「さようならあ。」

友だちは帰るらしかった。どこまでも明かるい呼びかけだった。

※第六の手紙（一九二二年十二月二十一日）

拝啓。玉徳君元気でるか。ぼくは昨日から山形の田舎へ来ています。ある重苦しい記憶から逃れたい、ぼくの環境を変えてみてあるできことをゆくり反省してみたい。そんな思っているところへ田舎の従姉が誘ってくれたので山形へ来たのです。

ある記憶。ほんとうに息苦しかった。

玉徳君、次に書くことは君にとってあるいは何の役にもたないかもしれません。この手紙は力強くばく進する人間の他人に対する鼓舞ではありませんから、でも、読んで下さい。ぼくのために、そして君の中の何分の一かにあたるかもしれないぼくと共通するもののために。

あるできごと。ぼくはとても卑劣なことをしました。陰険でし

た。大泥棒。石川五右衛門、カマゆでにされても良い位だ。テスト

で良い成績を取った人の名前の書かれてある紙、君も知っているでしょう、その紙をこっそりと（いやな言葉だ！）こっそりと引き破いてしまったのです。そのいまわしい行為の後、人の顔を見るたびに劣等感に苛なまれました。そして、これまでの高校生活で自分のやった事と言えば、その卑劣な行為一つきりだという意識が僕の胸をしめつけました。その出来事を反省する時に、僕は、受験競争に押しつぶされかかっている自分を発見する積りでした。高校予備校

のひずみに落ちかかっている自分を見つめる予定でいました。金をうんとかける勉強、伯父さんや母の期待の重荷、塾や予備校のトゲトゲしい奮闘気、テストの氾濫による悪い意味での比較根性の醸成、クラブや生徒会をやっている間にある友人は早く帰宅して勉強に精出している現実、そういったものがよって僕をあわて

させ、焦らせ、寂しくさせ、不安にさせ、暗くさせ、やり切れなくさせ、苦しきさせ、やぶれかぶれにさせ、そしてあのいけない行為に駆り立てた。そう解釈する気でいました。でと、とっくり考えてみると全てがお笑いでした。みんな甘ったれた考えでした。どれもこれも情けない考えばかりでした。——こういう気は山形に来てみて一層強くなりました。青臭い僕、甘ったれた僕、坊っちゃん

の僕、か細い僕、そんな僕、が塾でも予備校でも、あの紙を見上げて

いる時にでも、自分を暗い井戸の底へ追い込んで行ったのです。

『まず僕自身、清く明かるくほがらかに図太く、昇日のようにあれ。』笑っちゃいけない。真面目に読んで下さい。あの紙を引き破いたのは、自分の弱さに対する僕の嘆きのあらわれたと現在思っ

おります。

弱い人

クチビルを噛みしめろ

血がにじんでも、なを。

青臭き稚心ともオサラバだ。

そして、ただ昇日のようにあれ。

◆ 今本当にこう願っています。つまるところ、こんなところです。敬具

○後 記

二郎がこの手紙を書いた日の夕食時、お花ちゃんが余に対して注目すべてテレビシーを送ってきた。

——二郎君、二郎君。感度良ろしいか。——

はい、こちら二郎。H研究所痴漢候補生。感度良好。お花ちゃんどうぞ。——お花ちゃんはどうやら聞き違えたらしい。

——士官候補だつて？ あなた、日本では憲法第九条で軍隊を持つことは禁じられているのよ。

——お花ちゃん、そそっかしてなあ。聞き真違いだよ。頼珍漢。

——あらいやだ。わたしちゃんと聞いたわよ。

そんな意地悪言うんだつたら良いこと教えてやらない。——お花ちゃんにすねられると余は困ってしまうのである。何しろお花ちゃん

は余の太陽だから。余は素直に謝ることにした。すると、

——二郎君、やっぱり高級万年筆だけある。良い男。日本一。ジョージ・チャキリスみたい。わたしのボーイフレンドとしてまず合格。それじゃ教えてあげましょう。民江さんがね、高校卒業したら

すぐ大阪のお父様の所へ引き取られるんですって。人間の世界って不思議ねえ。――聞いた途端に余は怒った。タライ回しじゃないんだ。だが単純な万年筆である余の複雑な人間に向けた怒りは見当はずれであるかもしれない。

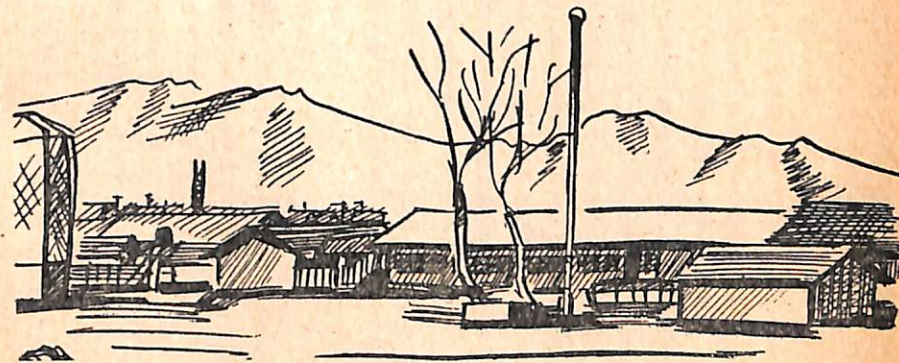
――二郎君、ごらんないよ。人間の御飯って素適ね。おいしそうだわ。――

お花ちゃんはさっき赤インクを一杯吸入して貰ったところなのにもうそんな事を言った。人間に限らず万年筆の世界でも女性は大食漢らしい。再びお花ちゃんのテレパシー。

――二郎君、あなたの御主人って三年前と少しも変わってないわ。平和な顔してよく笑うけどお話は苦手のよう。食いしん坊。それに徹底した楽道家らしい。――

御主人二郎は瞳の真中にぼおつと燃えるイロロの炎を、瞳の端に弘や花子や民江の姿を映しながら、しきりにモチを食べていた。

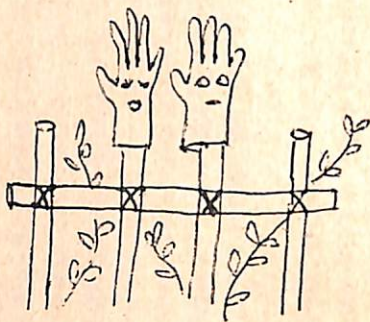
余は、そんなもんかなあ、と思った。そしてなぜか余の胸に淡い悲しみがあつた。



□ 随 筆 □

悲 し み

二年 宮 崎 裕 之



誰か人を好きに成ると時々わけもなく悲しく成る事がある。なぜだか良くわからない。もっとわからないのは、人は景色をみていて、時々悲しくなることがある事だ。「山が俺の恋人さ」と人はしばしば言う。しかし意味は異なる。これは単なる比喩に過ぎない。自然が悲しくて身も心もこがれるという事はない。景色をみていて激しいかきこみあげてくる事はなおさらあり得ない。しかし景色をみていて悲しくなること、これは絶対にある。何故だろう。景色をみていて悲しく成るのは、我々の心の中に先在的に潜んでいる悲しみが景色をみるにより再び湧き起こってくるのか、我々の心の中にそうすることによって悲しみが植えつけられるのか、

わからない。

その悲しみと、卒業の時に流す涙と同じ悲しみか否かという事もわからない。

唯、僕に言えそうなる事は、喜びと悲しみの違いは喜びを人が感じていた時はほんの部分しか彼はみていないのではない、悲しみを人が感じていた時には、人は全体を見凝めているのではない、という事である。例えば、オリンピックで優勝した者は、優勝する迄彼らが耐えた苦しい経験、つらいスランプ、……それら乗り越えて勝った。そう思っただけで喜びであるのか。違う、と私は思う。後から、その喜びをかみしめるときに人はそうするかもしれない。そうして感慨に浸るかもしれない。しかし、勝ったそのときは、勝ったこと自体がうれしいのだ。人は往々にして嬉しいときには、それ迄の苦しさは考えないものらしい。自然をみて喜びを感じるとき、人は、草の芽とか、山の頂とか、そういうものを見ているのではない。自然をみて悲しむを感じるとき彼は景色全体をみている。その総べてのファクターが一つに成って独得のムードをかもしだし、彼に訴えかけてくる何かを彼が感じているのである。卒業の際、人が涙を流すのは卒業そのものが悲しいのではない。卒業という一つの行事の中に、彼が入学した当時の事、クラブ活動の事、先生と議論したこと、喧嘩友達をつらにくさ、学園祭でかじった柿の味、赤点をとってはらはらしたこと……そうしたすべての記憶がよみがえっているのを見て彼は悲しいのではない。愛の悲しみについても同様のようだ。愛の喜びは恋人との出会い、心を伝える為の様々な工夫、相手の私を受け入れてくれたことへの歓喜。そうし

た一つ一つの断片にある。悲しみでは我々はもつとより全体をみて
いる。愛と嫉妬、競争、期待と不安と失望とそうしたもののふれあ
い。くいちがいが……要するに、愛するものと私との近づきとへだ
たりのすべてをみるときに私達はこみあげてくる悲しみにおそわ
れ、孤独にとらえられるのであると私は思う。

愛

この世の中の生命にとって、愛は貴重なものである。どこまでも
信じあい、助け合って生きて行く美しい友情は、どんなにか私達の
生活の中に潤いと夢をもたらす事か。

しかし現代の世相を形成している愛情が果してどれだけ人間を幸
福にし、人間を完成しているというのであろうか。

現代の通常の愛の在り方は、愛する事が楽しい間だけは、愛する
事が自分に何らかの利益をもたらす間だけは、自他を投げうって、
本当に愛し合っていると信じているのであり一度、愛することが何
らかの苦痛を伴う時には、愛が自分に何らかの犠牲を要求する
ときにはサッサと自分の荷をまとめて、サヨナラをするのである様な
そんな軽薄なものに私には思えるのである。何らかの苦痛が彼を襲
う時にはもう、友達でもなければ、夫婦でもない。もう君には無関
係なのだと、昨日の友が今日は仇敵と成り兼ねない。そんな世の中
である様だ。

愛情というからには、何かを愛したのには違いないのである。し
かし彼らが何を愛したかと言え、それは、その相手と共に過ごし



る。自然は、ある時は厳しく、ある時は優しく私達を迎えてくれ、
その中に、自分を溶け込ますことにより、自分を再認識する。そん
な所にも山登りの意義があると思う。心が濁っていたら、清い自然
の中に完全に溶け込むことは、きっと不可能だろう。人生の険しき
ことは、山道の如きものである。私は、その険しき山道を踏破せんと
欲し、八貫余の荷を背負い、秘めたる闘志を燃やす。

八月三十日

さて、私は、六年前、叔父と共に訪つた、あまりの美しさと、静
けさに魅了された。奥鬼怒温泉郷へ向う。水芭蕉には遅し、かと言
って、紅葉にはまだ間のあるこの辺、先日からの悪天候が影響して
か、ほとんど訪れる人としてなく、山は静粛を保っている。時折、樵
と言っても良い様な人々と会う。

「こんにちわ！」

「やあ、気を付けろな。」

山に行く人に悪人は居ないという事を思い出す。何度か丸太の橋を
渡り、溪流に沿う薄暗い林の中の小路を行くと、もう人影もない。
皆が寝静まった夜中、机に向っている時の様に、ある種の快感と恐
怖との混じった、そんな感じである。四時十分、宿泊予定地の日光
沢に到着。天幕を張った後、飯を炊くが、水量を間違えて、ものす
ごいガンタ飯(心めしのこと)。カレーをかけて炊きなおしたら、
余計まずくなり、食べられない。母の心づくしの昼食の残り、予
備食のラーメンで代用。食後、一軒しかない温泉宿の内湯に入れて
もらう。露天風呂と言った方が適確な風呂で、去年入ったばか
りの電灯が薄暗く、とほけた表情でともっている。夕日は岳樺の幹

た「楽しいひと時」なのであり、相手が自分に与えてくれた悦楽だ
けなのである。換言すれば、愛し合う喜びに酔う自分自身を可愛が
ったに過ぎないのである。ゆえに友達に冷やかされて、喜んでい
る連中を良くみかけるが、彼らは本当には愛し合っていないのであ
る。なぜならそれは、愛の喜びに酔った状態であるから。それは、
愛という仮面をかぶったエゴイズムでしかない私は言いうる。

本当の愛に於いて、愛する対象は、相手に在って、自分には無い
はずである。そして愛するという事の意味は、その相手の幸福を希
う事であって、愛する者の為には、自分で出来る事は何でもしよう
という氣に成るはずである。「愛は惜しみなく奪い、与える」と、
或る男共が言ったが、己を空しうする没我的奉仕の中に愛が、本当
の愛が宿るのである。

愛の楽しさは正当な報収であると思うのではあるが。それが失な
われた後にもなおかつ、愛するものの幸を希う気持ちだが、そしてそ
れが為の自己の奉仕が、なおも続く時にこそ、私達は始めて、私は
あの人を愛するのだ、といい得る様な氣がする。ゆえに愛情は愛の
悦楽が終わりを告げそれが裏切られたその後にこそ、はじめて、そ
の真価を発揮するものである様に私は考える。

独りぼちの山道

三年 行雲山人

人は悩み、まとまった考えを得ようとする時、又、恋をした時、
独りになりたがるものだ。私も、その類にもれず、独り山旅を試み



をピンクから真紅に染めていく。V字谷の崩れかかった岩膚が、薄
気味悪く輝く。天幕に戻り、シュラフ(寝袋)にもぐり込む。雲の
切れ間より星がチカチカ輝やいている。フツツと淋しくなると、友
の名を呼んでみる。世智辛い人間社会から逃れて唯一人、山に來た
筈なのに、人が恋しく、街の騒音が懐かしい……。ローソクの火が、
ゆらゆらゆれて消える。

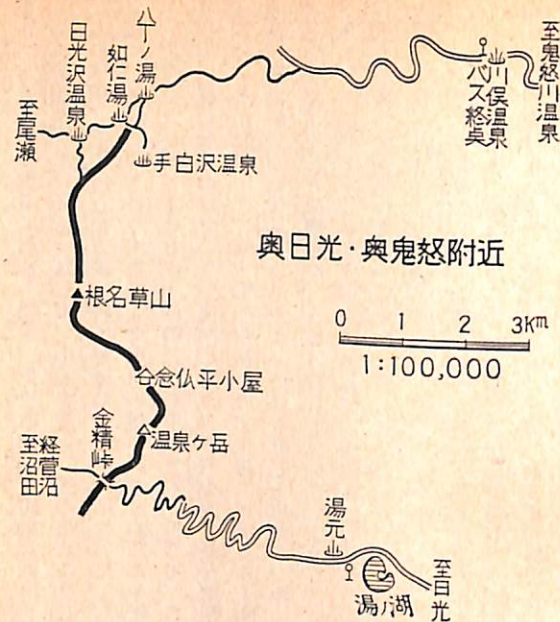
八月三十一日

翌朝、鬼怒川の水系に別れを告げて、森林の中の小路を行く。登
るにつれて、ブナ、ヒノキ、ナラ、シイなどの混交林から、針葉樹
林に変ってくる。分水嶺までの道は急で、とすると、私の足は止
まりそうになり、その度に叱咤する。「サ、頑張れ、もう少しだ
ぞ！」突然、目の前が開ける。根名草山の頂上だ。今まで林の中
で、ほとんど視界がきかなかったのが、余計素晴らしく見える。少
し離れた所には、尾瀬附近の至伝山や燧岳が、そして足元には菅沼
が、青い水をたたえているのが本当に素晴らしく見える。頂上
には、水戸から来たという、五十才位のオジサンとオバサン、東京浜
谷から来たという、二十前後のお嬢さん、三人が迎えてくれる。

お菓子交換して食べたり、話したり、歌ったりして過ごす。お蔭
で、十五分の休憩時間が、いつの間にか一時間半位にのびてしま
う。サア大変、急げや急げ。彼女達に別れ、出発。再び孤独に戻る
鳥のさえずりが妙に私の心を慰めてくれる。歩きながらも私の夢は
大きく、具体的に拡がっていく。私の頭なりに解釈されたヒューマ
ニズムと、漱石の則天去私とを、併わせた自分を想像してみる。念
伝平の避難小屋は、かなり荒れていて、日本人の公共性のなさに、

あきれてしまう。私も公共性のない人間の一人かも知れないが……小屋の裏手の清水で水を補給し、裸になって、汗にまみれた体を拭く。冷めたくて、生き返った様な気がする。温泉ヶ岳を越えたあたりから、森林の切れ間から、湖と黄緑色の平原が見え始める。湯乃湖と戦場ヶ原だ。『素敵だなあ』と心の中で何度も言う。『サア、あそこまで行けば、のんびりできるんだ、フアイト！』ハイペースで街に近ずいていく。湯元と菅沼を結ぶ金精トンネルの工事場を過ぎる頃、恐れていた雨が降り出す。仕方がないので傘をさす。大きなリックを背負って傘をさしている格好、色気ないねえ、ホント。くねくね曲った林道を、ダンブが苦しうに、ウンウンあえいで、登っていく。日も落ちる頃、私は湯元スキー場の中央に天幕を張る。スキー場、広しいえど、私の他には誰れの天幕も見当らない。届けを出す時、管理人は

「今日初めて、今年最後のお客様でしょう。」という。キャンプ場は店じまいする頃だ。すぐ近くに、共同炊事場があり、蛇口をひねれば、冷めたい水が豊富に出てくる。三十円とったんだからそれ位当然である。フランスパンを一個かじった後、温泉につかりに行く。湯元の町の一端にある、窓ガラスは、所々割れて、道路からちらちらと見える風呂である。湯は、乳白色の日光沢と違って、透明である。もちろん無料。シャツ一枚に登山靴をつっかけて、天幕に戻る。途中で買った五十円のシャベットの食べながら、……。（ここで五十円使ったために後で大変な目に合うことになる。）熱い飯と、カンヅメのすき焼きに舌づつみを打った後、管理人の所へ建設的な遊びとして名高い、ブロック建築、すなわちマージャンを



最後に、教養のある所で山男の学名を紹介いたしましょう。『ガクトロブスIIヘコタレネシス』 北京原人のことは『シナントロプスIIベケンネシス』と言うこともついでにね。

行雲山人こと 江口 和孝

やりに行く。イチチャンやって、十二時頃、天幕に戻り、再び湖畔に出てみる。人影の絶えた道が冷めたく続き、ホテルの灯も、一つ二つと視界から去って、静かな湖のたたずまいである。凍った様な石のベンチに座っていると、気が遠くなってしまう。万物は寝静まり、水鳥だけが小さくつぶやう様に鳥くのにも、胸に迫る物を感じる。さあ、私も寝ぐらに帰るとしよう。

九月一日

ゆっくり朝食をすませて、天幕を撤集、リックに家財道具をつめ込んで、バス停へ行く。そこへ荷を置き、土産物屋で友人に絵端書を書いて出す。バス停で乗車券を買う時、荷物料金もとるといふ。サア大変。お金が足りない。さっきの土産物屋へ行き、わけを話して、二つ買った土産物を一つにしてもらう。ああ、恥かしい。

学校の事が浮かんでくる。今頃始業式の後、恒例の大掃除を、一生けん命やっていることだろう。『ゴクローサン！』

十一時湯元発日行のバスで下山。東都電環までの料金と十円玉一つ、一円玉三つの財布をにぎりしめた私を乗せて、バスは容赦なくへいろは坂を下っていく。

これで山ともお別れ。想い出のページを飾るこの山行、幾多の他人の好意を受け、人間の心の美しさを味わい、その反面、それとは全く異なる、醜さとエゴイズムとを身をもって体験した感がある。自然の美の中で、自分を深く見つめて、反省することができ、人間的な面で大変貴重な経験を得たと思う。孤独の良さの反面、夜中などのそれは本当に耐えがたいものであるが、それだけに得る所も多いはずである。

読書雑誌 (日記より抜粋)

三年 横山 淳

◇四月八日(水)

始業式。三年B組、男子クラスである。S君曰く「アア、色気ネエナア。」こんなチツポケな所に、五十五人もの野獣がおしこめられているんじゃ、今に暴動でも起しかねない。

今、「女の学校、ロベール、未完の告白」を読んでいる。ジイドといえは、「狭き門」も読み返してみた。最近しきりに彼の作品が目につく。全部、読破してみたいが、果して受験期がそれを許すかどうか。ジイドには誠実さがあると新庄さんが述べているが、そこにひかれるのかも知れぬ。ジイドの「女の学校」を読むと、イブセンの「人形の家」を読み返してみたい。『女の』延長線、或は結局が「人形」なのである。うまく言い表わせないが、結婚し子供を生んだエヴリースは、「たとえロベール(夫)に失望し、軽蔑の念を抱いていても、別れずに夫の欠点を子供達に見せないように、貴女が補い、ロベールに奉仕する事だ。」と神父に言われる。彼女は素直にはうなづきかねる面持ちであるが、娘のジュヌヴィエーブが彼女の恐れていた事をしゃべり出し、ロベールの前でも平然と言っているのだと言う。女性はいくまでしても、夫に奉仕し犠牲を払わねばならぬのか？

又、作者はエヴリースの口を借りて「ロベールの行為は、偽善ではなく自分自身を騙しているにすぎない」と言っているが、だとし

でもやはり、ロベールは自分に対しての偽善行為ではなからうか。

◇七月三日(金)

昨日、四人でテーブルを囲んでガチャガチャする中国語の勉強の過労がたたり、今期は頭が痛い。夜までに、井上靖の「風濤」を読み終える。三十八年、「群像」に掲載されたもの。デンギスカン率いる蒙古の台頭によって、又も半島に馬蹄をかけられた、十三世紀初頭から二度の元寇に、高麗という一小国が追ねばならなかった悲劇を綴ったもの。

世祖フビライの温情さに隠れる偽善。世祖の過酷な面をムキ出しにした洪茶丘の所為。終始一貫して、小国を憂え、国のために尽した二人の宰相、季藏用と金方慶(特に後者の、元の命によって二度の元寇に、老駁にムチ打って参加した堅忍不拔の意志と鋼鉄の身体には、感泣したい。)—それに小国の二代の王(元宗、忠烈王)の人物描写に感心せずにはおかぬ何かがあり、この小説を最後まで読まずにはいられなかった。唯、惜しむらくは、世祖フビライの人間の性格の表現が、少し物足りなかった。いつも感じる事だが、井上靖の歴史小説は史実と虚構とが、うまく調和していないようだ。が、久し振りに井上作品の歴史小説に触れて、受験というものから、自分を遠い所へ連れて行ってくれた感じがした。

◇七月二十日(月)

二、三日前に高村光太郎作「智恵子抄」を読む。他人が見たら白痴である智恵子。その純な愛情によって浄化された作者の、—智恵子のそれにも負けない—強い愛情。二人の愛情の強さと、清澄さに心打たれた。今日一日で、水上勉作「越前竹人形」を終える。喜助の



子ネコが出てきた。又々始まる、ドタバタ喜劇。冗談じゃない、子ネコにしてみりや、喜劇なんぞとシャレのめしている場合じゃない。必死の思いで逃げ回っている。僕の背は、もう少しで折れそうな程。とんだネコ騒動の一幕。

猫と云えば、最近ボートの「黒猫」を読んだ。こちらは主人公の歪んだ愛情から起る惨劇。自分で自分を制しきれないモドカシサから、酒びたりになり、果ては妻をも殺害してしまう。彼の弱さと異常さがよく表われていた。最後のチョッピリカラシが開いたドンデン返しなんだ、粋きなもんだ。

◇十二月二十九日(火)

部屋の掃除。小休止で、テレビの再放送「愛と死をみつめて」を見る。小休止が大休止に、急遽変更。河野さんへ。どうか、これからの貴方の人生を踏み誤らないように。そして、素晴らしい恋人をみつめて、もう二度と「愛と死を—」書かないように祈ります。

全体、私小説というのは、日本人の好みに合うかどうか知らぬが、お涙丁載にも幻惑される。しかし、それにも限りがある。私小説ばかり書き続けている作家も居まい。小説とはフィクションだからである。

◇一月十五日(金)

小林秀雄の「無常という事」を買ってきたが、読めない字やわからない語句でフーフー言っている。戦争中に書かれたものもあるし、小林という人は、好んで反語、パラドクスを使ったり、当用漢字を無視するといった自己流なので、実に骨が折れる。

◇一月三十日(土)

変則的愛情と、玉枝という女性の精神と肉体の遊離に、終始、もどかしい気持ちで読み終えた。後味の良いものではなかった。玉枝の懷妊が喜助にわかった方が、節としては面白からうが、それでは「越後つづいし親知らず」と同様なストーリーリーになってしまったため、作者は避けたのであろう。流行作家の多作なるが故の悲劇である。

今日は、終業式。校長の訓辞の長い事と、各教師の伝達要領を得ていないのに閉口した。倒れる者が、五、六名居た。たかが一時間位、立っているのは何でもないが、もっとテキパキした式を行なわなくては、近代化という言葉が泣けてくる。

◇八月十七日(月)

吉田から借りている「江戸幕府」は、徳川家康を読んでいたおかげで興味深く読める。

「羅生門、鼻、芋粥」—芥川著。「盗賊」の太郎に非常な共感を憶える。殊に弟の次郎を野犬の群から救い出すシーンは、胸がつまる

◇十二月二十八日(月)

物置きで生れた他所の子ネコが、家の中へ迷い込んで来た。台所で母に追われ、アワテ作曲屋さん(自称)の部屋へ。弟とホウキで追い回したが、ピアノの下へ入ったまま出てこない。出そうとすると、いっそう怖がって、かたくなになるばかりである。弟と僕は諦めて、又テレビへかじりつく。母は追い出そうと懸命。二人は知らん顔を装う。そのうち、猫が死んだように動かないという母の声。まだ、テレビを見てみると、今度は本当に死んだという。仕方無く、僕がピアノの下に四ツンバイになり、弟と一、二の三で持ち上げる。そのすきに母がホウキで追い出す。そうこうして、やっと



カゼをひいてカッターイ。

芥川の「侏儒の言葉」の中にこんながある。「完全に自己を告白する事は何人にも出来ることではない。同時に自己を告白せずには如何なる表現も出来るものではない。」

いささか、うなづける点がある。自分の日記でさえも、文体に虚飾がチラつく。まるで誰かに日記を見られるのを意識して書いているようだ。日記には、常に正直で真摯であり、そこには一片の虚飾や虚偽があつてはならないはずだ。この世に虚飾が無かったら、ミエという物が無かったら、どんなに良いだろう。大学でさえも、ミエのために行く者がある。そういう自分も、小林、芥川等を読み出した。試験に出る率が多いという、唯それだけで。自分の好きな創作や、翻訳本の読書はどうした。そんな暇が無い程、受験勉強をやっているまい。そう受験のためには、新聞の論説、漱石の「草枕」和辻、亀井、寺田、岡崎等の作品を読まねばならぬ。だがこの僕は、高校三年間でトルストイの「戦争と平和」さえも読めなかった。本を読んでもない大学生なんて考えただけでもゾツとする。こうしているうちにも、受験日は一日と迫ってくる。今は唯、何事も考えずに、ひたすら受験のための勉強をする事だけだろう。

サンポ

一年 一瀬美江子

駅まで徒歩三分。ガス、水道設備あり。子供可。部屋代勉強し

ずされてゐるだろう。そんな処に住んでいた私は、隣の町へ引越しして以来一度もその家の前を通つたことがなかった。はずかしがりやという一面を持っていて、知っている人に会うのが嫌なので、近くにある用事があつてもその道を通らず遠回りをしてゐた。その日もそこへ行く気持ちなど毛頭なかったのだが、今度来ることができるようなのはいつの日かわからないのと、どんな風になつたかこの目でみたいので、行く決心をした。五〇メートルぐらいのまっすぐな小道、暗く暮れかかった夕日がその道を陰気に映しだしてゐた。「来なかつた方が良かったんだ。」と自分自身を責めてしまつた。でも道の半分以上来た今では引き返すわけにはゆかない。右に小学校の体育館、左に駐車場となつてしまつたあき地が目に入つた。ここに十四年間も住んでいたかと思うと、つい感傷的になつてしまつた。あれ程広いと思つてゐた物干し場がちつぽけな道と化してしまひ。これ又大きいと思つてゐたアパートがマッチ箱のように感じられてしまつた。なぜだろうとしばらく考え込んでしまつた。ふつと頭にその原因が浮かんできた。現在住んでゐるところは鉄筋の四階建て何棟もすらすらと並んで広い遊び場があるのだつた。

その家にはずい分きれいな女学生がいた。

わたしはその頃まだ小学生だったけれども、やさしうでとても美しかった、その人を今でも忘れられない。その人は、そこが小学

雜
感

二年山崎朱実

(→) およそ文学に似つかない私が、それに興味を示しているのをなんと思ふであらうか。

ロマンチストな文学少女とは縁遠い私でも、藤村の詩を覚え、ベルレエヌに感激するのである。文学に興味を示したのが、何日ごころであったかは、まるっきり見当がつかない。小さい時から本が好きたつたから、その影響もあるだろう。

——ホームルームの時『尊敬する小説家はだれか。』と言う質問をされた。小説や詩を他の人よりも多少読んでいるだけの、文学の上側のほんの一部分をかじったにすぎないので、そんな難しい質問に答えるのは困難だった。が、時間に迫まられていたので、答えた私はまだ、その人を尊敬する程読んでいないし、その代表作の内容も良く理解していなかった。

『軽はずみな事をした。』と侮んでみたけれど、どうにもならない。単にその人の作品が好きということだけで、後で訂正しようと思った。けれど思っただけで、実行に移さなかった。その時の事を考えると、今でも恥かしい気持ちになってしまう。

校に買いとられたという噂がたち始めた時、一家あげて引越してしまつた。その時から正門と勝手口に『立入禁止』の札が釘うちされてゐた。内部は小礫が隅々に敷き渡され、一定の間隔で灌木が植えられていた。そして、もっと奥の庭には温室があつた。だれも住んでいない屋敷は、たまに監視人がくるだけで大人の人はいなくなつた。それ以来、中へ入りたくてうずうずしていたアパートの腕白坊主達は、電柱によじのぼり高いへいをのり越えて侵入し始めた。まさしくそこは、絶好の遊び場となつたのである。わたしもその仲間の一入だつた。現在奄美大島へ歸つてしまつた友人と毎日夕食時になるまで遊びまわつてゐた。誰も手入れをしなくなったので屋敷の草や木はのび放題にのび始めた。整然とした美から野生美に変化した。わたしは心ひそかに日本式秘密の花園だなと思つて嬉しくてしょうがなかつた。小学校もその頃非常につまらなかつたのでわたしは授業が終わるのを今か今かと待ち、掃除当番など男子にやらせて友人と一緒にさつさと歸つてしまつた。そこにはアーチ風に作られた小枝があり、その下を通る時の気持は何とも言い表わせないうきうきした気持ちで一ぱいだつた。夏などきれいな花がちちらこちに咲きみだれて、あまりその量が多いので家に持ち帰つて自分の家の花壇に植えたことがあつた。道路から長いゴザをくぐるるとまいて男の子にへいの中にはおつてもらつたことがある。そしてそばの草を引きぬいておままごとのおかずにしたことがあつた。あつそういう場所がこの小さい体育館に化してしまつたととは、寂しいやら恨めしいやらでゴツチャになつてしまつた。

買い物客で道が混み始めた。知人には会わなくてすんだし、小さ

——これもホーム・ルームの時だ……

『将来何になりたいか』という題で話し合った。私の番がきた時私は、なんとはなしに『小説家になりたい。』といった。

(べつに夢や希望をいったのだから、なんでもないが……)

私は小説家になりたいとは思っていても、私の才が、一分の成功率もないのを知っているから、そういう風に言うつもりはなかった。

私よりも前の何人かが、小説家と答えた。それを聞いて、ふっと私も小説家と口に出して言いたくなくて、言ってしまった。

後、『小説家が随分多かつたわね』という声を聞くと、『私、本当はね、詩人がいいわ、じゃなかつたら歌人』いとも簡単そうに、すまして言っていた。(恥知らずと思つた人もあつた事でしよう)

しばらくして、この言葉が気になってしまった。

私は日本文学の方が外国文学よりもずっと好きである。短歌が好きなので、時折、自分でも、五本の指をおりながら考える。

短歌、日本文学の最も秀れた一つであろうと思っている。三十一文字の中に、作者の気持、その時の情景を入れて、そしてそこにロマンチックなものがあつて、悲しげなもの、楽しげなものがある。素敵だなあ、と言うよりほかない。

小説でも、特有の言い回しがあり、そして、そこに出てくる人々の心がみごとに描かれてしまっている。日本文学の方が良いと思う狭い枠に閉じ込められてしまう、と言う人もあろう、が私はそうは思わない。あの訳文のまどろっこしさや、途中でそれが誰だか、わからなくなるような、ややこしい名前がでてきたりするものが、どうも好きになれない。まず身近なものから理解してからこそ、

外国のものを読み、それを理解していくのが、本当に意味のあるものになっていくだろうと思うが、どうだろう。

文学を愛するというほどでもないが好きである。こりもしないで、相変らず、私は詩を書き、短歌を読み、そして、時折、物好きにわざわざ他人に恥を見せるように投稿する。

(二)

前にも書いたが、一年の時将来の希望を問われた。女は、種々それが可能であると思われるものを答えた。

私は男子の答えに、少々疑問を持った。

多くの男子が、世界への進出を考えている。(それは夢であるだけかもしれない)しかしそう考える事は、本当にそうしたいと希望でもあると思う。大きな希望を持つ事は、本当に良い事だと思う。

しかし、『日本みたいな、こんなちっぽけな国にいたってしょうがない。世界へ進出していきたい』と言った。A君の言葉が、妙に私を不安にさせた。『日本を捨てて』という風に感じられたからである。A君はそんなつもりで言ったのではなかったにしても、狭いちっぽけな日本は、私達の故国である。世界に進出するのは、良い事だが、それがなにか、卑怯な事ではないか、と考える。つまり、そうするのは、故国に見切りをつけて、世界に進むことであろうと、私は思うからである。故国を捨てると思う前に、一度でも、故国を救う事を考えただろうか。

次代を担うべき、人々がそんな逃げ腰でいる事が不安でならないもちろん、あの故国のために、親も、友も、恋人まで捨てて、突撃した兵士のようなであれと、言うのではない。各個人の自由と幸福

それでもまだ、一人どら声で歌って、悦に入っている、へたの横好きとはよく言ったものだと思心している。

落語。用のある時以外は、なるべくテレビ寄席などを見る。誰がいようと、いまいと大声で笑いながら見る。初めての人が、私を見たら、なんと思うだろうか。笑う門には福来たる、という格言もある事だし、たいして気にしていない。

しゃれが好きで、ときどき言うが、自分が先に笑ってしまうので、なんにもならない。

結局、私は、なんでも一応は興味を持つがどれも中途半端になってしまう。

「冬の富士山麓を走る」

二年 大塚 隆 夫

一月のマラソン大会が終った日の午後、俺と友人Q氏は山中湖めぐとしてオールドバイをスタートさせた。俺の愛車は改造した、カブC一〇〇、Q氏のはスポーツカブC一〇〇。エンジンが快調で甲州街道をつっぱしる。休日のためか、白バイは白くないが先は長い事だし時速四〇キロに押えた。平凡な甲州街道も日野市に入る頃から都内を出たな、と感じられる様になって来た。やがて八王子市の商店街に入る。かなりにぎやかな町で人通りも多い。ガス欠が心配なので二〇入れる、一二〇円也。高尾山の駅をこえるとすぐ高尾山である。休憩したかったが、そのまま走る。やがてまわりはどこをみて

が生存されてから、本当の平和な国家が存在する。

どうか、我々の国をより良いものにしていくと考える人があって欲しい。

だが、私自身そう考えてはいても、女子という事を意識してしまふ。おおいに努力しなければと思う。

(三)

「趣味は」そうきかれる度に私は困ってしまう。特定の趣味というものが、自分自身、なんであるかわからないからである。

趣味、そういう風に呼ぶのに、私はいろいろなものがある。読書音楽。落語を聞く事、建築設計図をみたり、書いたりする事。散歩など、スポーツも見る事は大好きである。

音楽、クラシックファンである。大体一度聞いて、良いな、と思うと、もうそれが好きになってしまう。特に、マーチなんか好きである。一度私自身、やった事があるからであろう。それにあの力強い音に引き込まれてしまう。しかしレコードを聞く時間は、音楽の時間ぐらゐである。ビクターのモニターに応募してなったが、単に音色が美しいぐらゐしかわからないので、モニターたる資格があるかわからない。

歌も大好きである。民謡とか童謡とかが、特に好きだ、音楽部合唱班に入ったのは、よかったが、練習の時、ひどい劣等感におそわれた。それでも、文化祭の時、舞台にたった。なるべく人の影に居ようと、努力した。

その結果、『見えなかったわ、いたの。』と言われた時には、安堵の尾を下した。

も山ばかりになった。上り坂だがトップで上る。この辺に来るとさすがに少しばかり旅情を感じる。のぼらく上り坂がつづく、東京都と神奈川県境の大垂水峠である。大垂水峠からはかなりの下りで、エンジンを切って走ったが、それでも四〇キロのペースは落ちない。しばらくすると相模湖が見えて来た。左手にダムを見ながら、甲州街道沿いの休憩所まで走る。休憩所に着いたのは二時四〇分、家を出てから一時間五〇分である。五分程休んで、また車にのる。小さなトンネルをこえと、工事中で一〇〇米ばかり砂利道である。それからあとは左に桂川、右に山の平凡な山道、それがかなり続くと、やっと猿橋である。新猿橋をわたって大月市に至る。ここで甲州街道と別れて国道一三九号線に入る。

少し起って小休止、手が冷い。その上で落ちて来た。すぐ出発。やがて富士吉田市に入る。道がわからないので、近くの商店の人に聞く。しばらく走ると山中湖まであと五キロの標識があった。五時近くなって山中湖につく。着いたのは良いが、泊る所がない。湖畔を走ってさがあるのは、どこかの会社の寮ばかり、キャンプ場は冬なのでしまっている。仕方なしに旅館に泊る事にした。腹がへっていたので、そばを注文。一人一五〇円也にはおどろいた。この分では、宿代はどの位とられるのだらうと心配したが向うも俺たちの様子を見たのか五〇〇円にしてくれた。部屋に案内されると、すぐ風呂に入って今日のほこりを落とす。九時半に寝る。翌二十五日は八時に起床、八〇也の定食を食べる。そこのおかみさんにスケートはどが良いかと聞くと平野(ひらの)が良いというのでそこへ行く事にした。九時出発。さて湖畔へ行くと、どこかのお

ばさんがやってきて火にあたっていけという。俺たちも好意を無にしちゃ悪いと思ったので火にあたっていくことにした。そこでスケートぐつをはき、くつを預けて三〇円也、どこまでもがめつ。金を払ってさっそうと滑り出したと書けば聞えは良いが、俺はまだ初心者で以前に一回しかやった事がなかった。まあともかく無事にすべる。一時にあがって、貸スケートを返しに行き、身分証明書とヘルメットを返してもらう。帰路は来る時と同じ国道一三八号線を富士を見ながら走る。途中、道をまちがえて下吉田駅へ出てしまった。そこで昼食、七〇円也。その人に道をきいて富士吉田へ出る。帰りは辛い。行けども行けども同じ様な山ばかり、四時に相模湖着。五分休んでまた出発。八王寺、日野、府中と通過して、つづじヶ丘、八幡山あたりに来るとつかれて体が動かない。Q氏はと見ると車のハンドルが小さいので、俺よりへばっているらしい。俺のアップはその点だ。桜上永を通って一分ぐらいの所でQ氏と別れをつける。二分後、家についた。車をおりと足がふらふらする。つらかったけれども、又楽しかった二四五キロの旅だった。

編集後記

「オワッタ。オワッタ。」そんな気持で、胸が一杯。そして解放感。

例年、文化委員はこの欄で、原稿の不足を嘆くか、あるいは、原稿の集まり過ぎでうれしい悲鳴を上げた事を書く。今年もまず原稿の事について書こう。

今年は原稿を集めたのが、三学期になってからであった。最初は、原稿が集まらなかった。どうなるものかと成りゆきを心配したものだ。そして、締切日間近にわかに、原稿が集まり出した。それも大作ばかり。計算してみると、予定の一〇〇ページをはるかに越える。そこで、何人かで話し読んで選択。ここで、原稿を落さなければならぬ。うれしい悲鳴である。

次に、カットや表紙。人に頼んだり、色々苦労しました。

最後に出来ばえ。一口に言ってもあまりよくできたとは思っていません。それでです、我と思わん方は、来年、文化委員となって生徒会誌「くるくる」のより一層の発展に尽力くださいませんでしよか。

“るくー”

第13号

昭和四十年三月十日印刷
昭和四十年三月十七日発行

編集所

東京都世田谷区上北沢一ノ四二九

発行所

都立松原高等学校文化委員会

都立松原高等学校生徒会

印刷所

東京都渋谷区幡ヶ谷二ノ二二

竹内美術印刷株式会社

TEL(376)二四〇一〜三番

